

青森市埋蔵文化財調査報告書 第75集

江 渡 遺 跡

発掘調査報告書

平成15年度

青森市教育委員会

青森市埋蔵文化財調査報告書 第75集

え
ど
江 渡 遺 跡

発掘調査報告書

平成15年度

青森市教育委員会

序

青森市内では平成 15 年 4 月 1 日現在 301 力所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されており、本市の歴史を紐解く上で貴重な資料が埋蔵されている状況にあります。

市内の至るところでは、現在の私たちの生活の利便性を向上させるための公共事業や民間事業者による開発行為が行われております。

開発行為が周知の埋蔵文化財包蔵地内で行われる場合、埋蔵文化財保護と開発行為との調整を図る必要があり、遺跡の保存が難しい場合、記録保存という形で発掘調査が実施されることになります。

本書は、民間事業者の開発行為に伴い、平成 15 年度に実施した江渡遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

本調査は平成 15 年度の年度途中に急遽実施され、その結果、縄文時代および平安時代の竪穴建物跡等の遺構が見つかりました。

この遺跡は、当委員会では調査実績が少ない西部地区の住宅地内に所在する遺跡であり、これまでの山間部付近の調査成果とは異なる貴重な資料を得ることとなりました。

最後に、本書を刊行するにあたり調査委託者をはじめとした関係諸機関および関係各位のご理解・ご協力に対し深く感謝の意を表する次第です。

平成 16 年 3 月

青森市教育委員会

教育長 角田 詮二郎

例　　言

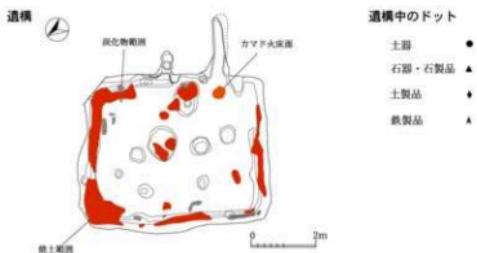
1. 本書は、株式会社大進建設から青森市が委託を受けて、平成15年度に発掘調査を実施した江渡遺跡（青森県遺跡番号01163）の報告書である。
2. 本書に記載される内容は、株式会社大進建設が計画した分譲宅地造成予定地内に関する部分についてまとめたものである。
3. 発掘調査は、当委員会が平成15年度4月に実施した市内遺跡発掘調査事業における範囲確認調査によって造成対象面積5,657m²に対し調査必要範囲を2,770m²と確定し、調査必要範囲について発掘調査を実施している。最終的な調査面積は3,116m²である。
4. 江渡遺跡は、昭和54年度に青森県教育委員会により台帳登録がされている遺跡である。しかし、遺跡の範囲や詳細な状況等が不明であったため、前述のとおり、分譲宅地開発に伴い、平成15年度当初に市内遺跡発掘調査事業で範囲確認調査を実施して内容を確認している。範囲確認調査の結果については本書第Ⅲ章中にも記載しているが、事業そのものの成果としては市内遺跡発掘調査事業に帰するものであり、範囲確認調査成果については本年度中に刊行される『市内遺跡発掘調査報告書12』（青森市埋蔵文化財調査報告書第74集）内に掲載されている。
5. 発掘調査は、範囲確認調査の成果を得て平成15年8月1日～10月8日までの期間で実施する計画で設定された。調査の結果、調査にあたった人員の熟練度や機械化作業による大幅な効率化により、調査期間を短縮して終了している。期間短縮後の調査期間は平成15年8月1日～9月5日である。また、整理作業については年度内整理とし、平成15年12月14日～平成16年3月31日までとした。
6. 本書の執筆・編集は青森市教育委員会が行い、木村淳一、相馬俊也（青森市埋蔵文化財調査員）、松橋智佳子（青森市埋蔵文化財調査員）が担当した。執筆・作成分担については、第V章第1節1、及び第2・VI章第2節について相馬が、第V章第1節2、について松橋が、その他の部分の執筆および編集を木村が担当した。
7. 調査に関わる出土遺物及び記録図面・写真関係資料は、現在、青森市教育委員会で保管している。
8. 発掘調査及び本書作成にあたり、下記の方をはじめ多くの方々からご指導・ご協力をいただいた。（五十音順・敬称略）

青森県教育庁文化財保護課、青森県埋蔵文化財調査センター、浅田智晴、伊藤武士、岩井浩介、岩田安之、宇部則保、小笠原雅行、木村高、越田賢一郎、小松隆史、小松有希子、齋藤淳、榎原滋高、佐野忠史、茅野嘉雄、中嶋友文、成田誠治、平山明寿、藤原弘明

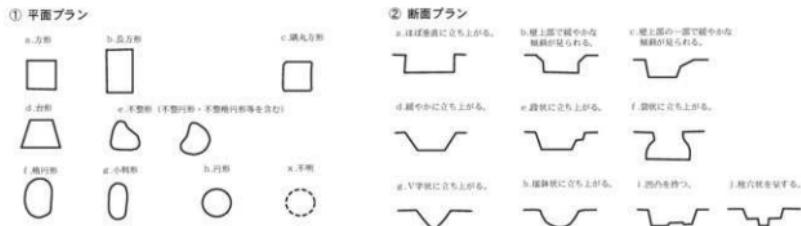
凡　　例

- 図版番号は、本文中に図示したものについては「第〇図」、それ以外については「図版〇」とした。表番号については「第〇表」とした。
- 遺構の掲載について
 - 方位は国土地理院第X系平面直角座標系に基づく座標北である。
 - 各図の縮尺は以下の通りである。

1/25,000 1/10,000 1/2,500 1/500 1/180 1/60 1/30
 - 水平基準は海拔高をメートル(m)で表示した。
 - 遺構の略号は、SI = 壁穴建物(住居)跡、SK = 土坑、SP = ピット、SD = 溝跡、SC = 埋設土器遺構、SX = その他の遺構である。本書で用いられる遺構の名称のうち、壁穴建物跡は通常壁穴住居跡と呼称される遺構と同質のものであるが、本遺跡から検出した遺構の中には居住以外に使用された可能性を有するものも含まれるため、建物跡という呼称を用いた。
 - 遺構番号については、遺構の種別毎に番号を付した。具体的には遺構の略号+番号とした。(例: 第1号壁穴建物跡 = S I - 0 1)
 - 本書で使われるグリッドについては、調査時に任意の基準点を設け、そこを基準とした座標値を用いている。なお、任意の基準点については発掘調査終了後、CADソフトで公共座標値を計算している。基準の軸線については、南北軸をX軸、東西軸をY軸としている。各軸線のうち、X軸については南側から北側に向かって、Y軸については西側から東側に向かってそれぞれ数字が増えるように付している。本書における表記について一部の図版において10m単位のグリッドを用い表示している。また、各遺構の位置については中心点の座標について表示した。
 - 本書の土層の注記については、『新版標準土色図』(小山正忠・竹原秀雄 1996)に準拠した。
 - 遺構の規模については、基本的に長軸×短軸×深さをcmで表示した。このうち深さについては、遺構確認面からの計測値を記した。
 - 本書の遺構図中で使用されるドット等の指示については下図のとおりである。



(10) 遺構観察表の中で標記されている類型化の記号は当委員会が平成14年度に刊行した『雲谷山吹(4)～(7) 遺跡発掘調査報告書』(青森市教育委員会2003)で提示した類型化に基づき提示している。

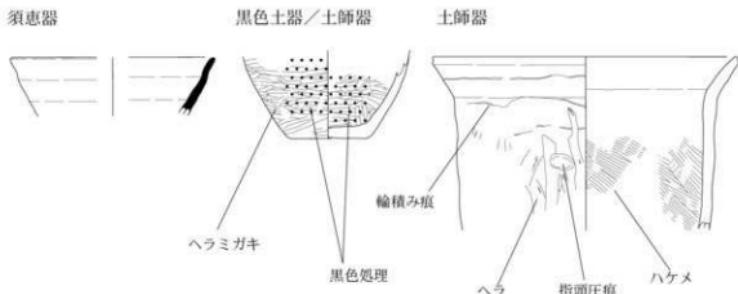


3. 遺物の掲載について

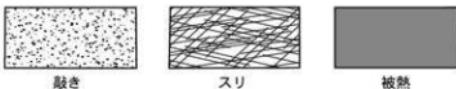
(1) 各図の縮尺は以下のとおりである。

土器 1/3・1/9 石器 1/1.5・1/3 土製品 1/3 鉄製品 1/1.5 石製品 1/3

(2) 遺物実測図の表現



石器の遺物図版中で使用される網掛けの指示については下図のとおりである。



目 次

序
例言
凡例
目次

第Ⅰ章 調査経緯	第V章 出土遺物
第1節 調査に至る経緯 ······ 1	第1節 縄文時代の遺物 ······ 25
第2節 調査要項 ······ 2	1. 土器 ······ 28
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2. 石器 ······ 28
第1節 遺跡の位置と地理的環境 ······ 3	第2節 弥生時代の遺物 ······ 28
第2節 歴史的環境 ······ 4	1. 土器 ······ 28
第Ⅲ章 調査の概要	3. 土器 ······ 29
第1節 範囲確認調査 ······ 7	4. 石器 ······ 42
第2節 本発掘調査 ······ 8	第3節 古代の遺物 ······ 42
第3節 調査方法 ······ 8	1. 土器 ······ 43
第4節 地形と層序 ······ 10	2. 鉄製品・鉄滓 ······ 43
第5節 発掘調査経過 (抄) ······ 11	3. 土器 ······ 43
第6節 整理作業および本書の編集について ······ 11	4. 石器 ······ 43
第IV章 検出遺構	観察表 ······ 43 ~ 49
第1節 縄文時代の遺構	図版
1. 竪穴建物跡 ······ 13	写真図版
2. 埋設土器遺構 ······ 13	
3. 土坑 ······ 14	第VI章 統括
4. その他の遺構 ······ 14	第1節 遺構 ······ 97
第2節 弥生時代以降の遺構	第2節 遺物 ······ 99
1. 土坑 ······ 14	第3節 古代の遺物と竪穴建物の変遷について ······ 103
第3節 古代の遺構	
1. 竪穴建物跡 ······ 15	
2. 土坑 ······ 19	引用参考文献 ······ 112
3. ピット ······ 20	まとめ ······ 113
第4節 時期不明の遺構	報告書抄録 ······ 114
1. 竪穴建物跡 ······ 20	既刊埋蔵文化財関係報告書一覧 ······ 115
2. 土坑 ······ 21	
3. ピット ······ 22	
4. 焼土状遺構 ······ 24	
5. その他の遺構 ······ 24	

第Ⅰ章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

株式会社大進建設（以下大進建設）は、市内大字石江字江渡の一画に分譲宅地の造成を計画し、都市計画法第32条関連の事前協議として、平成15年1月27日に青森市教育委員会文化財課（以下当課）に来課し、開発計画予定地内に遺跡が所在するかどうか照会した。

照会の結果、造成予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である江渡遺跡（青森県遺跡台帳番号01-163）に該当していることが確認され、当課と協議が必要である旨を伝達した。

協議において、周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発行為であることから文化財保護法第57条の2関係の発掘届（工事届）の提出が事前に必要であることと、江渡遺跡は、周知の遺跡でありながら既往の調査実績がなく、周辺の登録されている遺跡についても不明な点が多い状況であったことから、雪解け後の平成15年度に入って造成対象範囲内に対し、遺跡範囲確認調査を実施し、その調査結果を基に取扱いについて再度協議することとなった。

この協議の結果に基づき、大進建設は平成15年2月6日付けで青森市教育委員会教育長宛に土木工事等のための発掘に関する届出書を提出し、平成15年2月17日付け青教文第1180号にて青森市教育委員会教育長から事前の発掘調査が必要である旨の回答がなされた。

年度を明けて、平成15年度に入り、当課職員が開発予定地に対し現況を確認し、造成予定地5,657m²に対し、範囲確認調査の日程を平成15年4月16～18日の3日間と設定した。

範囲確認調査の結果、造成対象地区の約2,770m²から繩文時代および平安時代の堅穴建物跡、土坑等が確認され、周知の遺跡の範囲内であることが確認された。この調査結果を基に、当課は再度大進建設と協議し、開発計画について見直しや検討を依頼した。

これに対し、大進建設では、現在周辺で進みつつある東北新幹線工事の用地買収関係で、移転を余儀なくされている住民の移転候補地等の提供も踏まえ、開発の変更は難しいという結果となり、当課との協議の結果、埋蔵文化財保護と開発行為との円滑な調整を図るため、発掘調査を実施する方向性となった。

その結果、大進建設は、平成15年6月27日付けで青森市教育委員会教育長宛てに発掘調査の依頼をした。当委員会では、既に平成15年度の各発掘調査事業を実施中で、調査担当者4名が各調査に張り付いており、対応が難しい状況ではあったが、「開発行為と埋蔵文化財保護との円滑な調整を図る」という理念の下、緊急的に対応できる体制に迫られた。

その頃、江渡遺跡から約2km離れた石江地区では、担当者1名及び臨時職員の調査員2名の体制で土地区画整理事業に係る発掘調査（調査対象面積24,000m²）及び東北新幹線新青森駅建設に係る試掘調査（調査対象範囲18,000m²）を実施している最中であった。

東北新幹線関連の試掘調査が7月18日をもって終了予定であったことから、二事業を抱えていた担当者1名が8月から2ヶ月間、江渡遺跡の調査担当者となり、区画整理事業については調査員2名を調査専従として、担当者が江渡遺跡の調査に従事しながら統括するという形をとることで、対応することになった。さらに調査補助員については、既に調査を実施中であった他の遺跡の熟練度の高い調査補助員を配置換えして対応することとした。

この調査体制に基づいて、平成15年7月25日付け青市教委文第147号にて発掘調査受諾の旨を大進建設に回答をした。

発掘調査は、範囲確認調査結果に基づき2,770m²に対し、平成15年8月1日～10月8日の期間で実施することとなった。

また、予算措置については、平成15年度は年度途中であったことから緊急的に非計上費で対応し、9月補正後計上費として予算措置を行った。

第2節 調査要項

1. 調査目的

民間業者が計画する分譲宅地造成工事に先立ち、工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。

2. 遺跡名及び所在地

江渡遺跡（青森県遺跡番号 01163）青森県青森市大字石江字江渡104-2ほか

3. 事業年度 平成15年度
4. 発掘調査期間 平成15年8月1日～9月5日（当初予定平成15年8月1日～10月8日）
5. 整理作業期間 平成15年12月14日～平成16年3月31日
6. 調査面積 3,116m²（工事対象面積5,657m²、調査対象面積2,770m²）
7. 調査委託者 株式会社大進建設
8. 調査受託者 青森市教育委員会
9. 調査担当機関 青森市教育委員会文化財課
10. 調査指導機関 青森県教育庁文化財保護課
11. 予算措置 調査委託者側で措置
12. 調査体制

調査事務局 青森市教育委員会

教育長 角田 詮二郎

事務局長 大柴 正文

事務局参事

文化財課長事務取扱 遠藤 正夫

文化財課長補佐 多田 弘仁

主 査 木浪 貴子

文化財主事 小野 貴之

" 木村 淳一（調査担当）

" 児玉 大成

" 設楽 政健

主 事 足澤 愛子（庶務担当）

調査補助員 今 直子

" 佐々木 一人

" 永洞 佐哉子

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

青森市は北に陸奥湾を臨み、南には八甲田山がそびえ立つ人口約30万人の青森県の県都である。市の面積は692.40km²を測り、市街地を中心に東西約10km、南北約5kmの青森平野が広がっている。陸奥湾を臨んだ北側以外の部分はU字状に丘陵に囲まれている。北西部は津軽半島の中央をはしる中山山脈からのびる緩やかな丘陵が広がり、西部は海成起源の岡町層ならびに十和田・八甲田山火山噴出物の堆積層を基盤とする緩やかな丘陵地であり、東流する小河川によって開析されている。

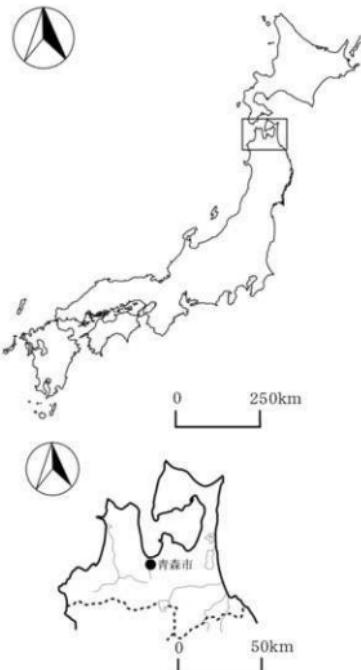
西部丘陵の南端部分には平野部と丘陵地との境に内断層が走っている。内断層は西部の丘陵部分と八甲田山火砕流堆積物によって形成された丘陵をも区切っている。南部の丘陵は青森市南部に所在する八甲田山の火砕流堆積物により形成された台地であり、荒川、合子沢川、横内川等八甲田山麓から市街地へ北流する河川により開析が進み、比較的傾斜の緩やかな丘陵が広がっている。

遺跡は西部の緩やかな丘陵地のうち、沖館川の支流に面した標高8~10mの丘陵地上に立地する。

周辺には笹森沼や三内霊園の北側を包む上堤、中堤、下堤等が所在し、旧河川が堰き止められて形成された沼が点在している状況にある。

遺跡周辺の東側には昭和35年9月に建設された青森県立あすなろ学園・第一養護学校が所在し、西側には昭和17年に造園された三内霊園が所在している。さらに霊園の北側については、羽州街道であった旧国道（現県道鶴ヶ坂千刈線）が走っており、付近一帯は比較的早い時期に形成された住宅地であるため、丘陵が入り組んだ箇所に道幅の狭い道路が無計画に配置され、その道路に沿って住宅が多数建てられている。埋蔵文化財包蔵地の登録地点以外の部分についても住宅は建設中で開発は進んでいるが、未発見の遺跡について確認が難しい状況に陥っている。

また、遺跡の西側の別丘陵に立地する石江遺跡を縦断する形で東北新幹線が建設予定であり、平成16年度以降青森県埋蔵文化財調査センター（以下埋文センター）による調査が実施される予定となっていることから、現在住宅地となった箇所の地下に埋蔵文化財が所在しているかどうかについて今後明らかになるものと考えられる。



第1図 位置図

第2節 歴史的環境

江渡遺跡が所在する沖館川と新城川（新田川）に挟まれた丘陵群では、沖館川右岸に展開する三内丸山遺跡を代表とする遺跡群に比べ、調査事例は格段に少なく、不明な点も数多い。既往の調査として最古の資料は、遺構外出土の資料ではあったが、縄文時代早期白浜式期段階が出土した三内沢部遺跡である。遺跡は、沖館川の左岸上の丘陵地標高約13～20m付近に所在し、昭和51年度に東北縦貫自動車道関連の調査として埋文センターによって実施されている。調査の結果、縄文時代前期については、円筒下層b式期の遺物包含層が検出し、2km南西に離れた沖館川の上流域にあたる熊沢遺跡と対比される。また、縄文時代中期については円筒上層c式～最花式期の竪穴住居跡39軒、埋設土器遺構3基等を検出している。住居跡のうち9軒は最花式土器が伴うもので、うち4軒が複式炉を持ち、石壠炉に2個一对の小ピットが伴う長楕円のくぼみが伴うタイプで、市川金丸氏は「沢部型複式炉」と呼称している。同様の事例は、沖館川の右岸の丘陵地上に立地する三内遺跡や三内丸山遺跡等でも検出している。

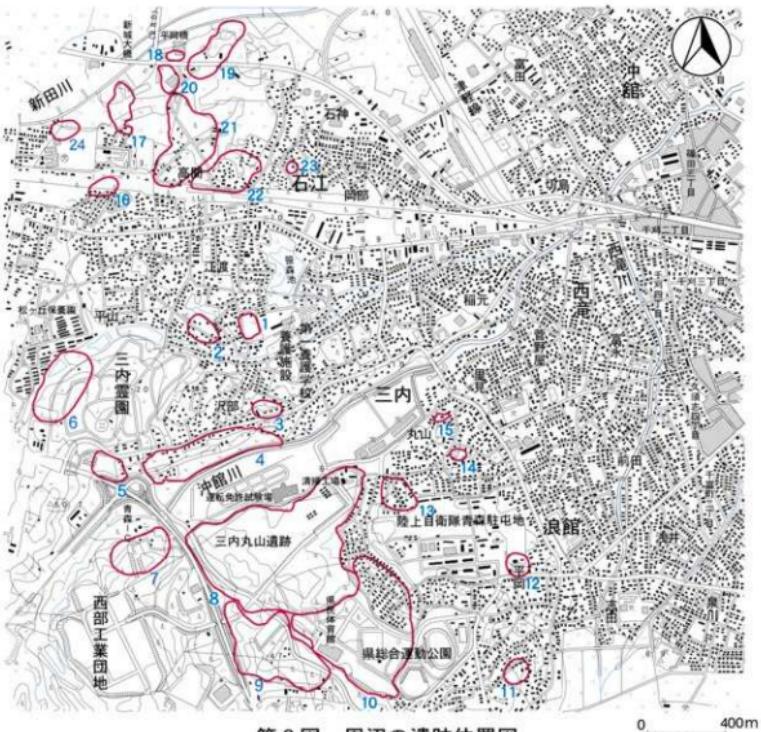
縄文時代中期の資料について他に、三内沢部遺跡の北西側に立地する三内靈園遺跡で昭和36年に調査が青森市教育委員会により実施されている。部分的な調査で報告されている内容についても不明な点が多いが、土坑状の掘り込みが6基検出し、円筒上層a式を主体とした縄文時代前・中期の遺物が出土したと記載されている。

平成12年度から当委員会による試掘・確認調査による対応が増加しており、沖館川左岸に面した丘陵地上に立地する三内沢部（3）遺跡でも民間業者による開発行為に伴う確認調査が実施されている。調査の結果、縄文時代中期の土坑や平安時代の竪穴住居跡等が確認されているが、開発が中止になり、具体的な内容が把握されていない。また、当委員会の調査地点より西側の地点では東北新幹線路線建設関係に伴う発掘調査が埋文センターにより平成15年度に実施されており、縄文時代中期の住居跡や古代末期以降の竪穴住居跡等を検出している。

前述したとおり本遺跡周辺の遺跡は、調査事例が少ないため不明な点が多い状態にあるのは否めないが、近年東北新幹線に伴う調査および新青森駅周辺の土地区画整理事業に伴う試掘・確認調査によって、この地区周辺の遺跡の内容が明らかになりつつある。本遺跡の西側に立地する石江遺跡については前節で触れたとおり、平成16年度以降埋文センターによって、遺跡を縦断する形で調査が実施される予定であるし、それに加えて、石江遺跡からさらに新青森駅方向に向かって縦断する形で、試掘先行の調査が実施される計画である。これまで住宅地であり、現地表面からの調査が不可能であった部分について、その内容が明らかになると期待される。

現在の奥羽本線新青森駅より北側の部分については、平成13・14年度に当委員会による遺跡確認調査が実施されており、既存の遺跡12遺跡について6遺跡に大幅に統廃合を行った。試掘調査の結果、縄文時代前期～晚期、平安時代、近世の遺構・遺物が確認されており、平成15年度から土地区画整理事業に伴う本調査が新田（1）遺跡・高間（1）遺跡・新城平岡（4）遺跡で実施されている。新城平岡（4）遺跡は縄文時代中期円筒上層c式に伴う竪穴住居跡3軒、後期十腰内V式期に伴う竪穴住居跡6軒、平安時代の擦文土器が伴う竪穴住居跡3軒をはじめとする遺構を検出しており、平野部に突出した海岸段丘上の丘陵地での集落構成を考える上で貴重な資料となりうるものと判断される。

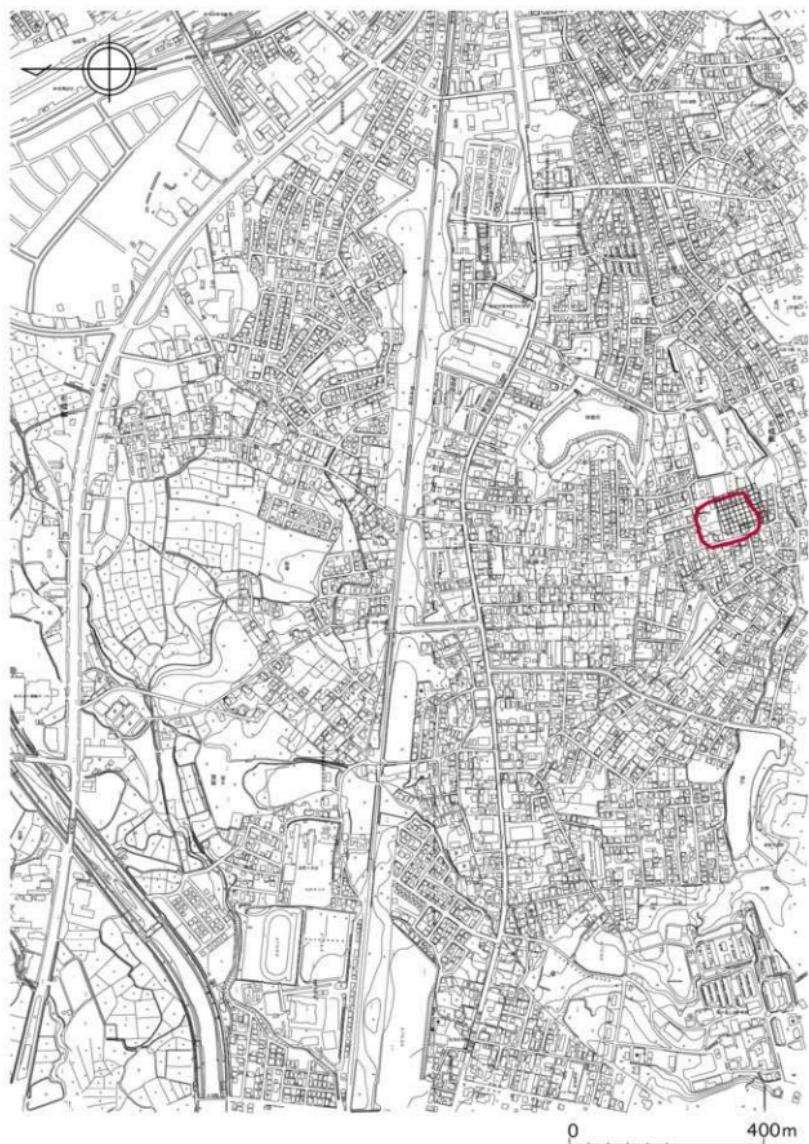
また、新田（1）遺跡では、10世紀後半～11世紀代を主体とする遺物が多量に出土する溝跡を多数検出しており、それに伴って数多くの木製品が出土している。また、それ以外に縄文時代前期表層式土器や15世紀代の青磁・珠洲焼等複数の時代にわたる遺物も出土しており、現時点では整理中であるが、今後当地区の歴史を知る上で欠くことのできない資料となりうることが予察される。



第2図 周辺の遺跡位置図

第1表 遺跡一覧表

番号	台帳番号	遺跡名	種別	所在地	時期	備考
1	163	江渡遺跡	集落跡	青森市右江戸庄内	縄文(前～後)・平安・奈良	
2	056	石江遺跡	散在地	青森市右江戸平山	縄文(前)	
3	162	三内沢部(2)遺跡	散在地	青森市三内沢部	縄文(中)	
4	239	三内沢部(3)遺跡	集落跡	青森市三内沢部	縄文・平安	青森市教育委員会 2002
5	064	三内沢部遺跡	集落跡	青森市三内沢部	縄文(早・盛・中・後)	青森市教育委員会 1978
6	018	三内沢部遺跡	集落跡	青森市三内沢部	縄文(前・中)	青森市教育委員会 1962
7	019	三内遺跡	集落跡	青森市内宇丸山	縄文・平安	青森市教育委員会 1978
8	021	三内丸山遺跡	集落跡	青森市内宇丸山	縄文・平安・中世	青森県教育委員会 1994ほか
9	250	三内丸山(53)遺跡	集落跡	青森市内宇丸山	縄文(中・後)	青森県教育委員会 1999
10	046	古野遺跡	集落跡	青森市安田下古野はか	縄文(中)・平安	青森県教育委員会 1975ほか
11	309	安田古野(2)遺跡	散在地	青森市安田下古野	縄文(前)	
12	012	須原(2)遺跡	散在地	青森市須原下平岡	縄文(前・晚)	
13	011	須原(3)遺跡	散在地	青森市内宇丸山	縄文(前)	
14	248	三内丸山(3)遺跡	散在地	青森市三内丸山	平安	平成14年度三内丸山(7)遺跡から発見
15	315	三内丸山(8)遺跡	集落跡	青森市三内丸山	縄文・平安	平成15年度探査調査により新規発見
16	069	新城平岡(2)遺跡	集落跡	青森市新城下平岡	縄文(後)・平安	石江土地区画整理事業開発
17	074	新城平岡(4)遺跡	集落跡	青森市新城下平岡	縄文(前～後)・平安・奈良	石江土地区画整理事業開発
18	079	新城平岡(5)遺跡	散在地	青森市新城下平岡	平安	
19	076	新田(1)遺跡	散在地	青森市新田下新田はか	縄文(早・盛・中・後)・平安・中世	石江土地区画整理事業開発
20	080	新田(2)遺跡	散在地	青森市新田下新田	平安	石江土地区画整理事業開発
21	070	高田(5)遺跡	集落跡	青森市右江戸高田	縄文(前～後)・平安・奈良・奈良	石江土地区画整理事業開発
22	075	高田(6)遺跡	集落跡	青森市右江戸高田	縄文(中・後)・平安・奈良	石江土地区画整理事業開発
23	076	阿部遺跡	散在地	青森市右江戸阿部	縄文	
24	062	西高校遺跡	散在地	青森市新城下平岡	弥生・平安	



第3図 江渡遺跡位置図

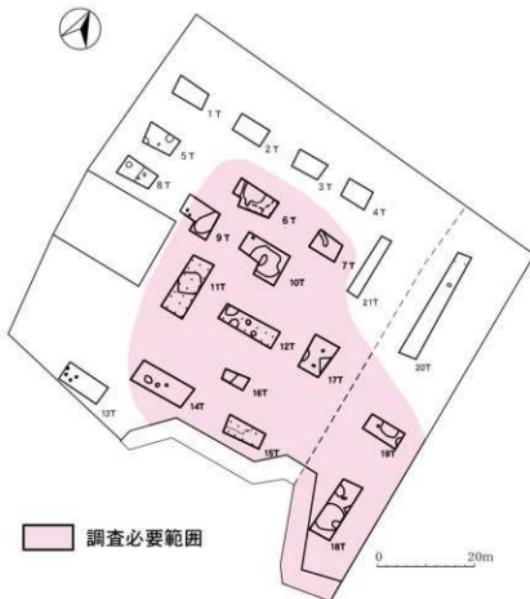
第Ⅲ章 調査の概要

第1節 範囲確認調査

範囲確認調査は、第Ⅰ章でも触れたが平成15年度に当委員会が行った市内遺跡発掘調査事業の中で平成15年4月16～18日の3日間で実施した。

造成予定地は現況が旧畠地であったことから作業が容易であったため、任意にトレントを設定し、重機によるトレント掘りと人力による鏟築がけで調査した。総トレント数は21カ所で、調査面積は造成予定面積5,657m²に対し約14%にあたる783m²であった。

調査の結果、丘陵頂部側であるトレント6・11から平安時代の竪穴建物跡が、斜面下方のトレント18から縄文時代の竪穴建物跡が確認され、その他土坑や落ち込み状の痕跡が確認された。トレント5・8・13から小規模な土坑やピットが確認されたが、近代～現代の遺物が含まれていた。トレント20については大幅に掘削が行われた痕跡があり、地下の構築物が破壊されている状況であった。以上の結果、遺物の出土状況や遺構の検出状況を踏まえて、調査範囲については、トレント6・7・9・10・11・12・14・15・16・17・18・19の範囲内の約2,770m²が妥当であると判断した。



第4図 江渡遺跡範囲確認調査トレント配置図

第2節 本発掘調査

範囲確認調査の結果を受けて、大進建設との協議の結果、 $2,770\text{ m}^2$ を調査対象面積として記録保存を前提とした発掘調査の実施することで合意した。発掘調査期間については、通常の遺構処理時間を基に算定したが、調査担当者の決定と日程調整及び作業員の募集等の事前準備を踏まえ、調査着手可能時期が平成15年の8月上旬とすることとした。

第3節 調査方法

本調査にあたり、民間業者による開発行為であるため、具体的な基準点測量等の成果が存在しない状況であった。そのため、調査区内に即した任意の座標軸を設定し、調査に対応した。具体的には本書「凡例」の項目でも説明しているが、南北方向をX軸、東西方向をY軸とし、X軸については北方向へ向かうに従って、Y軸については東へ向かうに従ってそれぞれ数字が増えるように設定した。現地での基準点の設置は、調査区の南東隅付近にX100 Y100の座標点を設け、北側へ40m移動した部分へX140 Y100の杭を打設し、そこから10m単位でグリッドを展開した。水準点については、原因者に設定を依頼し、調査予定地隣接部分に仮B.M. ($h = 10.000\text{ m}$)を設定してもらい、そこから現地に打設した杭に水準を付与した。各杭の公共座標値については、整理作業時点で、CADソフトウェアを用い公共座標値を導き出し、遺跡位置図等にプロットしている。

調査については範囲確認調査で堆積状況および土量を事前に把握していたことから、重機による表土処理を行い鏟簾がけにより遺構確認、遺構の掘削、精査という形を基本にして行った。調査地の現況は旧畠地であり、調査開始前に若干の草木があったが、委託者側で事前に除去していたため作業に対し特段支障をきたすような事態とはなりえなかった。調査によって排出された廃土は、基本的に確認調査により調査不要の部分に排出するようにし、乾燥や風による周囲の住宅地への飛散を防ぐためにブルーシートを用い廃土を覆うようにした。

また、調査範囲の把握のためと遺構の密度の関係から、試掘調査時から便宜的に沢地形の右岸（西側）と左岸（東側）について確認調査時には右岸がA区、左岸がB区と呼称していたが、本調査に際し、着手順に左岸をA区、右岸をB区として置き換えている。

各遺構の呼称については、竪穴建物（住居）跡にS I、土坑にSK、ピットにSP、溝跡にSD、埋設土器遺構にSC、その他の遺構としてSXという略号を付し、帰属時期等は問わずに調査時に確認した順番で算用数字を組み合わせ遺構番号とした。具体的には第1号竪穴建物跡はS I-01という呼称で取扱った。

遺構の精査にあたり、竪穴建物跡は基本的に4分法で十字に土層観察ベルトを設け、土坑・ピット等は基本的に2分法で半裁し、セクション図を作成した。また、必要に応じ、エレベーション図等を作成した。平面図作成については、カマド等1/10の拡図についてはセクションポイントを基準とした簡易遺構方測量による測量で、1/20の平面図については、トータルステーションにソキア社のフィールドスケッチPROがインストールされたパソコンを接続し測量した。このシステムについては、中国で行われた興隆溝遺跡の日中合同調査の測量でもGPS測量と併用して用いられているが、トータルステーション単独や電子野帳と異なり現地で多量の測点を視認しながら測量が継続できる利点があった。今回の調査の著しい進捗の成果については、この測量方法によるものが大きい。



第5図 江渡遺跡グリッド・遺構配置図

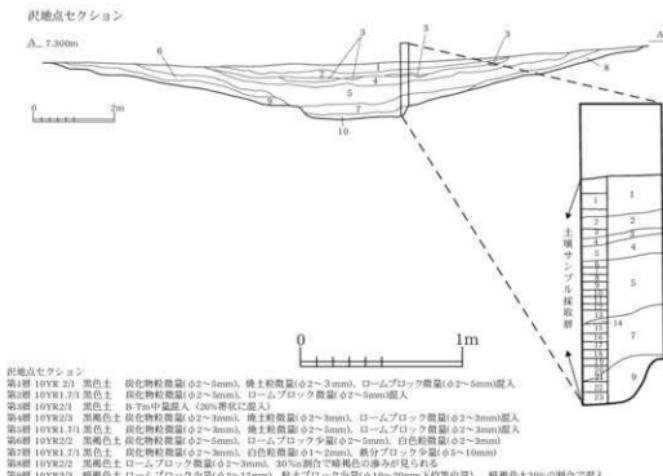
遺物の取り上げについては、遺構内の床面及び床面直上から出土した資料は基本的に測量により点上げし、堆積土出土のものは一括で取り上げ、遺構外出土資料は座標エリア毎に層一括で取り上げている。セクション図における土層の注記については『新版標準土色帖』に準拠した。

写真撮影については35mmのモノクローム、リバーサルフィルムの各フィルムを併用し、作業の進展に伴い適宜行った。

第4節 地形と層序

本遺跡は、沖館川支流の左岸の丘陵上に立地する。丘陵の傾斜は基本的に南東方向へ傾斜している。今回の調査区は現況が旧畑地であったため、範囲確認調査の時点では、ほとんどが耕作土であったことから遺跡が形成された堆積土が確認できない状況であった。本調査の時点でも各調査地点では漸移層の直上部分の堆積は認められたが遺構の堆積土と比較しうる土層の堆積はあまり残存状況が良好ではなかった。しかしながら、便宜上の調査区であるA・B区を分けている沢地部分から良好な土層堆積が認められた。湧水および流水による影響も認められているが、サンプリングについて一部実施している。沢地部分からはほとんど遺物が出土しない状態であったが、第5層下付近から縄文土器の体部片が出土しており、縄文時代に浅い谷地形が存在したものと考えられる。平安時代の時点ではB-Tm火山灰がほぼ平行に堆積していることからほとんど微丘陵状に傾斜した地形であったことが推察される。沢地部分では平面的にB-Tm火山灰は確認されたが、T o-a火山灰については、遺構内からブロック状に確認されたのみであり基本的に降灰の量は市内の他遺跡と同様の状況であったものと判断される。

基盤層である地山については、最上層については月見野火山灰で以下大谷火山灰、三内火山灰層と続くが、遺構の掘削はほとんどが月見野火山灰層直下の大谷火山灰層までしか及んでいない状況であった。



第6図 澤地点セクション図

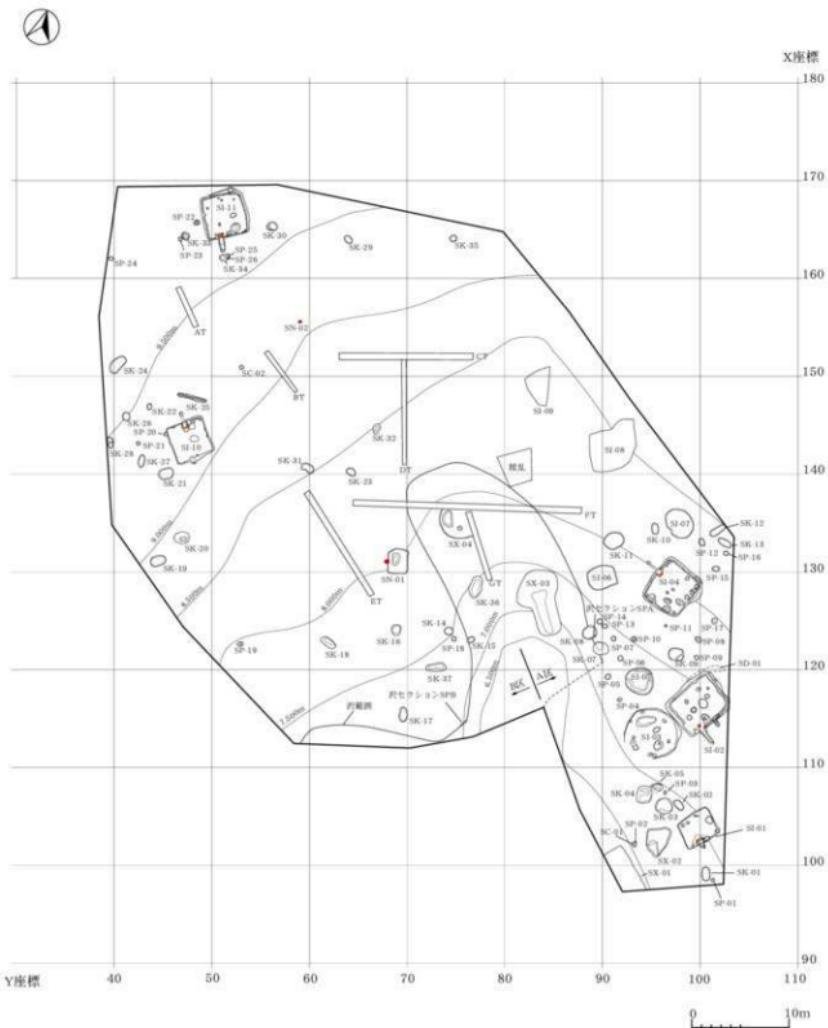
第5節 発掘調査経過（抄）

- 8月1日（金）発掘作業開始。環境整備、基準杭打設。A区から鋤簾がけ開始。遺構確認の上、一部遺構について掘削開始。
- 8月4日（月）SI-01セクション着手。SI-02カマド1基着手。SC-01セクション着手。A区鋤簾がけと遺構確認終了。遺構掘削に従事している作業員以外はB区鋤簾がけ開始。
- 8月5日（火）SC-01精査終了。SK・SP及びSXについては順次着手。SI-04着手継続。SI-02についてはカマド新旧2基確認。
- 8月6日（水）フィールドスケッチによる平面図作成開始。精査完了済のSI-05、SK-01～05、SP-01～03、SX-01・02について着手。
- 8月7日（木）SI-01精査完了。
- 8月8日（金）盆休み前の最終日。雨天であったが、天候を見て調査可能時に調査継続。午後から雨が強くなり待機。
- 8月18日（月）盆休み明けで調査再開。B区のSI-11等についても掘り下げ開始。
- 8月19日（火）沢部分トレレンチ掘削。予想以上に深度があり、掘削に難航する。また、遺構確認で空白部分についてはサブトレレンチ（呼称にはアルファベットを使用）掘削開始。
- 8月20日（水）～22日（金）SI・SK等の精査継続とフィールドスケッチによる平面図作成。
- 8月25日（月）雨天により中止。
- 8月26日（火）雨天であったが、調査継続。
- 8月27日（水）～29日（金）雨天の時があったが、調査は順調に推移。
- 9月1日（月）～4日（木）3日は雨天のため作業員は作業中止とし、測量に従事。
- 9月5日（金）午前中で精査および測量完了。午後、撤収のため後片付け及び機材搬出。調査終了。

第6節 整理作業および本書の編集について

整理作業は、すべて平成15年度中に完了している。位置図等の図版については、青森市遺跡台帳に用いられている数値地図を用い、必要に応じて遺構図と加工合成している。遺構図のうち手作業で行ったセクション図及び1/10の拡図については、スキャナで取り込み後、Adobe社製Illustratorでデジタルトレースを行い原図とした。また、1/20のフィールドスケッチによる測量図についてはDXF形式のデータからIllustrator形式のデータに変換し、データ編集をした後、各図をIllustrator上で合成し図版を作成した。遺物については、水洗いした後、土器はすべて注記し、選別・接合・復元作業を行った後、再度選別し実測・断面実測・拓本作業を行っている。石器・石製品・土製品・鉄製品については、選別した後、実測作業を行っている。手作業で実測した後、実測図はIllustratorでデジタルトレースを行った。また、拓本についてもスキャナで線画形式で取り込んだ後、Adobe社製Photoshopによりレタッチを行い、トレース図及び拓本画像をそれぞれの必要な縮尺に縮小を行い、合成して図版とした。

報告書の組版および編集についてはAdobe社製InDesign2.0を使用した。



第7図 江渡遺跡遺構配置図

第IV章 検出遺構

第1節 繩文時代の遺構

1. 窓穴建物跡

S I - 0 3 (図版7・8)

X 1 1 3, 5, Y 9 8付近で検出した。確認調査時点トレンチ18内で確認した円形のプランの建物跡である。平安時代の建物跡S I - 0 2と接する形で検出した。調査時の掘削において南壁側部分の残存状況が悪く、形状が不整円形を呈することが判明した。残存部分の規模は長軸幅585cm、短軸幅510cm、深さ30cm、面積(16.452)m²を測る。堆積土中において第3・4層中に平安時代に降灰したB-Tm火山灰の混入が認められ、炉跡部分から本遺構に帰属しないピットが検出されていることを考えると堆積土層のうち1~3層については、プライマリーな縄文時代の覆土ではなく平安時代の土地利用における改変の状況を呈しているものと判断される。5層以下の堆積土については、建物跡の床面から検出した焼土・炭化物の影響が一部認められるが、沢部分で認められた第4層以下の土層と対比しうるものであり、堆積土の起源は概ね縄文時代に帰属しうるものであると判断される。柱穴と考えられるピットはP i t 1・3~5・7~10の8基で、柱穴配置については基本的に亀甲状の配置であると考えられるが、北~北東壁の部分がやや壁中央寄りに柱穴が掘られているのに対し、西壁~南壁寄り部分の柱穴は壁際に掘られている特徴がある。特に南壁側の部分については、一つの柱穴に接する形でもう一つ柱穴が伴う形で検出している(P i t 3・4, P i t 7・8)。堆積土の土質と堆積状況等を考えると埋没過程でほぼ同時期に埋没した可能性があることから出入口等の施設が存在した可能性が考慮される。

炉跡は、西壁寄りの部分から1基検出した。ほぼ南北軸で、長軸幅106cm、短軸幅84cm、深さ18cmを測る。前述したが、北壁寄りの部分で検出しているピットは本遺構に帰属しないもので、炉の構築物が掘り込みによって破壊されている。残存状況が不良であるが、壁面寄りの部分には安山岩等の自然礫が設置されており、底面には大木10式併行期の深鉢が割られ二面にわたって敷かれた土器敷設石廻炉である。同一個体の破片の一部はSC-01の埋設土器に利用されている。焼土部分は土器敷設の面の間に堆積する部分に集中しており、破壊されている北壁寄りの箇所がやや被然の度合が強い。

また、北壁寄りの部分からSK-1を検出した。長軸幅198cm、短軸幅90cm、深さ70cmを測る。平面形は不整長楕円形を呈し、断面形について東壁側が袋状を呈している。埋没が終了した時点の床面とほぼ同一の高さの部分で焼土面が68×50cmの範囲で検出した。それ以外に床面から赤化した箇所が数カ所検出されている点と、後世の影響を受けているが、帰属した堆積土中に一定量の炭化物等の混入が認められることから本遺構について焼失の可能性が考えられる。

2. 埋設土器遺構

SC-01 (図版16)

X 1 0 2, 5, Y 9 3, 5付近で検出した。SP-02と重複しており、本遺構の方が古い。掘り込み部分の規模は残存部で、50×40×21cmを測る。埋設された土器は、大木10式併行期の深鉢土器で、前述のS I - 0 3の炉跡から出土した土器と接合関係にある。SC-01のものは、口縁部小片も一部含まれるが、主に文様モチーフのない体部下半にかけての部分を平行に打ち欠いて用いられている。本遺構

の構築時期は S I - 0 3 の炉跡の構築時期とほぼ同時期であることが判断される。

S C - 0 2 (図版 1 6)

X 1 5 1, Y 5 3 付近で検出した。確認時点で既に上部の一部が破壊されていたが、掘り込み部分の規模は、 $4.5 \times 4.1 \times (1.6)$ cm を測る。掘り込みの部分に黒褐色土及び暗褐色土を充填したのち、最花式期の広口壺の口縁部および底部を打ち欠いた状態で設置し、さらにその内部には底部のみを打ち欠いた地紋が繩文のみの小型の深鉢形土器を入れ子状に設置している。

3. 土坑

本遺跡内で検出した土坑は、形状・堆積土等から厳密に該期に帰属したと判定できるものが少なく、埋没過程での流入等の要因についても検討された。記述に際し、土層および出土遺物の下限時期を考慮しあくまでも上限資料としての取扱いとして本節内で取り扱うこととする。

S K - 0 1 (図版 1 7)

X 9 9, Y 1 0 0, 6 付近で検出した。規模は、 $1.45 \times 8.7 \times 3.5$ cm を測る。平面形は梢円形を呈し、断面形はほぼ垂直に近い形で立ち上がる。堆積土中から繩文時代中期後半～末葉の繩文土器片が出土している。

S K - 2 5 (図版 1 8)

X 1 4 8, Y 4 8 で検出した。規模は、 $3.05 \times 3.7 \times 8.8$ cm を測る。所謂溝状土坑 (T ピット) で、上端の一部は搅乱により破壊されている。出土遺物は無いが、これまでの類例等から本節で取り扱った。

4. その他の遺構

S X - 0 1 (第 7 図)

X 9 9, Y 9 3 付近で検出した。規模は調査区外へ延びているため不明であるが、 $5.01 \times (2.00)$ × 1.0 cm を測る。斜面に面した浅い落ち込みで、堆積土中から中期後半～末葉の繩文土器片が出土している。

S X - 0 2 (図版 2 1)

X 1 0 3, Y 9 5 付近で検出した。規模は、 $2.90 \times 2.27 \times 3.8$ cm を測る。平面形は不整形で、断面形は凹凸を持つ。南壁側に不整長梢円形状の落ち込みを検出した。規模は $1.74 \times 1.10 \times 1.6$ cm を測る。堆積状況は北壁側と南壁側と異なる埋没過程を呈しているが同一の土層が介在している。6 層を取り扱った土層は漸移層で南壁側の壁面にあたる。堆積土中から繩文土器が出土している。

第 2 節 弥生時代以降の遺構

本節内で取り扱う遺構は土坑 3 基で、前節中で記述したように、本調査で検出した遺構は、明確に帰属時期の認定できないものが数多く存在する。また、遺物包含が認められるものについても埋没過程での混入の要素が含まれる。土層および出土遺物等を考慮しあくまでも上限資料としての取扱いとして本節内で取り扱うこととする。

1. 土坑

S K - 0 3 (図版 1 7)

X 1 0 6, Y 9 6 付近で検出した。規模は、 $1.75 \times 1.65 \times 4.0$ cm を測る。風倒木を切る形で構築されており、平面形は不整円形を呈し、断面形はほぼ垂直に近い形で立ち上がる。堆積土中から

縄文土器中期後半～末葉の縄文土器片が出土している。また、弥生土器体部片1点が出土している。近接するSK-04からも円筒上層c式期の口縁部片および中期後半～末葉の体部片等とともに弥生土器が出土しているが、本遺構出土資料と遺構間接合が認められた。本遺構出土の資料については摩滅・剥離等が著しく埋没過程での流入であると判断できる。

SK-04 (図版1-7)

X107, Y94.5付近で検出した。規模は、 $180 \times 150 \times 57$ cmを測る。平面形は不整圓方形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。SK-03同様風倒木を切る形で構築されている。前筋のSK-03中に記述したが、堆積土中に縄文土器とともに弥生土器が出土している。本遺構出土の弥生土器片は器面の摩耗が少ない。

SK-05 (図版1-7)

X108, Y95.6付近で検出した。規模は、(92) × (65) × 47 cmを測る。平面形は不整形で、断面形は段状に立ち上がる。堆積土がSK-04と同質の土層が含まれ、出土遺物についても該期に帰属する遺物の出土があったことから本節で取り扱った。

第3節 古代の遺構

1. 積穴建物跡

SI-01 (図版1-2)

X103.8, Y99.8で検出した。規模は、長軸幅365 cm、短軸幅320 cm、深さ30 cm、面積9.996 m²を測る。平面形は長方形で、断面形は各壁とも緩やかに立ち上がる。斜面下方にあたる南東壁側が漸移層を掘り込む形で構築されており、やや脆弱な面を壁面としている。掘り方は基盤層である月見野火山灰層を掘り込む形で不整形に掘られており、そこに粒径の大きなロームブロックが多量混入する黒褐色土が充填され床面としている。また、図版1のセクション図上で、調査時に「掘りすぎ」と取り扱った北東・北西壁については、地山土であったため掘りすぎとして取り扱ったが、整理作業時の検討において、掘り方部分との立ち上がりとの非整合の要因が掘り方構築後の貼壁であったという可能性について否定はできない。壁溝は検出しておらず、ピットについては9基検出したが、Pit7と取り扱ったもの以外は十分な深さを呈しておらず、柱穴配置についての詳細は不明であるが、Pit1・2・7については柱穴として機能した可能性を有している。また、Pit8・9はカマド脇ピットである。

土層は11層に分層されたが、このうち埋土として認定できるのは1～6層及び8・9層で、8・9層に関してはカマド周辺の影響による土層である。廃絶後、床面が4層により覆われ、斜面上位にあたる北東・北西壁側では3層によって埋没が完了している。3層上面には十和田a (To-a) 火山灰がブロック状に堆積しており、さらにカマド部分には白頭山-苦小牧 (B-Tm) 火山灰が混入していることが確認されていることから、本遺構はTo-a火山灰の降灰前に廃絶された建物跡であると認定できる。

カマドは、南東壁側のやや南よりの部分 (37:63) の位置から検出しており、袖部幅72 cm、煙道長56 cmを測る。主軸方位はN-128°-Eである。構造は半地下式で、煙道の短い簡易型に近い形状を呈している。土層は前庭部の硬化部分での赤化面の部分を含めて19層に分層した。袖は、9～11層で月見野火山灰層主体のバミス質な粘土を主体としており、左袖の部分がやや幅広の形状を呈する。支脚として土師器小甕が煙道の掘り込み部分よりやや南よりの軸線で倒位に設置されており、火床面につ

いても支脚設置箇所の前面を中心に被熱箇所が強い状態で確認されたことから、使用時点では構築部分の軸線とは異なる軸線で使用されていた可能性が持ち得ている。火床面と支脚の延長線上の軸線についてはN-130°-Eである。火床面は16・17層の上面で、17層についてはロームブロックの充填箇所が被熱している。天井部については袖部と同様に月見野火山灰層主体の4・6層であると考えられ、崩落した状況で堆積していることから廃絶時点での行為は行われていないものと考えられる。また、カマド構築部分を中心に硬化面が153×94cmの不整形な状態で確認された。カマド堆積土セクション中15層を取り扱った赤化面は前部の被熱箇所として認定できる資料で、それ以外の部分については前述の建物跡堆積土8・9層に見られるように焼土ブロック・炭化物等の混入が認められることから、廃絶時の崩落による影響が考慮される。

S I - 0 2 (図版3~6)

X116.5, Y103で検出した。確認調査時点トレンチ18内で確認した方形のプランの建物跡である。東端にあたる北東壁と南東壁が接するコーナーが調査区外のブロック塀にあたるため、調査不可能であったが、調査区内での規模は、長軸幅575cm、短軸幅485cm、深さ32cm、面積19.116m²を測る。平面形は長方形で、断面形はほぼ垂直に近い形で立ち上がる。また、北西壁についてはSD-01（長さ約4m、幅3.5~6.0cm、深さ15cm）と接していたが、新旧関係等についての詳細は確認していない。掘り方はほぼ全面月見野火山灰層直下の粘質地山土まで掘削されており、ロームブロックの混入する暗褐色土が充填され床面としているが、調査時に最終段階の床面除去後、22層直下の部分でピット（Pit 6~10）を検出し、前段階の床面の一部と思われる面を確認したことから本遺構は改築が行われたものと調査時に判断したが、整理作業時において出土遺物の接合関係からこれらのピット出土資料と最終段階に属した面から出土した遺物との間に接合関係が認められたことから、厳密な判断はできない。壁溝は最終段階に伴うものであり、カマド設置部分周辺を除く箇所から検出した。掘り方幅が北西～南西壁寄りの部分がやや広く最大幅50cmを測るが、褐色土等が充填されており、廃絶時点の埋土については焼土粒が帶状に上面で検出される状態であった。ピットは前述の前段階のピット5基を除く8基が最終段階の面から検出されたが、主柱穴として考えられるピットであるPit 1・3・4・12の配置がかなり近接した長方形配置をしており、北東壁側部分から検出したPit 5・13と同様にPit 11とPit 1の西側の壁溝部分に柱穴状の落ち込みが認められることから柱穴配置の変更が行われた可能性がある。

土層は24層に分層されたが、廃絶後の埋土については1~6、8~10層で、7層についてはS I - 0 1と同様に褐色土が充填されており、貼壁の可能性がある。床面から炭化物・焼土が検出していることから本遺構は最終段階で焼失にあったものと考えられるが、出土遺物の状況や主柱や腰板に相当する炭化材が検出しており、焼土や炭化材の出土範囲が各壁面寄りの部分のみから検出している状況をみると意図的な焼失の可能性を持ち得ている。その影響にある8層が床面全体を覆う形で堆積しているが、北東壁側にはB-Tm火山灰が微量混入する6層の堆積が見られ、その上位に焼土粒・炭化粒等が混入する5層が堆積した後、住居全面にB-Tm火山灰の二次堆積土である3・4層が堆積し、最終的に沢部分でB-Tm火山灰火山灰層直下に堆積している第4層と対比される1層が堆積して埋没が完了している。このことから付近の堆積土が自然崩落により遺構内に堆積し埋没したものと考えられる。T o-a火山灰については、床面上からブロック状に確認している(図版6カマド2セクション図第11層参照)。

出土遺物の構成(第V章参照)と遺構の状況が時期的な判断において異なることから検討も必要とされ

るが、S I - 0 1 と同様の形状と軸線を有していることから、廃絶時期については明らかに T o - a 火山灰降灰以前であると判断される。

カマドは 2 地点から 3 基検出した。カマド 2 については火床面等の確認がなされなかつたため、具体的使用については確証がないが、南東壁のほぼ中央 47 : 53 の位置から検出した。主軸方位は S I - 0 1 のカマドと同様に N - 128° - E である。煙道長は 66 cm を測り、煙道の構造も半地下式で S I - 0 1 のカマドと類似した形状を呈している。袖部のうち右袖の基部については、最終段階の検出時点でも確認している。最終段階でカマドとして機能していたのは、南壁の 75 : 25 の位置から検出したカマド 1 である。新旧 2 面存在しており、最終段階のものについて構造は半地下式で、主軸方位は N - 125° - E で、煙道長 176 cm を測る。燃焼部のうち火床面については不明瞭で、袖部については左袖が欠落しており、右袖にかけて礫を含む多量の土器が散逸した状況で出土したことから最終的な廃絶時点での伴う廃棄が行われていたものと判断される。旧カマドについては主軸方位が N - 131° - E で、煙道長 86 cm を測る。構造は地下式で、煙道は燃焼部から 12° の角度で傾斜し、煙道奥壁は垂直に近い形で立ち上がる。火床面については本カマド時のものである。

S I - 0 4 (図版 9・10)

X 128, Y 97.1 で検出した。規模は、長軸幅 510 cm、短軸幅 480 cm、深さ 50 cm、面積 17.796 m² を測る。平面形は隅丸長方形である。断面形は南・東壁部分が風倒木の影響が生じているが、壁上部の一部で緩やかに立ち上がる箇所がある。構築は、S I - 0 2 と同様に月見野火山灰層直下の粘質土層まで不整形にほぼ全面掘削されており、月見野火山灰層起源のバミスブロックを混入する黒褐色土が充填され床面としている。壁溝は南東壁隅周辺以外ほぼ全周する形で検出してあり、カマド構築部分直下からも検出した。溝内は壁柱ないしは腰板の設置痕と考えられる落ち込みが確認されている。ピットは 16 基検出したが、柱穴として機能した可能性を有するものは P i t 1・2・3・7・10・12 である。このうち 2 と 12 については底面の傾斜がそれぞれ東側に傾斜する形で掘り込まれており、それぞれの軸線上 (P i t 1-3, P i t 7-12) の支柱として機能した可能性も考慮される。

土層は 13 層に分層されたが、廃絶後の理土は 1~8 層で、各壁際の部分で一部崩落が生じた後、バミスブロックが混入する黒褐色土を主体とする 5 層によって住居全面が覆われ、カマド設置壁寄りの部分で一部 T o - a 火山灰が混入する堆積が見られるが、混入物がほとんど含まれない黒色土によって埋没が完了している。ピット 11 の第 1 層中から T o - a 火山灰の二次堆積物が確認されていることから廃絶時期については T o - a 降灰より古い段階で埋没が開始しているものと判断される。

カマドは西壁側の 59 : 41 の位置から検出しており、袖部幅 72 cm、煙道長 132 cm を測る。主軸方位は N - 68° - W である。構造は地下式で、燃焼部は火床面が左袖基部の延長線上をややはみ出した形で検出している。支脚設置位置から土器器皿 2 点が重なった状態で、その右脇の右袖部分から角柱状の自然礫 1 点が出土しているが、火床面直上に堆積している天井崩落土の一部である 7 層の上位に位置していることから廃絶時点で再配置された可能性を有している。煙道は燃焼部から 15° の角度で傾斜し、煙道部で再度角度を変え落ち込んでいる。煙道奥壁は壁途中で角度を変えているが垂直に近い形で立ち上がる。

S I - 1 0 (図版 11・12)

X 143.4, Y 47.8 で検出した。確認調査でトレチチ 11 から確認した隅丸方形の建物跡である。規模は、長軸幅 420 cm、短軸幅 390 cm、深さ 45 cm、面積 13.788 m² を測る。南西壁部分

で S P - 2 0 と重複しているが、本遺構の方が古い。平面形は隅丸方形で、断面形は各壁ともほぼ垂直に近い形で立ち上がる。構築は、月見野火山灰層を掘り込み、部分的にロームブロックが混入する月見野火山灰層主体の地山土を充填しており、床面としている。壁溝は検出しておらず、ピットについても 8 基検出したが、配置上可能性を有するものはあるが、明確に柱穴として機能したと認定できないものである。床面中央及びカマド右袖脇の部分では S X - 1 · 2 を取り扱った月見野火山灰層起源の地山土によるやや盛り上がった硬化面が確認され、S I - 0 1 カマドの前部と同様の状況を呈している。

堆積土は 1 1 層に分層されたが、このうち、攪乱による影響が 8 ~ 1 0 層に認められ、廃絶後の埋土については 1 ~ 7 層までである。床面直上をロームブロックが混入した 7 層が南壁側を除いた箇所を覆っており、北東方向から炭化粒・ローム粒が混入する 6 層が堆積し、T o - a 火山灰がブロック状に混入する 5 層が建物跡全体を埋没させている。5 層直上に堆積する 4 層中からは B - T m 火山灰が含まれる 4 層が帶状に堆積しており、最終的に沢セクション第 2 層に対比される 1 層によって埋没が完了している。遺物の出土状況が床面周辺を中心としており、火山灰が介在した層からはほとんど出土していないことを考慮すると、T o - a 火山灰降灰後 B - T m 火山灰降灰時期の間に本遺構には人的介在が皆無であったと判断できる。

カマドは北西壁側のほぼ中央 (5 1 : 4 9) の位置から 1 基検出しており、煙道長 1 0 6 cm を測る。主軸方位は N - 3 9 ° - W である。構造は地下式で、燃焼部は浅い掘り込みを有し、火床面がその上に形成されている。また、袖部は左袖基部のみが残存しているが検出しておらず、構築土についてはかろうじて支脚設置部分のみから検出している。芯材設置箇所と考えられるそれぞれの部分に浅い溝状の掘り込みが確認され、その部分と火床面との位置関係については整合性が認められる。溝状の痕跡から推定される袖部幅は 6 6 cm である。支脚は軸線の中央に浅いピット状の掘り込みがなされ、その上位に角礫を置き、さらに土器片が 3 点重ねられたような状況で検出しているが、燃焼部の破壊状況と遺物の出土状況からカマド廃絶時に破壊の影響が生じていないとは認定できず、破壊後の再配置の結果としての位置である可能性も含んでいる。煙道は燃焼部から 2 0 ° の角度で傾斜し、緩やかに傾斜しながら煙道部へ向かう。煙道奥壁は垂直に近い形で立ち上がり、開口部上面でやや開き段状に立ち上がる。

S I - 1 1 (図版 1 3 ~ 1 5)

X 1 6 5 , Y 5 1 で検出した。確認調査でトレント 6 から確認した方形の建物跡である。規模は、長軸幅 4 8 0 cm 、短軸幅 4 6 5 cm 、深さ 4 5 cm 、面積は 1 6 . 1 0 4 m² を測る。平面形は方形であるが、北壁東隅側に棚状の段があり、突出したような形状を呈している。この部分の内側には壁溝があり、腰柱穴等が存在しているため、掘り方時の掘削痕の可能性もあったが、段上に機能したピットが認められた点と埋没時の堆積においても一連の堆積状況を呈していることから廃絶時においては建物内であったことが考えられる。断面形は各壁ともほぼ垂直に近い形で立ち上がる。構築はほぼ全面を不整形に掘り込み、月見野火山灰層と黒色土との混合土によって充填し、床面としている。壁溝はカマド構築部分以外全周する形で検出した。S I - 0 4 と同様に腰板及び支柱設置として断続的に浅い掘り込みが繰り返す形で検出した。ピットは 1 4 基検出したが、主柱穴としての機能ではなく、壁溝側から検出した P i t 1 1 · 1 2 に見られるように壁寄りの部分に支柱穴状のピットが掘り込まれ、壁溝上に設置された支柱穴と組み合わされ上部構造が建ち得ていたものと考えられる。

その他南壁寄りの部分から S K - 1 と取り扱った土坑 1 基を検出した。規模は 9 2 × 9 0 × 3 7 cm を測る。底面直上から礫 1 点、堆積土中から土器片が出土したが混入的な出土状況であった。床面とほぼ同

一面である1層の上面では雨水等の二次堆積によるB-Tm火山灰が検出している。

堆積土は9層に分層した。このうち埋土は1～5層で、7層については搅乱による影響である。壁際および中央に部分的に漸移層起源の5層が堆積し、崩落等の要因をもつロームブロックが混入した4層により建物全体の下半分が埋没している。その後上面に沢セクション第3層と比較される3層が堆積し、この3層については前述のSK-1の箇所で落ち込んで堆積しており、その帰結が床面上部部分でのB-Tm火山灰の検出である。よってSK-1は廃絶段階では開口しており、埋没に関しても自然堆積によるものである。建物そのものは最終的にSI-10と同様に沢セクション第2層に対比される1層により埋没が完了している。本遺構とSI-10は埋没過程においてB-Tm火山灰の検出は同様であるが、To-a火山灰の検出がSI-11からは認められず、またB-Tm火山灰の介在層についても埋没時点での堆積と二次堆積の影響が伴う時点という差が生じている。本遺構については後述するカマドの状況等も踏まえて、少なくともSI-10とは異なりTo-a火山灰降灰後まで機能していた可能性がある。

カマドは南壁側の西壁寄り(68:32)の部分から1基検出したが、同一部分で3回作り替えが行われている。各段階のカマドとも堆積土中に火山灰は介在していない。最終段階のものについては半地下式で、袖部幅72cm、煙道長150cmを測る。主軸方位はN-150°-Eである。床面より若干高い位置に構築されており、燃焼部・煙道部・煙出部とも崩落した堆積状況を呈しているが、良好に残存している。煙道は燃焼部から緩やかに立ち上がった後、煙道部中央で煙出部へ向かってやや傾斜する。煙出部は底面が狭いビット状を呈し、煙出奥壁は60°の角度で立ち上がる。二段階目のものについては、最終段階同様半地下式で、煙道長は135cmを測り、袖部の基部は最終段階と同様であると考えられるが、右袖側が土圧により不整合な堆積を呈している。主軸方位はN-150°-Eと最終段階同一の軸線である。一段階目のカマドの煙出中位部分辺りまで最大幅84cm×162cmの長方形形状に掘り込み、月見野火山灰層主体の地山土を充填し煙道部を構築している。機能時点での煙道幅は最終段階とほぼ類似した幅であるが、燃焼部寄りの箇所が100cm程幅広い形で機能していたようである。本段階の煙道底面では、燃焼部寄りの箇所から浅いビット状の落ち込みと煙道部と煙出部との境界付近から浅い溝状の落ち込みを検出している。煙出については煙道部分から約20cmの深さにビット状に掘り込んでいる。また、燃焼部からは支脚として機能した土製支脚が出土している。一段階目のカマドは、地下式で、袖部は基部のみであるが幅94cm、煙道長136cmを測る。主軸方位はN-152°-Eである。燃焼部には火床面部分に扁平な自然礫を並べその部分を火床面としている。煙道は燃焼部から20°の角度でややいびつな形状で傾斜している。煙出は上部が欠落しているが、残存部分の奥壁は袋状に入り込んだ後、垂直に近い形で立ち上がっている。

2. 土坑

SK-17(図版18)

X115.6, Y69.6付近で検出した。規模は、152×85×28cmを測る。平面形は梢円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。1層中から鉄滓が少量出土している。

SK-34(図版14)

X162, Y51付近で検出した。規模は、78×66×44cmを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は垂直に近い形で立ち上がる。カマドの精査時に確認してセクションラインがSI-11のカマドのセクション面と同一ラインであったためカマドと併行して精査した。SP-25・26と重複しており、

確認当初抜き取り痕の可能性も持ち得ていたが、堆積土層との関係で、本遺構の方が新しいと判断した。土層番号についてカマドの堆積土と標記を分けるためアルファベットを用いたが、堆積層は6層に分層される。柱穴状の掘り方及び堆積状況を呈しており、構築時点での裏込層がD・F層にあたり、抜き取り時の堆積層がE層、抜き取り後の堆積層がA～Cにあたる。B層中にはB-Tm火山灰が粒状及び・プロック状に堆積しており、S I - 1 1周辺に堆積した土層との関連が考慮される。堆積土中から土師器が出土している。

3. ピット

S P - 2 5 (図版20)

X 1 6 2, 2, Y 5 1, 6付近で検出した。規模は、(60) × (45) × 24 cmを測る。本遺構は前述のSK-3 4の記述のとおり、SK-3 4とS P - 2 6と重複しており、本遺構が最も古い。平面形は残存形で梢円形を呈し、断面形は垂直に近い形で立ち上がる。堆積状況は崩落等の要因を含む自然堆積である。

S P - 2 6 (図版20)

X 1 6 2, Y 5 1, 5付近で検出した。規模は、(33) × (30) × 28 cmを測る。本遺構は前述のとおり、SK-3 4とS P - 2 5と重複しており、S P - 2 5 < S P - 2 6 < SK-3 4の関係である。平面形は残存形で不整円形を呈し、断面形は擂鉢状に立ち上がる。土層セクションについて局的にしか観察できなかったため、詳細については不明であるが、堆積土についてはS P - 2 5同様崩落等の要因を含む自然堆積である。

第4節 時期不明の遺構

1. 穴穴建物跡

S I - 0 5 (図版16)

X 1 1 9, Y 9 4付近で検出した。確認調査時点トレンチ1 8内で確認した円形のプランの竪穴である。規模は、280 × 275 × 25 cm、面積は5,604 m²を測る。平面形は円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。北壁及び南壁側にテラス状の段を有する。堆積土中から繩文土器1片が出土したが、時期判別まで至らなかった。

S I - 0 6 (図版16) X 1 2 9, Y 9 0付近で検出した。規模は、295 × 240 × 17 cm、面積は5,436 m²を測る。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

S I - 0 7 (図版16) X 1 3 5, Y 9 8付近で検出した。確認調査時点トレンチ1 9内で確認した方形のプランの竪穴である。規模は、320 × 260 × 15 cm、面積は5,892 m²を測る。平面形は精査の結果、梢円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。南壁側がやや不整形を呈する。

S I - 0 8 (第7図) X 1 4 3, Y 9 1付近で検出した。不整方形を呈する。確認時に黒褐色土の混合土が堆積したため精査を行ったが、搅乱等の要因が否めず明確な遺構として認定できなかった。

S I - 0 9 (第7図) X 1 4 9, Y 8 3付近で検出した。S I - 0 8と同様の土質であったため、精査を実施したが、結果S I - 0 8と同様の状況で、遺構として認定できなかった。なお、第7図中配置図にカクランとして表示している竪穴状の落ち込みについてもS I - 0 8・0 9と同様の状況である。

2. 土坑

SK-02 (図版17) X106, Y98付近で検出した。規模は、 $122 \times 70 \times 25\text{cm}$ を測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。堆積土が近接するSK-03と同質であるが、出土遺物がないことから本節で取り扱った。

SK-07 (図版17) X122.4, Y89.6付近で検出した。規模は、 $155 \times 130 \times 27\text{cm}$ を測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は壁上部の一部で緩やかに立ち上がる。

SK-08 (図版17) X124, Y88.5付近で検出した。規模は、 $150 \times 130 \times 22\text{cm}$ を測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

SK-09 (図版17) X121.6, Y97.4付近で検出した。規模は、 $153 \times 128 \times 22\text{cm}$ を測る。平面形は隅丸方形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。南東部分にテラスを持つ。

SK-10 (図版17) X134.4, Y95.6付近で検出した。規模は、 $115 \times 70 \times 12\text{cm}$ を測る。平面形は小判形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

SK-11 (図版17) X133, Y91付近で検出した。規模は、 $215 \times 175 \times 13\text{cm}$ を測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

SK-12 (図版18) X134, Y101.2付近で検出した。規模は、 $185 \times 68 \times 30\text{cm}$ を測る。平面形は小判形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

SK-13 (図版18) X132.8, Y102.5付近で検出した。規模は、 $155 \times 70 \times 10\text{cm}$ を測る。平面形は小判形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

SK-14 (図版18) X124, Y74付近で検出した。規模は、 $90 \times 80 \times 15\text{cm}$ を測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は垂直近い形で立ち上がる。

SK-15 (図版18) X123, Y76.6付近で検出した。規模は、 $80 \times 60 \times 17\text{cm}$ を測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

SK-16 (図版18) X124, Y68.9付近で検出した。規模は、 $110 \times 95 \times 25\text{cm}$ を測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

SK-18 (図版18) X123, Y62付近で検出した。規模は、 $165 \times 80 \times 45\text{cm}$ を測る。平面形は不整長楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

SK-19 (図版18) X131, Y43.4付近で検出した。規模は、 $160 \times 104 \times 25\text{cm}$ を測る。平面形は小判形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

SK-20 (図版18) X133.4, Y47付近で検出した。規模は、 $155 \times 120 \times 45\text{cm}$ を測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。底面中央付近に小判形の落ち込みがある。規模は $38 \times 22 \times 10\text{cm}$ を測る。

SK-21 (図版18) X140, Y45.2付近で検出した。規模は、 $153 \times 110 \times 32\text{cm}$ を測る。平面形は不整長楕円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

SK-22 (図版18) X147, Y43.6付近で検出した。規模は、 $67 \times 47 \times 17\text{cm}$ を測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は凹凸を持つ。

SK-23 (図版18) X140.2, Y63付近で検出した。規模は、 $92 \times 82 \times 15\text{cm}$ を測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

SK-24 (図版18) X151, Y40.4付近で検出した。規模は、 $208 \times 110 \times 20\text{cm}$ を測る。

平面形は小判形を呈し、断面形は凹凸を持つ。

S K - 2 6 (図版18) X 1 4 6, Y 4 1付近で検出した。規模は、 $85 \times 80 \times 20$ cmを測る。平面形は円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

S K - 2 7 (図版19) X 1 4 1, Y 4 3付近で検出した。規模は、 $132 \times 65 \times 20$ cmを測る。平面形は小判形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

S K - 2 8 (図版19) X 1 4 3, Y 3 9. 6付近で検出した。規模は、 $120 \times 62 \times 26$ cmを測る。平面形は小判形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

S K - 2 9 (図版19) X 1 6 4, Y 6 4付近で検出した。規模は、 $92 \times 65 \times 20$ cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形はほぼ垂直に立ち上がる。

S K - 3 0 (図版19) X 1 6 5. 4, Y 5 6付近で検出した。規模は、 $112 \times 90 \times 25$ cmを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は段状に立ち上がる。

S K - 3 1 (図版19) X 1 3 1. 6, Y 5 9. 8付近で検出した。規模は、 $140 \times 70 \times 22$ cmを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

S K - 3 2 (図版19) X 1 4 4. 6, Y 6 7付近で検出した。規模は、 $108 \times 66 \times 28$ cmを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

S K - 3 3 (図版19) X 1 6 4. 4, Y 4 7. 2付近で検出した。規模は、 $87 \times 72 \times 18$ cmを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は柱穴状を呈する。南側部分にテラスを有する。

S K - 3 5 (図版19) X 1 6 4, Y 7 4. 6付近で検出した。規模は、 $73 \times 70 \times 20$ cmを測る。平面形は円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

S K - 3 6 (図版19) X 1 2 8, Y 7 8付近で検出した。規模は、 $228 \times 125 \times 48$ cmを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

S K - 3 7 (図版19) X 1 2 0. 4, Y 7 3付近で検出した。規模は、 $205 \times 78 \times 52$ cmを測る。平面形は小判形を呈し、断面形は凹凸を持っている。

3. ピット

S P - 0 1 (図版19) X 9 8. 5, Y 1 0 1. 2付近で検出した。規模は、 $37 \times 32 \times 12$ cmを測る。平面形は円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

S P - 0 2 (図版16) X 1 0 2. 4, Y 9 3. 4付近で検出した。S C - 0 1と重複しており、本遺構の方が新しい。規模は、 $24 \times 19 \times 30$ cmを測る。平面形は隅丸方形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

S P - 0 3 (図版19) X 1 0 7. 4, Y 9 6. 4付近で検出した。規模は、 $40 \times 27 \times 20$ cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

S P - 0 4 (図版19) X 1 1 7, Y 9 1. 6付近で検出した。規模は、 $50 \times 35 \times 10$ cmを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

S P - 0 5 (図版19) X 1 1 9. 4, Y 9 0. 4付近で検出した。規模は、 $63 \times 52 \times 20$ cmを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は段状に立ち上がる。

S P - 0 6 (図版19) X 1 2 1, Y 9 1. 8付近で検出した。規模は、 $55 \times 54 \times 13$ cmを測る。平面形は円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

S P - 0 7 (図版19) X 1 2 3, Y 9 1付近で検出した。規模は、 $50 \times 50 \times 15$ cmを測る。平面

形は円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

S P - 0 8 (図版19) X 1 2 3, Y 9 9. 9付近で検出した。規模は、 $75 \times 50 \times 35\text{ cm}$ を測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は段状に立ち上がる。2層が裏込土に相当し、柱穴設置面が東寄りに傾斜した掘り方を有している。

S P - 0 9 (図版19) X 1 2 1. 2, Y 9 9. 6付近で検出した。規模は、 $52 \times 45 \times 25\text{ cm}$ を測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

S P - 1 0 (図版20) X 1 2 3, Y 9 3. 2付近で検出した。規模は、 $65 \times 55 \times 27\text{ cm}$ を測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は柱穴状を呈する。東壁寄りの部分が柱穴にあたり、西壁寄りの落ち込みは抜き取り痕であると考えられる。

S P - 1 1 (図版20) X 1 2 4. 5, Y 9 5. 5付近で検出した。規模は、 $26 \times 25 \times 27\text{ cm}$ を測る。平面形は円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

S P - 1 2 (図版20) X 1 3 3, Y 1 0 0. 2付近で検出した。規模は、 $85 \times 56 \times 23\text{ cm}$ を測る。平面形は楕円形を呈し、断面形及び堆積状況が柱穴状を呈する。

S P - 1 3 (図版20) X 1 2 4. 4, Y 9 0. 2付近で検出した。規模は、 $66 \times 45 \times 15\text{ cm}$ を測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

S P - 1 4 (図版20) X 1 2 5, Y 8 9. 8付近で検出した。規模は、 $62 \times 55 \times 18\text{ cm}$ を測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

S P - 1 5 (図版20) X 1 3 0. 4, Y 1 0 1. 5付近で検出した。規模は、 $76 \times 50 \times 23\text{ cm}$ を測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

S P - 1 6 (図版20) X 1 2 4. 5, Y 9 5. 5付近で検出した。規模は、 $53 \times 45 \times 15\text{ cm}$ を測る。平面形は円形を呈し、断面形は垂直に立ち上がる。

S P - 1 7 (図版20) X 1 2 5, Y 1 0 1. 4付近で検出した。規模は、 $65 \times 53 \times 30\text{ cm}$ を測る。平面図は落ち込み部のみを図化したが東側に不整楕円形の浅い段状の落ち込みを確認しており、堆積土は不整円形状の部分には3層のみが、浅い落ち込み状の部分には1・2層の堆積が認められた。

S P - 1 8 (図版20) X 1 2 3, Y 7 4. 8付近で検出した。規模は、 $50 \times 45 \times 12\text{ cm}$ を測る。平面形は不整円形を呈し、断面形は擂鉢状を呈する。

S P - 1 9 (図版20) X 1 2 2. 6, Y 5 3付近で検出した。規模は、 $63 \times 43 \times 18\text{ cm}$ を測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は柱穴状を呈する。

S P - 2 0 (図版20) X 1 4 4, Y 4 5. 3付近で検出した。S I - 1 0と重複しており、本遺構の方が新しいが、精査の関係で東側部分が欠落している。規模は、残存部分で $(40) \times (36) \times 12\text{ cm}$ を測る。平面形は残存部分の形状から不整楕円形を呈しているものと考えられ、残存部分の断面形は垂直に立ち上がっている。

S P - 2 1 (図版20) X 1 4 3, Y 4 2. 5付近で検出した。規模は、 $40 \times 40 \times 16\text{ cm}$ を測る。平面形は円形を呈し、断面形は擂鉢状を呈する。

S P - 2 2 (図版20) X 1 6 5. 7, Y 4 8. 5付近で検出した。規模は、 $60 \times 50 \times 30\text{ cm}$ を測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は垂直近い形で立ち上がる。

S P - 2 3 (図版20) X 1 6 4, Y 4 5. 8付近で検出した。規模は、 $50 \times 35 \times 14\text{ cm}$ を測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。

S P - 2 4 (図版20) X 1 6 2, Y 3 9. 8付近で検出した。規模は、 $54 \times 40 \times 12$ cmを測る。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は壁の一部で緩やかに立ち上がる。

4. 焼土状遺構

S N - 0 1 (図版20) X 1 3 1. 2, Y 6 9付近で検出した。規模は、 $255 \times 205 \times 18$ cmを測る。平面形は長方形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。底面中央で不整楕円形の落ち込みを検出した。規模は $124 \times 74 \times 5$ cmを測る。また、西壁外に焼土層が伴う浅い落ち込みを検出した。落ち込みの規模は $54 \times 43 \times 6.7$ cmを測り、焼土範囲は 45×35 cmの範囲で検出している。堆積土中から繩文土器片が出土しているが、遺構の構造から該期に属したとは認定できず、流れ込み等による混入であると考えられる。

S N - 0 2 (図版20) X 1 5 5. 5, Y 5 9付近で検出した。確認調査においてトレンチ10で確認された焼土面であったが、精査の結果黒色土が焼成により焼土化した赤化面のみであることが判明した。規模は、 $45 \times 35 \times 10$ cmを測る。

5. その他の遺構

S X - 0 3 (図版21) X 1 2 6, Y 8 4付近で検出した。規模は、 $690 \times 250 \times 65$ cmを測る。平面形は不整形で、断面形は凹凸を持ちながら緩やかに立ち上がる。斜面上端部がやや幅広に広がった形状で、沢地形に平行した形で構築されている。沢セクションの第7・8層と比較できる土層堆積が認められたが、詳細については不明である。

S X - 0 4 (図版21) X 1 3 5, Y 7 5付近で検出した。北及び東側部分はサブトレンチにより破壊されており、全体形および規模についての詳細は不明である。残存部の規模は、(293) × (285) × 36 cmを測る。平面形は残存部分から円形状を呈した可能性が考えられる。断面形については残存する西・南壁はほぼ垂直に近い形で立ち上がる。西壁側から検出した不整楕円形の土坑は本遺構よりも新しい遺構であり、規模は $170 \times 100 \times 30$ cmを測る。中央よりやや南壁寄りのピットについても本遺構に帰属しない可能性を有しているが、詳細については不明である。規模は $45 \times 45 \times 6.9$ cmを測る。堆積土は、漸移層である暗褐色土主体である。

第V章 出土遺物

本調査で出土した遺物は段ボール箱で11箱である。土器については総破片数2,804点で、縄文土器808点（全体の28.8%）、弥生土器22点（全体の0.78%）、古代の土器が1,974点（全体の70.3%）である。接合資料については縄文土器38資料（467片接合、接合率57.8%）、弥生土器6資料（12片接合、接合率54.5%）、古代の土器は174資料（1232片接合、接合率62.4%）となった。縄文土器や弥生土器については古代の竪穴建物跡の堆積土中から混入して出土した例も多く、遺構に帰属しないものも含まれる。

本章は時代毎の遺物の取扱いとすることから土器の記述に関しては、出土した遺構単位を優先する。また、石器・石製品・土製品・鉄製品については出土点数が少ないとから時代毎に統括して記述した。

（木村）

第1節 縄文時代の遺物

1. 土器

S I - 0 1 (図版22-1)

古代の建物跡の堆積土に混入したものである。1は深鉢形土器の胴部である。R Lの斜行縄文を施したものである。詳細な時期については不明である。

S I - 0 3 (図版22-2～図版23-8)

本遺構は、縄文中期末葉に帰属する竪穴建物跡である。土器敷設石圓炉と堆積土中から出土したものである。炉出土の土器には、SC-01出土のものと接合するもの（8b・c）もある。この炉とSC-01は同時期に構築されたものと考えられ、文様施文部分以下のものをSC-01に使用したと考えられる（一部口縁部片も含まれる）。2は、堆積土出土の胴部に丸みを持つキャリバー状を呈する深鉢形土器である。口縁部には突起と頸部にボタン状の貼り付けを施し、ボタン状貼り付けを弧を描く粘土紐でつなぎだ装飾が見られる。頸部は上下を沈線で区画し、LRの斜行縄文が磨り消されている。頸部を区画する沈線は、上位が鋭角的な波状、下位が波溝状を呈し、その頂部には刺突のあるボタン状の貼り付けを施している。また内面には炭化物の付着が見られる。時期は大木10式併行に位置づけられるものと考えられる。

3～4、8は土器敷設石圓炉から出土したものである。

3は、略完形の深鉢形土器である。底部から胴部中央付近にかけて緩やかに外傾し、口縁にかけてほぼ直立する器形である。口縁はいびつな平口縁を呈し、口唇部は外側につまみ出されている。無節の斜行縄文を地文とし、沈線による文様は、口縁下の波状を呈する沈線と、U字状文を2条の沈線で連結したモチーフ（反転させたJ字状）と波溝状文を横位に展開したものである。また2条の沈線で区画された部分には2段の刺突列が施されている部分も見られる。時期は大木10式併行に位置づけられるものである。

4a・bは土器敷設石圓炉の焼土下から出土した深鉢形土器である。胴部から口縁部にかけて緩やかにカーブを描きながら立ち上がり、口縁が外反する器形である。口縁は波状を呈し、頭頂部内面を指頭で両サイドからつまんで縦長の隆起部分を作り出している。LRの斜行縄文を地文とし、沈線によるJ字状文

と波溝状文の組み合わせで文様を構成している。J字状文は先の膨らんでいる部分も見られ、波溝状文は、頂部が斜め上方向に直線的に立ち上がるものとなっている。時期は大木10式併行に位置づけられるものである。

8a～cは同一個体である。また8b・cは南側に位置するSC-01埋設土器遺構のものと接合し、文様モチーフが描かれている部分は本遺構出土のものである。胴部から口縁部にかけて外傾しながら直線的に立ち上がる深鉢形土器である。口縁は平口縁を呈し、LRの斜行繩文を地文とし、沈線による文様は、口縁の地文を磨り消した部分と地文部分を区画する横位の沈線から垂下させたJ字状文と波溝状文を横位展開したものである。大木10式併行に位置づけられるものである。

5～7は堆積土出土の深鉢形土器の胴部である。5は柱穴(Pit 2)から出土したもので、底部に近い部分と考えられるものである。RLの斜行繩文が施文されており、内面にはススが付着している部分も見られる。詳細な時期については不明である。

6、7は、単節の斜行繩文を地文とし、弧状に沈線を施文しているものである。大木10式併行に位置づけられると考えられる。また6は内面が黒色を呈し、丁寧なミガキ調整が見られる。

S I - 0 4 (図版23-9～13)

古代の竪穴建物跡の堆積土に混入したものである。9、10、12、13は深鉢形土器の胴部である。9は、単軸絡条体を縦位に回転施文したものである。胎土に纖維の混入が見られる。時期は円筒下層位に位置づけられるものと考えられる。10は、結束第1種を施文したものである。詳細な時期については不明である。12、13は単節の斜行繩文を地文とし、弧状の沈線を施文しているものである。時期は繩文中期後葉～末葉に位置づけられるものと考えられる。11は壺形土器の頸部付近である。器形は胴部から頸部にかけて内傾するものである。RLの斜行繩文を地文とし、頸部は地文を磨り消して無文部分を作り出している。頸部と胴部は平行沈線により区画され、胴部には弧状の沈線を施文しているものである。時期は破片のため明確ではないが、最花式に位置づけられるものと考えられる。

S I - 1 1 (図版24-14・15)

古代の竪穴建物跡の堆積土に混入したものである。14a・b、15はいずれも深鉢形土器の胴部である。単節の斜行繩文を地文とし、3条ほどの沈線を縦位に施文したものである。14a・bは同一個体と考えられるものである。時期は、3条1組の懸垂文をメルクマールとする最花式に位置づけられるものと考えられる。

S K - 0 1 (図版24-16・17)

16、17は深鉢形土器の胴部である。16はRLの斜行繩文を地文とし、縦位に沈線を2条施文したものである。17はRLの斜行繩文を施文したものである。時期は繩文中期後葉～末葉に位置づけられるものと考えられる。

S K - 0 3 (図版24-18～20)

本遺構からは、弥生土器が出土しており、提示している資料については混入したものと考えられる。18～20はともに深鉢形土器の胴部である。単節の斜行繩文を施文したものである。繩文施文のみであるため、詳細な時期については不明である。

S N - 0 1 (図版24-21)

SN-01焼土状遺構から出土したものであるが、本遺構は遺構の構造から該期に帰属するものとは言えず、本資料は混入によるものと考えられる。21は底部で、底面に網代痕が施文されているものである。

詳細な時期については不明である。

S X - 0 1 (図版2 4 - 2 2 ~ 2 5)

2 2 ~ 2 4 はいずれも深鉢形土器の胴部である。L R の斜行縄文を地文とし、弧状の沈線を施文しているものである。2 5 は深鉢形土器の底部から胴部にかけての破片である。平底の底部から胴部にかけて外傾しながら立ち上がる器形である。L R の斜行縄文を施文したものである。時期は、弧状の沈線が施文されていることから、縄文時代中期後葉～末葉に位置づけられるものと考えられる。

S X - 0 2 (図版2 4 - 2 6)

2 6 は底部片である。底面に網代痕が見られるものである。詳細な時期については不明である。

また、図示していないが、S X - 0 1 出土土器と接合する無文の深鉢形土器の胴部が出土している。時期は、縄文後期の十腰内 I 式に位置づけられるものと考えられる。

S C - 0 2 (図版2 4 - 2 7 ~ 2 8)

いずれも埋設土器構造から出土した遺物である。2 7 、2 8 は、2 7 の中に2 8 が入った入子状態で出土したものである。2 7 は胴部下半を欠く略完形の壺形土器である。胴上部に最張部を持ち、頸部はほぼ垂直に立ち上がる器形である。L R の斜行縄文を地文とし、頸部は地文が磨り消され無文となっている。また胴部と頸部の境には4単位の瘤状の貼り付けを施している。この瘤状の貼り付けには刺突を施していたようである。2 8 は、胴上部に最張部を持ち、口頸部が内傾する深鉢形土器である。底部を欠いており、口縁は波状を呈し、L R の斜行縄文を施文している。

時期は、壺形土器が広口壺形を呈し、瘤状の貼り付けが施されていることから、最花式と考えられる。2 8 も出土状況や、器形について口頸部が内傾し、胴上部に最張部を持つ特徴から同じ最花式に位置づけられる。

遺構外出土土器 (図版2 4 - 2 9 ~ 4 1)

A・縄文時代前期 (2 9 ~ 3 4)

沢部分と遺構外のX 1 3 0 ~ 1 5 8 、Y 6 7 ~ 8 8 にかけて出土したものである。2 9 ~ 3 1 は深鉢形土器の口縁部である。2 9 は、口縁部文様帶にはL の原体を7条横位に押圧施文している。胴部には口縁部押圧に使用した原体と同一の原体を縦位に回転施文している。また明確ではないが、口縁部文様帶と胴部の境が若干隆起しており、刺突を施しているようである。

3 0 は、口縁部文様帶にはR の原体を4条横位に押圧施文している。口縁部文様帶と胴部の境は若干隆起しており、隆起部分には横位に結束第1種を回転施文しており、その下には単軸絡条体を縦位に回転施文している。3 1 は、口縁部文様帶は、口唇に単軸絡条体を回転施文し、その下にはL の原体を平行に押圧している。3 2 は深鉢形土器の口縁付近から胴部にかけての破片である。口縁部文様帶には横位の単軸絡条体の回転施文とR L の原体を押圧施文している。口縁部文様帶と胴部の境が若干隆起しており、胴部には口縁部とは異なる単軸絡条体を縦位に回転施文している。3 3 、3 4 は深鉢形土器の胴部である。単軸絡条体を縦位に回転施文しているものである。3 4 には他にR L の原体も回転施文している。

これらの土器は、円筒下層d₁式に位置づけられるものである。

B・縄文時代中期

1) 円筒上層式 (3 5 ~ 4 0)

沢部分と遺構外X 1 0 5 ~ 1 5 0 、Y 5 0 ~ 9 0 にかけて出土したものである。3 5 ~ 3 7 は竹管状工具による刺突がメルクマールである円筒上層c式の波状口縁の破片である。3 5 、3 6 は口唇外面に貼り

付けられた隆帯に無節の原体を押圧施文しているものである。また37は折り返し状の口唇外面に単軸絡条体を回転施文しているものである。38は円筒上層d式の口縁部の扇状突起部分である。口唇外面に隆帯の貼り付けとLの原体を押圧施文しているものである。また突起部分には並列する2個の貫通孔とその間にボタン状の貼り付けの痕、平行した隆帯が見られる。39は平口縁の破片である。口唇外面には無節の原体を押圧施文した鋸歯状の隆帯が貼り付けられている。口縁直下にはL.Rの斜行縄文を地文とし、無節の原体を押圧した隆帯が貼り付けられている。時期は円筒上層c～d式のものである。40は胴部片である。L.Rの斜行縄文を施文している。

これらの時期は、口縁部片が円筒上層c～d式に位置づけられるものであり、胴部片についても、それ以外の型式が見られないことから、同じ時期に位置づけられるものと考えられる。

2) 櫻林式 (41)

造構外X121、Y89から出土した口縁部の破片である。41は波状口縁を呈し、折り返し状の肥厚した口縁に幅広の沈線を1条巡らせている。欠損しているが、山形突起下にはおそらく円形もしくは環状の文様が施文されていたと考えられる。胴部にはL.Rの斜行縄文を施文している。口縁外面に巡らされている幅広の沈線は櫻林式のメルクマールであり、この個体は櫻林式土器と考えられる。

(相馬)

2. 石器 (図版25-42～44)

使用・調整痕の認められるもののみ3点図示した。そのうち42・43は古代の竪穴建物跡から出土している。42はS1-01堆積土3層出土の凹基無茎鐵で、 $2.8 \times 1.7 \times 5$ mmを測り、重量は1.4 gを量る。平面形状は二等辺三角形を呈し、側縁部がやや内側に湾曲する。基部の抉り込みは浅く、主要剥離面を残す。先端部がわずかに欠損している。石質は頁岩である。43はS1-01堆積土4層上出土の不定形石器で、 $3.4 \times 3.0 \times 8$ mmを測り、重量は3.8 gを量る。素材剥片自体の形状を、著しく変えるような二次加工は施されていない。刃部角度は右側縁で40～66度、左側縁で36度である。削器的機能を持つと考えられる。二辺が銳角を形成する尖頭状を呈しており石錐の可能性も考えられたが、先端部がやや厚さに欠け明瞭な使用痕跡が認められなかったため、不定形石器とした。石質は頁岩である。44は、確認調査トレンチ18で、本調査時にS1-03相当位置から出土した磨製石斧で、 $1.21 \times 4.7 \times 2.2$ mmを測り、重量は180 gを量る。側縁の稜は部分的に形成されるが明瞭ではない。上端部に敲打痕が見られる。裏面は被熱で赤化し、大きく剥離している。石質は凝灰岩である。

(松橋)

第2節 弥生時代の遺物

1. 土器

S1-01 (図版25-45～49)

古代の竪穴建物跡の堆積土に混入したものである。45～48は鉢形土器の口縁部である。口縁形状は小波状口縁と波状口縁が見られ、口縁が内傾するもの、外傾するもの、外反するものがある。45a・bは同一個体で、小波状口縁端部が内・外ともに隆起している。小波状口縁の成形は、平口縁を抉ることで、小波状を作り出しているものと考えられる。胴部にはR.Lの斜行縄文を施文しており、口縁付近と胴部では施文方向に違いが見られる。46はL.Rの斜行縄文を地文とし、沈線を施文したものである。47は口

唇が先細りするものである。内・外面ともにミガキ調整が見られる。48は鉢形土器の頸部から胴部にかけてのものである。胴部は無文で、頸部はRLの斜行縄文を地文とし、沈線を施したものである。49は、甕形土器の頸部から肩部にかけてのものである。頸部はほぼ直立し、肩部が膨らむ器形を呈する。肩部に平行沈線を施しているものである。いずれも二枚橋式に位置づけられるものと考えられる。

SK-04 (図版25-50~53)

50~52は鉢形土器の胴部である。全て別個体である。胴部が外傾する器形を呈し、LRの斜行縄文を施しているものである。

53は甕形土器の口縁部から肩部にかけてのものである。SK-03出土のものと接合した。SK-03出土のものは断面の磨耗の度合が強いことから、本遺構から混入したものと考えられる。頸部はほぼ直立し、肩部が膨らむ器形を呈し、口縁は外反するものである。口唇外面に刻目を施し、頸部上位には3条の平行沈線、肩部にも平行沈線を施している。また口縁内面にも沈線を1条巡らせている。内・外面とともにミガキ調整が見られる。いずれも二枚橋式に位置づけられるものと考えられる。

SK-05 (図版25-54)

54は甕形土器の口縁部である。肩部に丸みを持ち、口縁部が内傾する器形を呈する。RLの斜行縄文を地文とし、頸部に平行沈線を4条巡らせている。二枚橋式に位置づけられるものと考えられる。

遺構外出土土器 (図版25-55~57)

遺構外X110~120、Y70~101にかけて出土した。3点出土しており、いずれも鉢形土器である。55は口縁部から胴部にかけてのものである。肩部に丸みを持ち、口縁が外反する器形である。口唇は幅広の作りとなっている。口縁部、頸部は無文である。胴部にはLRの斜行縄文を施している。56は口縁部である。平行沈線を施しているものである。57は胴部である。胴部が外傾する器形を呈し、LRの斜行縄文を施しているものである。いずれも二枚橋式に位置づけられるものと考えられる。

(相馬)

第3節 古代の遺物

1. 土器

SI-01 (図版26-58~64)

出土破片数77片、接合資料7資料中7点図示した。58はPit8堆積土1層及び2層から出土した須恵器杯で、口径13.7cm、器高5.0cm、底径6.4cm、器高指数3.6.4、底径指数4.6.7を測る。内外面とも灰黄色を基調とし、口縁部の一部で観察される重ね焼き痕の部分は黒灰色~淡黒灰色を呈する。やや粘りの弱い胎で、粒度のきめ細かい長石及び石英ならびに赤色粒が微量混入しているが、赤色粒はやや茶褐色に近い色調を呈している。海綿骨針については極微量観察されるのみである。器形は、体部下半から口縁部直下にかけて稜段が顕著であるが、体部中半は口縁部の外反のため、意図的なロクロナデにより調整され、その結果内面部分については体部下半と上半との明瞭な差となり、外面はやや崔んだ形状を呈している。見込み部分は、中央を潰すような形で成形している。底部切離しは右回転糸切で、切離し後、笠起し痕が浅く観察される。また、糸切部分の中央を笠により数回撫でられた痕跡が観察された。使用痕については見込み部分がやや摩耗を受けた痕跡は確認できるが、顕著な光沢面等は観察されなかった。欠損部の破断面は摩耗が著しく、二次被然により淡褐色に変色している。59は堆積土出土の土師器杯で、底径4.8cmを測る。欠損資料で破断面の摩耗は著しい。色調は浅黄橙色~にぶい黄橙色を呈

する。やや粘りのある胎で、長石・石英等が少量、赤色粒については顕著に観察され、粒径の大きなものについては20mm大のものも含まれる。残存部の器形は体部下半にかけて浅い稜を形成しているが、体部上半は稜が顕著でなく、延ばしあげるように形成されている。焼成時内面体部中間に混入した礫周辺にひびが入っており、外面側部分には火膨れが生じている。底部切離しは右回転糸切で、切離し後、一度幅広の籠状工具により、工具の進入方向から左側刃が入り込む形で起こされた後、若干角度を変え、単位の細い工具により3条（1単位？）入れることにより籠起しがなされている。また、底部の端面の一部は押しつぶされており、体部最下端まで及んでいる。60は支脚相当位置から出土した土師器小甕で、口径12.0cm、器高9.6cm、底径7.1cmを測る。色調は燃焼部に面していた側の部分が二次被熱により変色しているが、にぶい橙色～橙色を呈する。粘りのある胎で、石英・長石・輝石等が中量、30mm大の摩耗や剥離が生じた小礫が微量混入している。輪積み成形で、口唇部は上端を平滑にして浅い凹線を一条入れている。外面の器面調整は、口縁部を横方向に撫で、局所的に段状に作り出しているが、体部の調整の縱方向の籠によるナデにより区画が明瞭でない状況である。また体部の籠によるナデは、局所的に集中している箇所がミガキ状に重なっており、光沢を帯びている。しかしながら、調整によって輪積み痕は十分に消されていない面があり、体部について6条（7段）残存して観察される。内面の器面調整は、横方向及び斜め方向の指ナデによる調整で、外面とは異なり体部にかけてほとんど輪積み痕は撫で消されているが、口縁部直下は局所的に輪積み痕が観察される。また、図示した図面上には表現されていないが、口縁部は、部分的な付け足しを除いて2段の粘土紐により成形されている。底部については籠による調整で、外面の部分的な器面調整と同様、ミガキ状に複数回工具により調整され光沢を帯びている。61はカマド崩落土中である6層から出土した土師器甕の口縁部片で、口径20.6cmを測る。外面が若干摩滅しており、煤や付着物の影響により色調に影響が生じているが、内面等の色調からもともとは浅黄橙色を呈していたものと考えられる。やや粘りのある胎で、長石・針状輝石・石英等の砂粒・粒度の細かい風化した赤色粒及び浸食により球状に摩耗した赤色粒を中量含む。口唇部を平滑に外傾させており、口縁部は内外面とも横方向のナデによる調整で、欠損資料のため、局所的であったが、頸部の体部との境界に近い箇所であると推定される部分については籠状の工具により横方向に撫でられ、体部の調整であると考えられる縱方向の籠が観察された。62はカマド堆積土出土資料とSI-02カマド煙道底面、堆積土、SI-02内Pit9堆積土1層から出土した破片が遺構間接合した口縁部下端から体部上半にかけての土師器甕である。接合関係は上端からSI-02Pit9出土+SI-01カマド出土+SI-02堆積土出土+SI-02カマド煙道底面出土の関係である。SI-01出土資料については外面の器面の摩滅が著しく、SI-02出土資料についてはPit9出土資料の摩耗が著しく、カマド煙道底面出土の資料が最も器面の残存状況がいい状態である。それぞれの破片は摩耗・摩滅が著しく、さらに二次被熱の色調についてもSI-02堆積土出土とカマド底面出土資料には連続性が認められたが、それ以外のものについては非連続であることから破片化した状況でかなりの流動が生じていたものと考えられる。やや粘りのある胎で、石英と風化した赤色粒がやや顕著に含む。調整は、口縁部については横方向のナデであり、体部との境界相当位置の箇所は、指オサエによる指頸圧痕が浅く観察されるが、明確な境界は生じておらず体部の張りも弱い。頸部の端部には補修孔が1つ外面側から穿たれていた。63・64は3層及び堆積土一括出土の鉢形状の土師器で、同一個体の可能性も有するが接合関係が認められず、調整手法に差異があったことから別々に図示した。口径については残存率の良好であった64については20.8cmを測る。いずれの資料も粘りのある胎で、小礫を微量・赤色粒を中量含み器面にピッチの付着が観察される。63の

資料はやや砂粒の量が64に比べ多く、海綿骨針が少量含まれ、64の資料には鉄滓が含まれるという差異がある。器壁が厚く器形は不規則な波状口縁を呈し、口縁部はやや直立気味体部上半がやや張る形状を呈する。外面調整はいずれも口縁部が横方向のナデ、体部上半が横～斜め方向のハケメ、体部下半が横方向のヘラケズリが施されるのに対し、内面調整について63は口縁部～体部中半までがナデで、体部中半～下半にかけてヘラケズリ状を呈するが、64の調整は63の手法が行われたのち、口縁部～体部下半まで指によるナデが施され、前段の調整が撫で消されている。

S I - 0 2 (図版26-65～図版28-86)

出土破片数827片、接合資料72資料中22点図示した。65は堆積土下層から出土した須恵器坏で、口径13.3cm、器高5.6cm、底径6.6cm、器高指数42.1、底径指数49.6を測る。色調は内外面とも灰白色を呈し、口縁部直下に観察される重ね焼き痕は2.5Y6/1～5/1の黄灰色を呈する。やや粘りのある胎であるが軽質で、凝灰質の小礫を微量、石英・針状輝石・輝石等が中量、海綿骨針を微量含み、赤色粒については極微量しか含んでいない。器形はS I - 0 1出土の58にも類似しているが、やや角度を持ち立ち上がる。稜段は58に比べ浅く、やや幅が狭い点が特徴である。底部切離しは右回転糸切で、切離し後の籠起し痕は深い単位が1条観察されるのみである。使用痕については顯著ではないが内面の口縁部付近に若干摩耗が確認できる。66は堆積土下層及び建物跡堆積土から出土した須恵器坏の口縁部で、口径13.4cmを測る。色調及び胎土の特徴は66と類似したものであるが、石英がやや多量含まれている。また、煤状の付着物が外～断面～内面にかけて付着していることから破片化した状態で、遺構の焼失に介在したものと考えられる。67は床面及び堆積土出土の須恵器坏の口縁部で口径(12.6)cmを測る。本遺構出土の須恵器資料の中で唯一胎土の特性が異なり、きめ細やかで粘りのある胎で、やや青みがかる色調を帯び、重ね焼き痕部分もN3/0の濃灰色を呈する。混入物については粒度の細かい石英・長石等が微量含まれているが、赤色粒は含まれておらず、φ10～20mmの鉄分状の黒色粒が微量含まれている。器壁が他の資料にくらべやや肉厚で、口縁部付近をつまみ返すように軽く外反させている。本資料は3片接合した資料であるが、各破片とも被熱及び煤状の付着物が破断面付近を中心に観察されたことから66と同様の状況であったことが考えられる。68は床直出土の須恵器坏口縁部で口径(13.4)cmを測る。内外面とも灰白色が基調であるが、二次被熱の影響なのかやや白味がかった色調を呈しており、重ね焼き痕も淡い灰黄色を呈する部分が局所的に観察されるのみで顯著ではない。やや粘りのある胎で、長石・輝石のほか不透明鉱物等が多く、赤色粒についてもかなり粒度はきめ細かいが中量含まれる。器形は65・66に類似した浅い稜段をもつタイプで、口縁部をやや直立気味につまみ上げるように軽く外反させている。69は堆積土出土の須恵器坏口縁部で、口径(13.0)cmを測る。本資料も前述の資料同様二次被熱により変色及び煤状の付着物が各破片非整合に付着しており、前述の影響に置かれた資料であると判断される。色調は被熱の影響により白味がかった灰白色を基調としている。やや粘りのある胎で、石英・輝石のほか凝灰質小礫、不透明鉱物等を多量含む。器形は稜段が目立たない椀状に近いタイプで67ほど顯著ではないが軽くつまみ返すように外反させている。70は北側コーナー付近の堆積土から出土した土師器坏で、口径12.7cm、器高4.9cm、底径5.2cm、器高指数38.5、底径指数40.9を測る。色調は内外面とも橙色を基調とするが、カマド支脚設置部分から出土する坏・椀によく見受けられる馬蹄円形状の二次被熱痕や土器焼成の際、倒位に製品を立てかけた結果重ね焼き痕として観察される馬蹄形状の痕跡と同質のものが観察され、その箇所のみ色調が灰白色

(10 YR 8/1) ~褐灰色 (10 YR 6/1) を呈する。堆積土中位という出土位置から造構の焼失時の二次被熱についての影響について消極的な評価となる。内面の器面についても外面に対応した色調を呈していることから焼成時点での影響の可能性を含んでいる。粒度のきめ細かい砂質がかったザラザラした質感を有する胎で、かなり粒度のきめ細かな長石や輝石が少量、海綿骨針が多量含まれるほか、粒度の粗い(最大φ 7.0 mm) 赤色粒が多量混入されている。底部切離しは右回転糸切であるが、切離し時点で、やや回転にムラが生じている。器壁は肉厚で、器形は丸みを帯び、口縁部は軽くつまみ返すように外反させている。また、口唇部に打ち欠き痕が1カ所観察された。その位置は前述の色調の灰白色がかった箇所を中心に打ち欠かれている。使用痕は見込み部分を中心に摩滅した箇所が観察された。71は堆積土出土の土師器坏口縁部で、口径12.3 cmを測る。本資料は前述の須恵器片同様破片化した状態で二次被熱を受けた資料と認定できる資料で、色調についても影響が生じているが、にぶい橙色を基調としている。胎は7.0と類似した質感ではあるが71の方がやや粘りを持ち、混入物等についてもほぼ同質であるが、赤色粒の粒径がφ 1 mm前後と小さい。器壁の肥厚や器形についても7.0とほぼ同質である。72は堆積土出土の非ロクロの黒色土器坏で底径4.7 cmを測る。焼成時に黒色化させた部分以外に、二次的な影響による煤等の付着箇所もあるため、色調についても影響があると考えられるが、外面の色調は黒色~灰黄褐色、内面は黒色を呈する。粘りのある胎で、石英等の透明鉱物を多量に含む。輪積みによる成形で、内外面及び底面をヘラミガキにより調整しているが、甕と同様に外面の一部に輪積み痕の残存が観察される。73はSP-07・08・09及び貼床ならびにカマド1堆積土等から出土した土師器甕で口径22.2 cmを測る。破片化した状態で各造構内に埋没している状態で、器面の状態が出土地点毎に大きく差異が生じているが、にぶい橙色~橙色を基調としている。粘りのある胎で、川砂等の小礫を微量、石英・長石・輝石等の砂粒を多量、海綿骨針を中量含む。口縁部に最大径を有し、口唇部の器壁がやや厚く丸みを帯びながら外反するのが特徴で、頸部は横ナデによる調整で体部との境界は体部の縦方向のヘラミガキによる調整が頸部の一部に不均一に及んでおり不明瞭である。内面の調整は横方向の箇によるナデで、局所的に木口痕が観察される箇所が見受けられる。本資料は、輪積みによる成形であるが、輪積み痕は内外面ともほとんど調整により消されていて、内面の口縁部直下の一部分で観察されるのみである。74はPit 2・6・8堆積土・貼床・カマド1堆積土出土の土師器甕で、口径20.4 cmを測る。破片毎に色調は異なっており、Pit 1内出土資料については煤が付着しており、色調が黒褐色(10 YR 3/2)を呈するものが多いが、橙色を基調としている。各破片の破断面は摩滅しており、他の資料と同様破片化した段階で流動していたものと考えられる。粘りのある胎で、川砂起源の小礫を微量、石英・輝石・針状輝石・長石を多量に含み、海綿骨針についても微量含まれる。器形は頸部幅が比較的短いタイプで、口唇部は若干つまみ返すように外反させている。口縁部は横ナデにより調整されており、頸部を若干強く平行に撫されることによって括れを作出している。体部の調整は斜め方向のヘラケズリが施された後、体部中半は縦方向のヘラケズリが再度施され、口縁部直下及び体部中半の一部では、縦方向及び横方向のヘラミガキにより調整されている。さらに体部上半には箇の一側辺が若干深めに斜め方向に入り込んでいる。口縁部の横ナデ部分に工具がやや難然と及んでおり、明確な境界は存在しない。内面の口縁部の調整は、横方向のナデで、体部の調整は横方向の浅いハケメが施された後、横方向及び斜め方向のナデにより調整されている。75はPit 8・9堆積土から出土した土師器甕で口径20.4 cmを測る。浸食等の影響により若干退色している箇所も見られるが、色調は明赤褐色を基調とする。外面の口縁部~体部上半にかけて二次被熱痕が梢円形状に観察されるが、破片間で連続性は保たれている。やや粘りのある胎であるが、φ 0.5

mm前後の石英・輝石等の砂粒が多量に含まれることと浮石が含まれており、本資料は素地の胎土に遺跡の基盤層である月見野火山灰層の介在の可能性が考慮される。素地における月見野火山灰層の介在は青森市南部の遺跡内では粘質の大谷火山灰層とその上位に堆積している浮石質の月見野火山灰層が土器胎土として用いられている。本資料は海綿骨針が含まれることから基本の素地として本遺跡及び周辺の石江地区内の基盤層である海成起源の岡町層の介在が考慮される。器形は口縁部と肩部の最大径がほぼ同じもしくは若干肩部に最大径がくるタイプで、口唇部を平滑に外傾させている。口縁部は横方向のナデで、中位の部分でやや折り返すように外反させている。外面の体部の調整は斜め方向のハケメで、局的に口縁部まで及んでいる。内面の口縁部の調整は外面と同様横方向のナデで、体部の調整は横方向のハケメで内外面とも同一の工具が使用されている。また、ハケメ調整の後、工具の側刃を斜めに流して箒描き状に痕跡がついた箒所が一ヵ所観察された。7-6はPit 6・8堆積土・カマド1堆積土・建物跡堆積土から出土した土器器窓の底部資料で、底径5.4cmを測る。色調は明赤褐色～橙色を呈し、Pit 8出土資料片がハジケや被熱の度合が強い。7-4と類似した胎の特徴を有し、調整手法についても類似した特徴を有する。底面の調整は体部の調整手法と同様にヘラケズリされた後ヘラミガキが施されている。7-7はPit 7堆積土及び建物跡堆積土出土の土器器窓で、口径(27.4)cmを測る。色調は明赤褐色を基調とするが、各破片間で退色の度合が異なり摩滅が著しい。やや粘りのある胎で、河川起源の小礫及び浮石の混入が顕著である。器形は有段口縁を持ち、口唇部は平滑に外傾させているが、端部については丸みを帯びている。口縁部はハケメ調整がされた後、横ナデにより調整されており、中位で折り返すように外反させている。体部との境界に幅広の沈線を二条やや雑に施して区画している。その沈線直上から沈線上にかけてややルーズな鋸歯状の箒描きが施されている。体部は摩滅により局的にしか観察されなかつたが、ヘラミガキが斜め方向に施されている。内面の調整は、口縁部上半は横ナデの後、横～斜め方向のヘラミガキ、段部は綾杉形のハケメ、体部は横方向のハケメである。7-8はPit 8底面・Pit 9堆積土1層・カマド1煙道底面から出土した土器器窓で口縁部の上半は沈線に沿う形で欠損している。色調は橙色を呈するが器面の摩滅・剥離が著しい。器形は口縁部上半が欠損しているため詳細は不明であるが、頭部の括れが甘く、体部の張りも顕著ではない器形であると考えられる。頭部は残存部分で平行沈線を6条施し体部との境界を明確にしている。体部の調整は上半が横方向、中半が斜め方向のハケメによるもので内面は外面に用いられた工具よりやや条線間の間隔が広い横方向のハケメが口縁部～体部にかけて施されている。7-9はカマド1堆積土及びSI-01堆積土との構構間接合資料の土器器窓で、口径25.5cmを測る。色調は各破片間で異なり、煤の付着等の連続性が認められない箒所が多く観察されたが、橙色～明黄褐色を基調とする。SI-01出土資料については浸食により退色・摩滅が著しい資料で流动的混入であったことが考えられる。また、SI-02堆積土出土資料については二次被熱により硬化している箒所が観察された。やや粘りのある胎で、φ3mm前後の浮石の混入が認められる。頭部に浅い段を持つ器形で、口唇部は側面を平滑にして上端部を内側からつまみ上げるように立ち上げている。口縁部は横ナデによる調整で、体部との境界はやや強く撫でることに外反させている。体部の調整は倒位の状態で左下がりの箒による調整が行われた後、右下がりのハケメにより調整されているが、口縁部直下までハケメが及んでいる。一次調整の箒の痕跡は粘土のよれによって残存が確認できる。内面の調整は、口縁部は横方向のナデ、体部については横方向のハケメによるものである。8-0はカマド1堆積土・建物跡堆積土出土の土器器窓で、口縁部上端が欠損している。二次被熱及び浸食による退色が顕著で、外面の色調は明赤褐色、内面は橙色を基調とする。やや粘りのある胎で、河川起源の小礫及び浮石の混入が顕著である。器形は7-7に類似した形

状を呈すると考えられるがやや括れが甘く、上端の器壁はやや厚くなる。口縁部は横ナデによる調整で、体部との境界は77と同様ルーズな平行沈線を2条施している。体部の調整は縦方向のヘラケズリ及びヘラミガキによる調整である。内面の調整は口縁部～体部にかけて横方向のハケメで口縁部には放射状の箒描きが3条観察される。81はカマド1堆積土及び建物跡堆積土出土の土師器甕で、口径22.0cmを測る。油分状の付着物が認められる箇所が多いが、外面の色調は橙色、内面の色調はにぶい黄橙色を基調とする。やや粘りのある胎で、他の甕と同様に石英・輝石・針状輝石等の砂粒を多く含み、浮石についてもφ3～5mm大の混入が認められた。器形は砲弾形を呈し、口縁部直下に平行沈線を5条施しているが、最下端の1条は全周していない。外面の調整は、口縁部が横方向のヘラミガキ、体部が斜め方向のヘラミガキによる調整でストロークの長さが長い。内面の調整は口縁部が外面と同様横方向のヘラミガキ、体部上半は外面と同様斜め方向のヘラミガキ、体部中半～下半は木口の幅がある横方向のハケメである。82はカマド1出土の土師器甕で、口径22.3cm、器高31.8cm、底径7.8cmを測る。各破片とも色調が異なっており、二次被熱を受けた箇所や黒化した箇所や浸食を受けた箇所等破片化した状態で二次的な影響を受けているが、内外面とも橙色を基調としている。器形は体部が砲弾状、口縁部がラッパ状を呈する器形で口縁端部を平滑に外傾させており、端面直下を箒状の工具を使い横方向に平滑に撫でて段を形成している。さらに頭部は直立気味の段状を呈し、体部との境界に平行沈線を2条施し境界としている。外面の調整は口縁部が浅い角度の斜め方向のハケメ、体部の平行沈線直下の部分は横方向のヘラミガキ、体部は下半が縦方向のハケメが残存して観察されることから一次調整にハケメが施された後斜め上がりのヘラミガキが施されていたものと考えられる。内面は口縁部の一部にヘラミガキが認められるが、横方向のハケメを基調とする。83は床直及び堆積土出土の土師器甕底部で、底径8.6cmを測る。色調は破片単位で二次被熱等を受けていたため一定ではないが、外面は明赤褐色、内面は橙色を基調とする。やや粘りのある胎で、砂粒を多量に含み、海綿骨針についても他の資料同様微量含まれる。体部の調整は底部～体部方向へのヘラケズリで、内面は横方向の箒による調整である。また底面については無調整で、底部の端面が一部打ち欠かれている。84は床直及び堆積土出土の土師器鉢状の小甕で、口径(15.8)cmを測る。色調は二次被熱により一部退色しているが、外面は褐色、内面は橙色を基調としている。やや粘りのある胎で、他の甕と同質の混入状況を持ち得ている。器形は括れが甘く、口縁部についても頭部を短めに軽く外反させた程度の作りである。調整は外面の口縁部が横方向のナデ、体部がヘラケズリで、口縁部との境界はルーズである。内面の調整は口縁部がナデで、体部が横方向の箒によるナデである。85は堆積土出土の土師器甕で、口径(21.0)cmを測る。色調はにぶい橙色～橙色を呈する。やや粘りのある胎で、他の甕と同質の混入状況を持ち得ている。器形は緩やかに外反するタイプで、口唇部をやや丸みを帯びさせつまみ返すように外反させている。外面の調整は、口縁部は横方向のナデ、体部は箒による縦方向の浅いナデで、粘土が頭部の部分に寄せられている箇所が数ヶ所観察される。内面はナデによる調整である。体部の一部に黒斑が観察される。86は堆積土出土のロクロ小甕で口径12.0cmを測る。二次被熱により大きく変質しており、色調はにぶい橙色～橙色を呈する。浮石等を多量に含むやや粘りに欠ける胎で、バサバサした質感を有する。調整は内外面ともロクロナデで、口縁部は鈎状を呈している。

S I - 0 4 (図版28-87～図版29-95)

出土破片数175片、接合資料15資料中10点図示した。87はカマド支脚相当位置から出土した土師器坏で、口径13.2cm、器高5.3cm、底径5.6cm、器高指数40.1、底径指数42.4を測る。

二次被熱により変色・ハジケが生じており器面に影響が生じているが、内外面ともにぶい黄橙色を基調としている。やや粘りのある胎で、粒度の細かい砂粒を多量、海綿骨針を微量含む。また、 $\phi 1 \sim 3\text{ mm}$ 前後の浮石粒が中量混入している。器形は体部下半からやや膨らみを持ちながら立ち上がり、口縁部付近で軽くつまみ返すように立ち上がっている。底部切離しは右回転糸切で、切離し後、平滑な幅の広い工具により籠起しがなされている。口縁部の外面には、煤と油分状の付着物が観察され、内面見込み部分は煤状の付着物とハジケが観察される。88は7層出土の土師器坏で、口径11.5cm、器高5.15cm、底径5.0cm、器高指数4.4.7、底径指数4.3.4を測る。器面の浸食の影響が著しく内外面とも変色した状況ではあるが、明黄褐色を基調とする。やや粘りに欠けるザラザラした質感を有する胎で、海綿骨針を微量、茶褐色状の赤色粒が中量含まれる。椭状の器形で、体部下半～底部にかけてやや肉厚な器壁で、体部上半から延ばし上げるように浅く外反させている。底部切離しは右回転糸切で、底面中央がやや窪んだ形状を呈している。また、外面の口縁部付近には粘土が付着している。89は7層及び5層出土の土師器坏で、口径13.6cm、器高5.0cm、底径5.2cm、器高指数3.6.7、底径指数3.8.2を測る。器面は摩滅しており、特に底面の摩滅が著しい。色調は橙色を基調としている。粘りに欠けるザラザラした質感を有する胎で、海綿骨針を微量、赤褐色の $\phi 1 \sim 4\text{ mm}$ 大の赤色粒が多量含まれる。88と同様に体部中半～下半にかけて器壁に厚みを持っているが、体部上半～口縁部にかけても厚みを持ちながら開き気味に外反している。底部切離しは右回転糸切であるが、摩滅が著しいため籠起し痕等は観察されなかつた。体部上半に正位の状態で「六」の墨書が正位に記入されており、また墨書位置から左側に約90°の口唇部上に打ち欠き痕が観察される。90は床直及び5層出土の土師器坏で、口径13.2cm、器高5.6cm、底径5.4cm、器高指数4.2.4、底径指数4.0.9を測る。89と同質のやや粘りに欠けるザラザラした質感を有する胎で、色調は外面とも橙色を呈する。混入物等についても89とほぼ同質である。椭状の器形を有し、89と同様の器壁の厚さを持つが、丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部付近をつまみ返すように外反させている。底部切離しは右回転糸切で、89と類似した切離し形状を呈している。内面の見込み部分～体部下半にかけて黒斑が観察された。91はカマド5層出土の土師器小甕の口縁部片で、口径(16.0)cmを測る。色調はにぶい橙色～橙色を呈する。やや粘りのある胎で、粒度の細かい浮石の混入率が高い。口縁部の調整は横方向のナデで、体部に近い箇所から折り返すように外反させている。口唇部は玉縁状の作り出しをしており、つまみ返すように外反させている。体部の調整は縦方向の籠による調整で、籠そのものが頭部まで及んでおり、明瞭な境界は存在しない。内面の調整はナデによるものであるが、接合痕が十分に撫で消されていない。92は床直及び5層出土の土師器甕で、口径21.8cmを測る。一部の破片で煤の付着が見られるが破片間の連続性は認められず非整合である。色調はにぶい橙色～浅黄橙色を基調とする。やや粘りのある胎で、河川起源の小礫を中量、金雲母を含めた砂粒が多量、海綿骨針が微量含まれる。口縁部に最大径を持ち、体部上半がやや膨らみを持つ器形で、口縁部は横方向のナデで、「く」字状に外反する。口唇部は平滑を意識しているがややルーズで、崩れた凹線状の沈線が1条施されたように窪ませている。外面の体部の調整は縦方向のヘラケズリで、体部方向から口縁部に向かって工具が動かされている。頭部付近で寄り返すような動きがなされているが粘土が寄り固まるような箇所は観察されない。内面の調整は、口縁部は外面と同様に横方向のナデで、体部は横方向のハケメである。93は床直及び5層ならびにS I - 0 2堆積土との遺構間接合の土師器甕で、口径21.3cmを測る。5層出土の破片は二次被熱を受けており、器面が浸食や変色を受けており、S I - 0 2出土資料についても同様に二次被熱を受けており、内面側が暗褐色(10 YR 3/3)に変色しているが、明赤褐色～明褐

色を基調とする。やや粘りのある胎で、河川起源の小礫を微量、金雲母を含めた砂粒が多量、海綿骨針が微量、赤色粒が多量含まれる。頸部は浅い段状を呈し、横方向のやや強いナデにより外反させている。口唇部は9.2と類似した形状を持つが、側辺を平滑にしてつまみ上げるように外反させている。また、端面は局所的に凹線状を呈している。外面の体部はヘラケズリによる調整で、頸部の中半まで及んでいる箇所がある。内面の口縁部の調整は横方向のナデで、体部の調整は横方向のハケメである。9.4はP i t 3堆積土上層と床直と建物跡堆積土5層とS I - 0 2 P i t 8堆積土上層及び建物跡堆積土とS I - 0 1堆積土との遺構間接合の土師器甕の体部～底部にかけての資料である。底径は8.6cmを測る。本遺構出土の資料については器面の摩滅・剥離が著しく、S I - 0 2出土の資料は被熱により器面に煤状の付着物が認められ、S I - 0 1の資料は底部の一破片のみで破断面の摩耗が著しい。色調は浸食・摩滅による影響が認められるが、外面はにぶい橙色、内面は赤灰色を基調とする。やや粘りのある胎で、河川起源の小礫を少量、砂礫を多量、海綿骨針を微量、浮石を少量、赤色粒を多量含む。体部下半でやや膨らみを持ちながらやや直立気味に立ち上がる器形を持つ。外面の調整は縦方向のヘラケズリで、底部側から頸部方向に向かって削られている。内面の調整は横方向のハケメで見込み部分にも残存している。底面は砂底で、中央が側縁にくらべやや砂粒の付着量が少ない。9.5はカマド支脚相当位置及び5層ならびにS I - 0 2堆積土との遺構間接合の土師器甕の体部～底部にかけての資料である。底径は9.4cmを測る。本遺構出土の資料は底部付近を中心に出土しているが、5層出土の資料の一部は体部片が含まれ、S I - 0 2出土の部分と接合関係が認められており、破片化した状態で流动した資料も含まれている。支脚相当位置から出土した資料が外面の器面が二次被熱により変色している状態で、摩滅が著しい。外面の色調はにぶい黄橙色を基調とし、内面は赤灰色を呈しているが、焼成時の影響により内面のほとんどが褐灰色を呈している。やや粘りのある胎で、9.4とほぼ同質である。器形については、底部が横方向のハケメによる調整で台状を呈しており、体部は若干開き気味に立ち上がっている。調整は内外面とも同一の工具によるハケメで、外面の底部付近は斜め方向及び横方向で、体部は縦方向及び斜め方向で、体部中～上半にかけては縦方向が多い。また内面は横方向及び斜め方向で斜め方向が最後に施されている。ハケメの間隔がやや幅を持っている特徴がある。底面についても同様の工具による調整で、側縁を最初に調整した後中央付近を複数の方向から調整している。9.6は5層出土の資料とS I - 0 2堆積土出土資料との遺構間接合資料の土師器甕底部片で、底径9.8cmを測る。内外面とも剥離が著しくS I - 0 2出土資料については二次被熱によりハジケが生じている。色調についても影響が生じているが、外面はにぶい黄橙色、内面は浅黄橙色を呈する。内外面とも器面の情報は剥落により詳細は不明で、底面は網状の木葉痕である。

S I - 1 0 (図版29-97～図版30-105)

出土破片数260片、接合資料32資料中9点図示した。9.7は床直出土の土師器坏で口径(11.8)cmを測る。器面は浸食による影響があり、色調は内外面とも浅黄橙色を基調とする。やや粘りのある胎で、小礫を少量、砂粒を微量、φ1～3mmの赤色粒を中量含む。椀状の器形で、やや直立気味に立ち上がり口縁部付近はやや強めに撫で上げ、軽くつまみ返すように外反させている。9.8は床直出土の土師器坏で口径(12.0)cmを測る。にぶい黄橙色を基調とする。9.7と同質の胎で、風化した赤色粒が中量含まれている。9.7と同様やや直立気味に立ち上がる器形で浅い段状が外面側に観察される。9.9は床直出土の非口クロ土師器坏で口径15.4cmを測る。色調は外面がにぶい黄橙色、内面は灰黄褐色を呈する。内外面とも黒斑が観察される。粘りのある胎で、かなり粒度のきめ細かい金雲母片や針状輝石、海綿骨針

等を含む。器形はやや直立気味の器形で口縁部を横方向のナデにより軽く外反させている。外面は縦方向のヘラケズリを施した後、体部中半から口縁部直下にかけて横方向のヘラミガキによる調整で、内面は横方向のヘラミガキが施されている。外面の口縁部直下の箇所には輪積み痕が残存して観察される。100はカマド堆積土、床直、堆積土下層出土の土師器甕の口縁部資料で、口径(24.4)cmを測る。色調は内外面とも橙色を呈し、器壁の一部は浸食により影響を受けている。やや粘りのある胎で、小礫の他、石英を主体として金雲母等も含む砂粒を中量、海綿骨針・赤色粒を微量含む。器形は「く」字状を呈しているが、外面の頸部を横方向のナデにより浅い段を有している器形で、口縁部は中位の位置から横方向のナデにより外反を強めている。外面の調整は、口縁部付近では斜め方向のハケメが施された後、横方向のナデにより撫で消されており、体部は横へ斜め方向のハケメが施された後、斜行気味のハケメにより調整されている。内面の口縁部は横方向のナデで、体部は条痕状の工具による横方向のハケメである。101はカマド煙道、床直、堆積土出土の土師器甕で口径21.8cm、器高31.8cm、底径8.4cmを測る。色調は外面の肩部～体部下半にかけて煮沸時の影響による煤や付着物があり、底部下半については二次被熱により剥落等も生じており影響を受けているが、内外面とも橙色を基調としている。やや粘りのある胎で、100と同質の混入物である。頸部幅の長い砲弾状を呈する器形で頸部は体部上半からの内傾から横方向の調整により若干角度を変え直立気味に内傾しながら立ち上がり、口縁端部で折り返すように外反している。口唇の端面は端部が丸みを帯びながらも面取りされている。調整は口縁部が横方向のハケメ、体部上半が横方向のヘラミガキ、体部中半から下半にかけては斜め方向のヘラミガキによる調整で、内面について口縁部は横方向のハケメが施された後、横方向のヘラミガキ、体部については横方向のハケメが施されている。底面については無調整である。102はカマド堆積土及び床直出土の土師器甕の口縁部資料で、口径(22.0)cmを測る。色調は二次被熱により影響を受けているが、にぶい黄橙色～橙色を基調とする。やや粘りの弱い胎で、針状輝石を主体とする砂粒を中量、粒度の細かい赤褐色を呈する赤色粒を多量含む。101と類似した器形であるが、外面の口縁部は横方向のナデによる調整で、口唇部は丸みを帯びた形状を呈する。体部については縦方向のハケメで、剥離が著しい。内面の口縁部は横方向のナデで、接合痕が残存して観察される。体部は横方向のハケメであるが、摩滅と二次被熱による影響が著しい。103は床直及びカマド床直出土の土師器小甕で、口径15.6cmを測る。破片毎の色調が浸食等により影響を受けており、接合間で非連続な状況であるが、明赤褐色～にぶい橙色を基調とする。やや粘りのある胎で、小礫を中量、浮石等を含む砂粒が多量、海綿骨針及び赤色粒を微量含む。口縁部に最大径を持つが肩部付近もほぼ類似した径を有するタイプで、頸部の括れが甘く直立気味に外反する。口唇部は101と同様に端部を平滑な面と作出しているが、101が内傾なのにに対し、103は外傾の作り出しをしている。外面の調整は101と同様に口縁部が横方向のハケメで、横方向のナデにより再調整されているが、撫で消しが甘くハケメ痕が残存して観察される。また、頸部に一条の沈線を施し、体部との境界を明確にしている。口縁部直下が横方向のヘラミガキで、体部は縦方向及び斜め方向のヘラミガキによる調整である。内面は口縁部～体部にかけて横方向のハケメである。104はカマド床直及び堆積土とS I - 11カマド堆積土との遺構間接合の土師器甕で口径25.0cmを測る。S I - 11出土資料は破片のみで主たる破片はS I - 10出土資料に帰属する。器面が浸食等の影響を受けて摩滅しており、一部の資料は二次被熱を受けている。やや粘りに欠ける胎で、粒度のきめ細かい石英・長石・輝石・不透明鉱物が多量、海綿骨針が微量含まれ、赤色粒については茶褐色状の風化したものが含まれる。器形は基本的に101と類似した形状であるが、頸部下半は体部と明瞭に分けられるものではなく、明確な境界は存在しない。口

縁部は横方向に二段強く撫でることによって外反させており、口唇部は丸みを帯びた形状を呈する。外面の調整は、口縁部が横方向のナデで、体部の斜め方向のハケメが括れ部分に及んでいる。体部上半は横～斜め方向のハケメが施された後、縦方向のヘラミガキによる調整である。内面は摩滅が著しいがナデによる調整である。105はカマド床直出土の土師器甕底部で、底径10.0cmを測る。二次被熱により一部変色・変質が生じているが、外面は明赤褐色、内面は橙色を基調としている。やや粘りのある胎で、河川起源の小礫を多量、石英を主体とする砂粒を多量、海綿骨針を微量、赤色粒を少量含む。S1-04出土の95と類似した器形で、外面の底部付近は横方向のハケメとヘラケズリにより括れを作り出している。体部については斜め方向のヘラミガキによる調整である。内面は横方向のハケメによる調整である。底面は砂底で底面中央が若干窪んだ状態で、砂粒の付着状況が側縁に比べ少ない状況である。

S1-11 (国版30-106～国版32-122)

出土破片数601片、接合資料47資料中18点図示した。106は堆積土出土の土師器壺で、口径12.8cmを測る。器壁は浸食等による影響を受けており、内面は剥落が著しい状況で、色調についても影響が生じており灰白色を呈する。やや粘りのある胎で、風化した赤色粒が多量に含まれる。器形は丸みを帯び緩やかに外反しており、口唇部は先細りの形状を呈している。107はSK-1堆積土2層から出土した土師器壺で、口径13.5cm、器高5.8cm、底径5.6cm、器高指数42.9、底径指数41.4を測る。二次被熱により外面の剥落が著しく、色調についても影響が生じているが、橙色を基調としている。やや粘りのある胎で、砂礫・赤色粒を多量含み、浮石粒についても混入している。椀形の器形で、口縁部を若干強くつまみ返すように外反させている。口唇部は丸みを帯びた形状である。底部切離しは、右回転糸切で剥落により籠起し痕等の情報は観察できなかった。108はSK-1堆積土2層から出土した土師器壺で、口径12.5cm、器高6.6cm、底径5.6cm、器高指数52.8、底径指数44.8を測る。二次被熱による影響を受けており、内面側が剥落している。色調についても影響が生じており、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。粘りのある胎で、浮石質の小礫、石英等の砂粒を少量、赤色粒を微量含む。巻き上げ成形によるもので、粘土紐の巻き上げ痕が底部周辺と口縁部直下に観察される。調整はロクロナデによるもので、底部切離しについても右回転糸切によるものである。109は床直出土の非ロクロの黒色土器楕で、高台径6.2cmを測る。外面の口縁部直下及び内面が黒色処理によって黒色化しており、外面の体部～底部にかけてぶい黄橙色を呈する。やや粘りのある胎で、石英を主体とする砂粒を少量、赤色粒を微量含む。器形は直立気味の高台部を有する楕形で、高台部は内外面とも回転ナデにより調整されている。疊付部分は浅い凹線が一条入れられている。外面体部の調整は、横方向のヘラミガキおよび縦方向の籠によるナデで、口縁部直下であると考えられる黒色化した部分は特にヘラミガキが密であり、体部下半は指によるナデが顕著である。内面は横方向のヘラミガキによる調整である。110はカマド堆積土17層出土の土師器小甕で、口径(16.0)cm、器高14.6cm、底径8.2cmを測る。色調は外面がにぶい黄橙色、内面がにぶい橙色を呈するが、外面の体部～底部にかけて煤が付着しており、内面の口縁部～頸部には煮沸痕が観察される。粘りのある胎であるが、焼きが甘く、砂粒が多量混入している関係でザラザラした質感を有する。調整は外面体部が縦方向のヘラケズリで、局所的にハケメ状の痕跡が残存している箇所が存在する。口縁部は横方向のナデで、布等を使用していたのか平行する条線状の痕跡が観察される。内面の調整は口縁部が外面と同様のナデ、体部は横方向のハケメ及び板目の木口による籠によるナデである。111はカマド上面及び堆積土出土の土師器甕底部で、底径7.4

c mを測る。色調は外面が灰黄褐色、内面が褐灰色を呈するが、堆積土出土の資料は二次被熱により破断面も含めて煤等の付着が観察される。粘りのある胎で、粒度の細かい砂粒を多量、赤色粒を中量含む。外面の調整は縦方向のハケメで、内面の調整は横方向のハケメで、底面は無調整である。112はカマド堆積土2層・3層下・17層、SK-1堆積土2層、建物跡堆積土出土の土師器甕で、口径8.0 cmを測る。カマド17層出土の破片は外面の剥落が著しく、カマド3層下出土資料は内面の器壁が剥落している。外面の色調はにぶい黄橙色、内面の色調はにぶい橙色を呈する。やや粘りのある胎で、浮石質の小礫を微量、石英・輝石を主体とする砂粒を中量、海綿骨針を微量、赤色粒を少量含む。開き気味に立ち上がる器形で、外面部の調整はヘラケズリによるもので、底部付近を横方向に撫でている。内面は横方向のヘラケズリによる調整である。底面は一部ヘラケズリによる調整が行われているがほとんどが無調整であり、中央付近に植物起源の円環状の浅い刺突痕が観察される。113はカマド1層下出土の土師器甕で、口径19.8 cmを測る。色調は外面がにぶい橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。やや粘りに欠ける胎で、浮石を主体とする小礫を少量、砂粒を少量、赤色粒を中量含む。口縁部は粘土紐の接合箇所を支点として折り返したのみの器形で、体部は直胴気味の形状を呈する。調整は外面口縁部がナデで、粘土の接合箇所を箇により複数回撫でつけた箇所が局所的に観察される。体部は箇によるナデで、頭部を超えた箇所まで箇が及んでいる。内面の口縁部は横方向のナデで、体部は浅い斜め方向のハケメで一部はその上を箇により再調整している。114はカマド煙道堆積土及び建物跡堆積土出土の土師器小甕で口径16.2 cmを測る。外面部中半は二次被熱により変色・剥落が著しく、内面の口縁部には煮沸痕及び炭化物付着が観察される。二次被熱等の影響がない部分での外面の色調はにぶい橙色、内面は浅黄橙色を基調とする。やや粘りのある胎で、凝灰質の小礫を微量、針状輝石・石英・長石等の砂粒を中量、海綿骨針を微量、赤色粒を微量含む。また、かなり粒度の細かい炭化物についても胎土中に混入している。器形は、口縁部を横方向のナデにより緩やかに外反させている。口唇部は丸みを帯びた形状を呈する。外面の体部の調整は縦方向のハケメで、体部上半の一部が箇により撫でられている。内面の口縁部の調整は横方向のナデで、体部は横方向のハケメが施された後、ナデによりハケメを撫で消している。115はカマド構築前段階の堆積層である「あ層」とカマドの南側遺構外から出土した土師器小甕で、口径15.6 cmを測る。外面の色調はにぶい橙色を、内面の色調は煮沸痕が口縁部～頭部に観察されるが、灰白色を基調とする。粘りのある胎で、浮石質の小礫を微量、砂粒を少量、海綿骨針を微量、赤色粒を微量含む。体部上半に最大径を持つ器形で、口縁部は横方向の強いナデにより外反されており、頭部付近で浅い段状を呈する。体部との境界は横ナデにより境界を明確にしている。外面の口縁部付近の調整は体部の縦方向の箇による調整が行われた後に再度行われており、体部の調整は頭部には及んでいない。内面については口縁部が横方向のナデ、体部が横方向のハケメの後、ナデにより撫で消されている。116は床直出土の土師器甕で、口径(21.2) cmを測る。内外面とも剥落が生じており、特に内面の剥落が著しい。色調についても浸食による影響を受けており、外面は明赤褐色、内面はにぶい橙色を呈する。やや粘りのある胎で、石英を主体とする砂粒を多量、海綿骨針を微量、赤色粒を微量、浮石粒を少量含む。器形は肩部に膨らみを持ち、口縁部を「く」字状に外反させているが、外反が強く潰れた形状を呈する。口縁部の調整は横方向のナデで、体部は縦方向の箇によるナデで、頭部のナデが最終段階に行われており、体部の調整が口縁部に及んでいない。内面は剥落が著しいが口縁部～体部にかけてナデによる調整である。117はカマド煙出25層及び27層、建物跡堆積土ならびにカマド南側の遺構外出土の土師器小甕で、口径11.8 cmを測る。二次被熱により外面の口縁部付近が剥落しており、内面の口縁部～頭部は煮沸痕及び炭化物付着が観察され

る。色調は二次被熱等の影響を除く部分では外面がにぶい褐色、内面がにぶい橙色を呈する。やや粘りのある胎で、小礫を微量、石英・不透明鉱物を主体とする砂粒を多量、海綿骨針を微量、赤色粒を微量、粒度の細かい浮石を微量含む。器形は頸部相当位置付近が若干窪んでいるが直胴形を呈し、口縁部は外反していない。口唇部は平滑に外傾させており、浅い凹線が一条施されている。外面の調整は摩滅が著しいが体部付近が縱方向の籠によるナデで、内面の口縁部付近は横方向のナデ、体部が横方向のハケメが施されている。118は堆積土出土の土師器小甕で、口径15.8cmを測る。外面の色調はにぶい橙色、内面の色調は灰白色を呈する。内外面及び破断面に白色粘土の付着が、内面の口縁部付近に煮沸痕及び炭化物付着が観察される。粘りのある胎で、粒度のきめ細かい金雲母片を含む砂粒が少量、海綿骨針を微量、赤色粒を微量含む。器形は口縁部の括れが甘く、横方向のナデにより軽く外反されている。外面体部の調整は籠によるナデ及びヘラミガキによる調整で、内面はナデによる調整である。119は堆積土及びカマド南側遺構外出土の土師器甕で、口径18.8cmを測る。外面の頸部～体部上半にかけて煤が付着しており、器面の汚れが著しい。外面ともににぶい黄橙色を呈する。やや粘りに欠ける胎で、浮石質の小礫を少量、砂粒を少量、赤色粒を少量含み、113と類似した構成である。器形についても113に類似した形状を持ち、外面の口縁部には輪積み痕が顕著に残存しており、雑な印象を受ける。外面の調整は体部のみ籠による雑なナデにより調整されており、指頭圧痕が顕著である。内面の口縁部～体部上半は横方向のナデで、体部は斜め方向のハケメによる調整である。120はSK-1堆積土及び建物跡堆積土出土の土師器甕で、口径20.8cmを測る。一部二次被熱により剥落・変色が生じているが、外面ともににぶい橙色を基調としている。粘りの弱い胎でザラザラした質感を有する。凝灰質の小礫を微量、粒度の細かい砂粒を多量、浮石粒を中量、海綿骨針を微量、赤色粒を微量含む。器形は長胴甕で、頸部は浅い「く」字状に外反しており、口唇端部は平滑に作り出されており、端面には浅い凹線が一条施されている。外面の調整は口縁部が横方向のナデで、体部は倒位にした状態で、体部下半から口縁部付近まで籠により長いストロークで撫でられており、頸部を超えた部分まで粘土が寄せられている箇所が観察される。内面の口縁部の調整は横方向のナデで、体部上半は横方向の籠によるナデ、体部中半～体部下半については横方向のハケメである。121は堆積土出土の土師器甕で、口径22.0cmを測る。口縁部付近が二次被熱により変色し、外面とも体部に煤の付着が認められ、器面の摩滅が著しい状態であるが、外面の色調はにぶい黄橙色、内面の色調は灰白色を呈する。やや粘りのあるバサバサした質感を有する胎で、凝灰質の小礫・石英や浮石粒を主体とする砂粒、風化した赤色粒を多量含む。肉厚な器壁を持つ資料で、口縁部はやや頸部が長く、口縁端部を軽く外反させている。口唇端面は平滑に作り出している部分と丸みを帯びた箇所があり、やや作りが雑である。外面の口縁部の調整は横方向のナデで、体部の調整は縱方向のヘラケグリで、頸部を超えて粘土が寄せられている箇所が観察される。内面の口縁部の調整は外面と同様横方向のナデで、体部の調整は横方向のハケメ状の痕跡を持つ籠による浅いナデで、ほとんどが撫で消されている。122は堆積土出土の土師器小甕で、口径18.0cm、器高16.0cm、底径7.8cmを測る。底部付近が褐灰色に変色しており、体部下半が二次被熱により変色・剥落が生じており、さらに口縁部の一部も二次被熱により変色している箇所がある。また、内面の口縁部～体部上半にかけて煮沸痕があり煤及び炭化物の付着が観察される。色調は前述の影響が各破片に生じているため、部分的な要素を含んでいるが、外面の色調はにぶい黄橙色、内面の色調は橙色を呈する。やや粘りのある胎で、河川起源の摩耗した小礫を多量、石英等の砂粒を多量、粒度の細かい浮石粒を少量、赤色粒を多量含む。口縁部に最大径を持つタイプで、口縁部は横方向のナデにより緩やかに外反している。外面体部の調整は縱方向及び斜め方向のヘラケ

ズリで、頸部直下まで一部及んでいる箇所がある。内面の口縁部は横方向のナデで、体部は横方向のハケメによる調整である。底面は網状脈の木葉痕で、部分的に箒により撫でられている。123は堆積土出土の土師器甕で、口径24.8cmを測る。外面の口縁部～体部上半にかけて煤が付着しており、体部付近についても付着物が全体的に認められ、色調には影響があるが、影響のない部分と考慮される部分については内外面とも褐色を呈する。焼きが甘く、断面が黒褐色を呈している。やや粘りのある胎で、浮石質の小礫を微量、石英等の砂粒を少量、赤色粒を中量含む。口縁部に最大径を持つ器形で、頸部が緩やかに長く、口縁部は緩やかに外反している。口唇部は平滑に面取りされており、端面に凹線を1条入れている。また、体部との境界部分に浅い平行沈線を2条入れている。調整は口縁部～体部にかけて横～斜め方向のハケメが施された後、口縁部付近は横方向のヘラミガキ、体部は縦方向ヘラミガキが施された後横方向のヘラミガキがなされ、さらに斜め方向のヘラミガキが施されている。内面の調整は外面と同様横方向のハケメが施された後、口縁部は横方向のヘラミガキ、体部は縦方向のヘラミガキが施される。

SK-34

図示はしていないが土師器碎片6点が出土した。内訳は土師器壺口縁部1点、土師器甕口縁部2点、土師器甕部片3点である。隣接するSI-1-1等にも関連づけができるが、資料の接合関係は認められなかった。

遺構外出土土器（図版32-124・125）

遺構外出土資料については繩文土器の比率が多く、古代の土器については28点のみの出土で図化可能な資料は2点のみであった。124は沢包含層出土の土師器壺で、口径(13.6)cmを測る。色調は浅黄橙色～黄橙色を呈する。良く水肥されたきめ細かい胎で、長石・赤色粒等が若干混入するのみである。体部に浅い稜段が認められる。125はX116、Y70付近出土の土師器壺底部片で、底径5.6cmを測る。粉っぽい胎で、粒径の大きな(Φ8mm大)赤色粒や石英主体とする砂粒を中量含む。底部切離しは右回転糸切である。

2. 鉄製品・鉄滓（図版33-126～133）

確認調査の資料を含め8点図示した。126はSI-02堆積土下層出土の鉄製品で、11×5.5×3.5mmを測り、重量は1.3gを量る。棒状の形状を呈しているが各端部は鋸により富化しており、詳細については不明である。127はSI-1-1堆積土出土の鉄製品で、39×4×3mmを測り、3.5gを量る。刀子の基部にあたり、柄にあたる木質部がその周辺に残存している。128はSK-17堆積土上層出土の鉄滓で、23×22×14mmを測り、5.7gを量る。碎片化した鍛治滓で、やや磁着する。129はSC-02堆積土上層出土の鉄製品で、33×4×3.5mmを測り、2.9gを量る。刀子の基部にあたると思われるが、本遺構は繩文時代中期の埋設土器遺構の上面にあたり、直接本遺構に帰属する製品ではない。130は確認調査トレンチ6から出土した鉄製品で、11×5.5×3.5mmを測り、1.3gを量る。129と類似した断面形を有するが、残存率が低いため詳細については不明である。131はトレンチ6から出土した鉄製品で、39×3×3mmを測り、2.6gを量る。鉄釘で、基部は折鉗状に延ばしており、先端部は潰れ曲がっている。132はトレンチ18出土の鉄製品で、30×4×4mmを測り、1.3gを量る。断面形が棒状を呈し、先端部を尖らせた形状を呈しているが詳細については不明

である。133は表面採集品の鉄製品で、 $4.0 \times 5 \times 4$ mmを測り、4.7 gを量る。メタル度及び磁着度が高く、本製品については比較的新しい製品である。

3. 土製品（図版33-134～141）

確認調査の資料を含め8点図示した。134～139はSI-02出土資料である。134は床直出土の完形品の土製紡錘車で、 $7.7 \times 7.5 \times 1.8$ cmを測る。断面形は台形状を呈しており、中央に孔径8 mmの孔が一方向から穿たれている。胎土には浮石粒や砂礫を多く含むものが使用されており、堅く焼きしまっている。各面の調整はヘラケズリによる調整である。側縁部～片面側に黒斑が観察される。135は堆積土出土の土製紡錘車で、欠損資料であるため復元値であるが、直径(6.0) cm、厚さ2.6 cmを測る。孔径については直径(1.3) cm前後であったものと推定される。断面形はほぼ円柱状を呈していたものと考えられ、胎土については134に比べやや粘りのあるものが使用されており、金雲母片が混入している。各面は基本的にヘラケズリによる調整であるが、側縁の上下でヘラケズリとヘラミガキが分けられて調整されている。136は堆積土出土の焼成粘土塊で、 $3.3 \times 3.5 \times 1.9$ cmを測る。胎土に金雲母片を微量含み、形は球状に作られたものが半分欠損したもので、棒状の工具によるナデが数カ所で観察される。137は堆積土出土の焼成粘土塊で、 $3.2 \times 2.8 \times 2.3$ cmを測る。金雲母片を微量、赤色粒を中量含み、形は指で撫でつけたような粘土の塊をそのまま焼成したものである。138は堆積土出土の焼成粘土塊で、 $2.1 \times 2.7 \times 1.5$ cmを測る。胎土に金雲母片が極微量含まれ、側縁に棒状工具で刺突したような痕跡が残存している。139は堆積土出土の焼成粘土塊で、 $3.1 \times 2.1 \times 1.5$ cmを測る。138と同質の胎で、焼成状況も類似した状況である。140はSI-11堆積土17層下から出土した土製支脚で、上部径8.8 cm、器高13.4 cm、底径10.6 cmを測る。輪積みによる成形で、器面は内外面とも指頭圧痕が残存して観察される。製作時の底面にあたる上面には砂底土器と同様に砂粒が付着しており、指や工具により側縁部をいびつに押しつけており、中央には孔が空いていない。使用時の底部にあたる部分はアーチ状の切り込みが二個一対で作られているがやや扁平がかっている。141は確認調査トレンチ14から出土した羽口の破片で、 $3.6 \times 3.3 \times 2.7$ cmを測る。具体的な形状については不明である。熔結した鉄分が付着しており、磁着度がある。

4. 石製品（図版33-142）

SI-10堆積土出土の砥石1点のみである。 $1.69 \times 5.7 \times 4.6$ mmを測り、586 gを量る。柱状を呈し、各面とも使用頻度は高い状態であり、長さ21 mm、幅4 mm、深さ1 mmほどの擦り切り痕が観察される面もある。また、欠損以外の敲打痕は一面のみに確認できる。石質は細粒凝灰岩である。

(木 村)

第2表 江渡遺跡竪穴建物跡観察表

回収番号	遺構番号	位 置	東 西	面 横(cm)	面積(m ²)	平面形	断面形	柱穴	ピット	土坑	壁溝	その他	堆積土層	埋土	火山灰	備考
回収1・2	SK-01	X103.8Y99.8	-	365 320 30	9.996	長方形	d	-	g	-	-	-	11	8	To-a,Tm	
回収3～6	SK-02	X116.5Y103	SD-01	575 485 32	(19.116)	長方形	n	長方形	b-5	-	a	-	24	9	To-a,B-Tm	
回収7・8	SK-03	X113.5Y98	-	585 510 30	(16.452)	不整円形	d	亀甲状	g	1	-	-	9	6	(B-Tm)	右側が長幅 106cm, 短幅 84cm. 深さ 18cm. 上部収
回収9・10	SK-04	X128.9Y7.1	-	510 480 50	17.796	楕円長方形	c	-	16	-	b	-	13	8	To-a	
回収16	SK-05	X119Y94	-	280 275 25	5.604	楕円形	d	-	-	-	-	-	5	5	-	
回収16	SK-06	X129Y90	-	295 240 17	5.436	楕円長方形	d	-	-	-	-	-	1	1	-	
回収16	SK-07	X135Y98	-	320 260 15	5.892	方形	d	-	-	-	-	-	1	1	-	
回収11・12	SK-10	X143.4Y47.8	SP-20	420 390 45	13.788	圓角方形	a	-	8	-	-	2	11	7	To-a,B-Tm	SX-1 長幅 160cm. 短幅 55cm, SX-2 長幅 85cm. 短幅 62cm
回収13～15	SK-11	X165.5Y51	-	480 465 45	16.104	方形	a	-	14	1	a	-	10	5	B-Tm	

第3表 江渡遺跡土坑観察表

回収番号	遺構番号	位 置	東 西	面 横(cm)			平面形	断面形	特記事項	備考		
				長幅	短幅	深さ						
回収17	SK-01	X99Y100.6	-	145	87	35	f	a	-	織文土器出土		
回収17	SK-02	X106Y98	-	122	70	25	f	d	-			
回収17	SK-03	X106Y96	-	175	165	40	e	a	-	織文土器・赤生土器出土		
回収17	SK-04	X107Y94.5	-	180	150	57	e	d	-	織文土器・赤生土器出土		
回収17	SK-05	X108Y95.6	-	192	165	47	e	e	-			
回収17	SK-07	X122.4Y89.6	-	155	130	27	e	e	-			
回収17	SK-08	X124Y88.5	-	150	130	22	f	d	-			
回収17	SK-09	X121.6Y97.4	-	153	128	22	c	d	-			
回収17	SK-10	X134.4Y95.6	-	115	79	12	e	d	-			
回収17	SK-11	X133Y91	-	215	175	13	e	d	-			
回収18	SK-12	X134Y101.2	-	185	68	30	g	a	-			
回収18	SK-13	X132.8Y102.5	-	155	70	10	a	a	-			
回収18	SK-14	X124Y74	-	90	80	15	e	a	-			
回収18	SK-15	X123Y76.6	-	90	60	17	e	a	-			
回収18	SK-16	X124Y69.8	-	110	95	25	e	a	-			
回収18	SK-17	X115.8Y69.6	-	152	85	28	f	d	-	鉄滓出土		
回収18	SK-18	X123Y62	-	165	80	45	e	d	-			
回収18	SK-19	X131Y43.4	-	160	104	25	a	a	-			
回収18	SK-20	X133.4Y47	-	155	120	45	e	i	-			
回収18	SK-21	X140Y45.2	-	153	110	32	e	a	-			
回収18	SK-22	X147Y43.6	-	67	47	17	f	i	-			
回収18	SK-23	X140.2Y63	-	92	82	15	e	a	-			
回収18	SK-24	X151Y40.4	-	208	110	20	a	i	-			
回収18	SK-25	X148Y74.8	-	305	37	88	a	j	-			
回収18	SK-26	X146Y41	-	85	80	20	h	a	-			
回収19	SK-27	X141Y74.3	-	132	65	20	a	a	-			
回収19	SK-28	X143Y39.6	-	120	62	26	a	a	-			
回収19	SK-29	X164Y54	-	92	65	20	f	a	-			
回収19	SK-30	X165.4Y56	-	112	90	25	e	e	-			
回収19	SK-31	X131.6Y59.8	-	140	70	22	e	a	-			
回収19	SK-32	X144.8Y67	-	108	66	28	e	d	-			
回収19	SK-33	X164.4Y47.2	-	87	72	18	e	j	-			
回収14	SK-34	X162Y51	SP-25・26	78	66	44	e	a	B-Tm	SP-25・SP-26・SK-34. 柱穴状の堆積、土器底出土		
回収19	SK-35	X164Y74.6	-	73	70	20	h	d	-			
回収19	SK-36	X128Y78	-	228	125	48	e	d	-			
回収19	SK-37	X120.4Y73	-	205	78	52	a	i	-			

第4表 江渡遺跡ピット観察表

回収番号	遺構番号	位 国	重 量	規 模 (cm)			平面部	断面部	備 考
				長軸	短軸	深さ			
回版 19	SP-01	X19.5Y101.2	—	37	32	12	h	a	
回版 16	SP-02	X102.4Y93.4	SC-01	24	19	30	c	a	SC-01+SP-02
回版 19	SP-03	X107.4Y96.4	—	40	27	20	f	a	
回版 19	SP-04	X117Y91.6	—	50	35	10	e	d	
回版 19	SP-05	X119.4Y90.4	—	63	52	20	e	e	
回版 19	SP-06	X121Y91.8	—	55	54	13	h	d	
回版 19	SP-07	X123Y91	—	50	50	15	h	d	
回版 19	SP-08	X123Y99.9	—	75	50	35	e	e	
回版 19	SP-09	X121.2Y99.6	—	52	45	25	e	a	
回版 20	SP-10	X123Y93.2	—	65	55	27	e	j	
回版 20	SP-11	X124.5Y95.5	—	26	25	27	h	a	
回版 20	SP-12	X133Y100.2	—	85	56	23	f	j	
回版 20	SP-13	X124.4Y90.2	—	66	45	15	f	d	
回版 20	SP-14	X125Y89.8	—	62	55	18	e	a	
回版 20	SP-15	X130.4Y101.5	—	76	50	23	e	a	
回版 20	SP-16	X124.5Y95.5	—	53	45	15	h	a	
回版 20	SP-17	X125Y101.4	—	65	53	30	e	i	
回版 20	SP-18	X123Y74.8	—	50	45	12	e	h	
回版 20	SP-19	X122.6Y53	—	63	43	18	e	j	
回版 20	SP-20	X144Y45.3	S1-10	(40)	(36)	12	e	a	S1-10+SP-20
回版 20	SP-21	X143Y42.5	—	40	40	16	h	h	
回版 20	SP-22	X165.2Y48.5	—	60	50	30	e	a	
回版 20	SP-23	X164Y45.8	—	—	35	14	e	d	
回版 20	SP-24	X162Y39.8	—	54	40	12	e	c	
回版 20	SP-25	X162.2Y51.6	SK-34 SP-26	(60)	(45)	24	f	a	SP-25+SP-26+SK-34
回版 20	SP-26	X162.2Y51.6	SK-34 SP-25	(33)	(30)	28	e	h	SP-25+SP-26+SK-34

第5表 江渡遺跡埋設土器遺構観察表

回収番号	遺構番号	位 国	重 量	規 模 (cm)			平面部	断面部	備 考
				長軸	短軸	深さ			
回版 16	SC-01	X102.5Y93.5	SP-02	50	40	21	e	土器・一箇 SC-03 狹脚土器と接合、大木 10 式 SC-01+SP-02	
回版 16	SC-02	X151Y53	—	45	41	(16)	h	入れ子状、葵花式	

第6表 江渡遺跡焼土状遺構・その他の遺構観察表

回収番号	遺構番号	位 国	重 量	規 模 (cm)			平面部	断面部	備 考
				長軸	短軸	深さ			
回版 20	SN-01	X181.2Y69	—	255	205	18	b	d	重壁に側土範囲 45×30cm、縄文土器出土
回版 20	SN-02	X155.5Y59	—	45	35	10	f	i	側土面
第7回	SX-01	X99.9Y93	—	561	(206)	10	—	—	縄文土器出土、15年度調査区外へ延びている
回版 21	SX-02	X103Y95	—	290	227	38	e	i	曲壁側に不整長方形内形 174×110×16cm、縄文土器出土
回版 21	SX-03	X128Y84	—	690	250	65	e	h	
回版 21	SX-04	X135Y75	—	(293)	(285)	36	e	a	西壁側から不整長方形内形 170×100×30cm

発掘番号	番号	遺構番号	遺構名	層	所	断面	10F	露頂	底頂	底	柱	壁	縦	横	厚	測定番号	測定部位	測定範囲	測定方法	測定番号		
0003.1	110	0.0.1.1	石	17層	P-17	17層	17層	17層	17層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W04	7.5W04A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2
0003.1	111	0.0.1.1	石	17層	P-17	17層	17層	17層	17層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W04	7.5W04A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2
0003.1	112	0.0.1.1	石	17層	P-17	17層	17層	17層	17層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W04	7.5W04A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2
0003.1	113	0.0.1.1	石	17層	P-17	17層	17層	17層	17層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W04	7.5W04A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2
0003.1	114	0.0.1.1	石	17層	P-17	17層	17層	17層	17層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W04	7.5W04A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2
0003.1	115	0.0.1.1	石	17層	P-17	17層	17層	17層	17層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W04	7.5W04A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2
0003.1	116	0.0.1.1	石	17層	P-17	17層	17層	17層	17層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W04	7.5W04A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2
0003.1	117	0.0.1.1	石	17層	P-17	17層	17層	17層	17層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W04	7.5W04A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2
0003.1	118	0.0.1.1	石	17層	P-18	18層	18層	18層	18層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W04	7.5W04A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2
0003.1	119	0.0.1.1	石	17層	P-19	19層	19層	19層	19層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W03	7.5W03A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2
0003.2	120	0.0.1.1	石	18層	P-18	18層	18層	18層	18層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W04	7.5W04A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2
0003.2	121	0.0.1.1	石	18層	P-18	18層	18層	18層	18層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W04	7.5W04A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2
0003.2	122	0.0.1.1	石	18層	P-18	18層	18層	18層	18層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W04	7.5W04A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2
0003.2	123	0.0.1.1	石	18層	P-18	18層	18層	18層	18層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W04	7.5W04A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2
0003.2	124	0.0.1.1	石	18層	P-18	18層	18層	18層	18層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W04	7.5W04A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2
0003.2	125	0.0.1.1	石	18層	P-18	18層	18層	18層	18層	小窓	(16.0)	14.6	8.2	107W04	7.5W04A	6.9m	少	0.0.1.2	121.0	ナガヘラタケノハ、ハガキ	ナガヘラタケノハ、ハガキ	0.0.1.2

第8表 江渡遺跡出土石器・石製品観察表

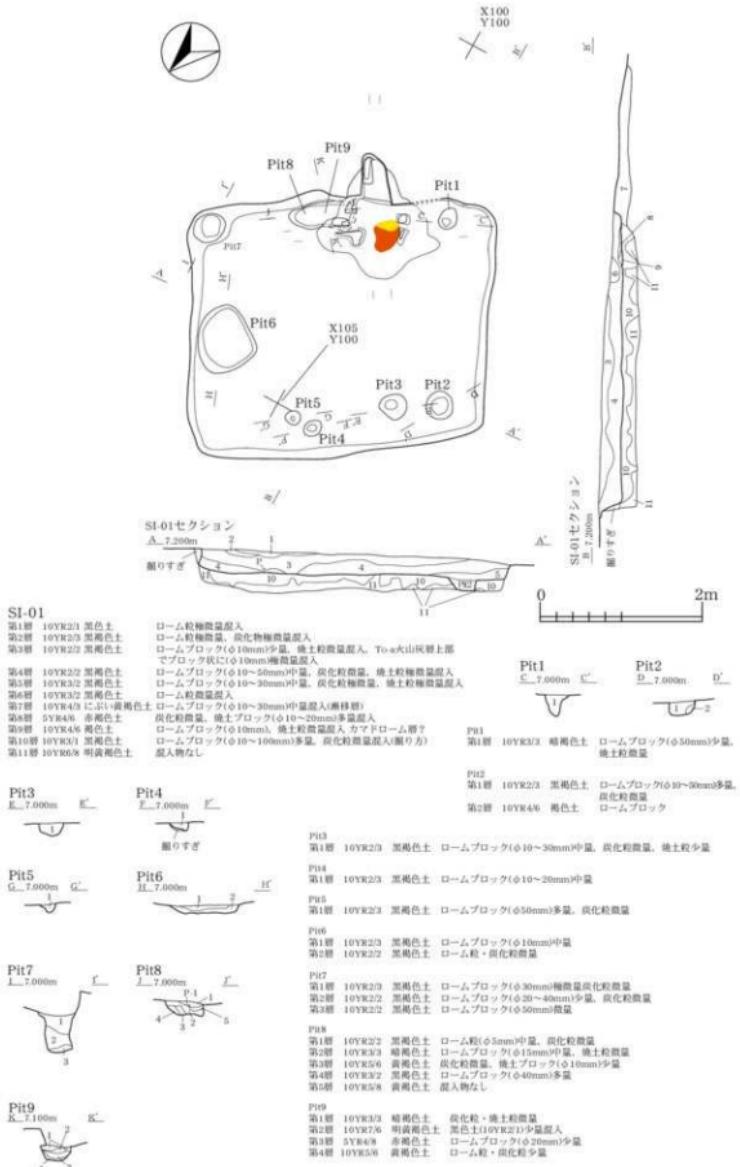
回収番号	番号	遺構名	層位	種別	計測値					石質	備考	整理番号
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)				
回収25	42	SI-01	3層S-X	石器	28	17	5	1.4	頁岩			O-2
回収25	43	SI-01	4層S-Z	手定形	34	30	8	3.8	頁岩			O-3
回収25	44	トレーナー18 建物群(複数)	堆積土上層 S-X	磨製石斧	121	47	22	180	燧灰岩			K-4
回収33	142	SI-10	堆積土S-X	礫石	169	57	46	386	細粒燧灰岩			K-3

第9表 江渡遺跡出土土製品観察表

回収番号	番号	遺構名	層位	岩種	法量(cm)			色調		焼成	礫	砂	骨	赤土	残存率	調査		備考	整理番号
					長さ (上辺長)	幅 (高さ)	厚さ (底径)	外面	内面							外面	内面		
回収3 3	134	SI-02	床面 P-14	粘土車	7.7	7.5	1.8	10YR8/6	10YR8/3	良	微	多	微	少	-	12/12		側面ケズリ・一部黒度、礫離有、孔径0.8mm	S-22
回収3 3	135	SI-02	堆積土 P-X	粘土車	(6.0)	-	2.6	5YR6/6	10YR4/1	良	微	-	微	少	6/12		側面ケズリ	S-24	
回収3 3	136	SI-02	堆積土 P-X	他成粘土塊	3.3	3.5	1.9	7.5YR6/6		良	微	多	-	微	間				S-25
回収3 3	137	SI-02	P-X	他成粘土塊	3.2	2.8	2.3	7.5YR8/6		差	-	少	-	中	間				S-26
回収3 3	138	SI-02	P-X	他成粘土塊	2.1	2.7	1.5	10YR8/3		差	-	少	-	少	粗			ビッチ微量付着	S-27
回収3 3	139	SI-02	堆積土 P-X	他成粘土塊	3.1	2.1	1.5	10YR8/3		差	-	少	-	少	微				S-28
回収3 3	140	カマド F-P-6	17層	土製火鉢	8.8	13.4	10.6	10YR8/4	5YR6/6	良	中	多	-	中	微	11/12	ユビナゲ /指屈板	ユビナゲ /輪積板、工具類 ビッチ微量付着	S-29
回収3 3	141	トレーナー14	堆積土上層	羽口	3.6	3.3	2.7	2.5YR6/3	5YR5/6	差	微	多	-	-	-				S-30

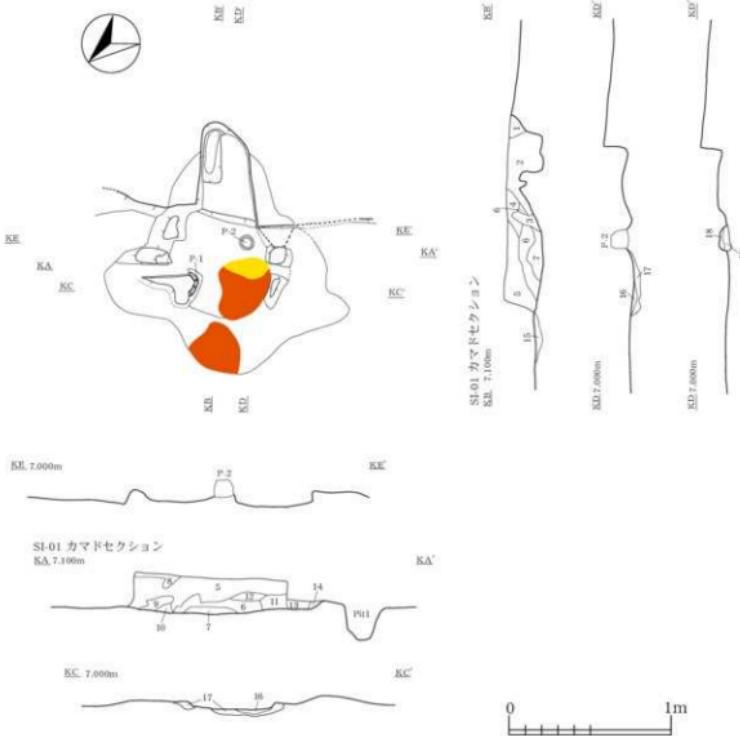
第10表 江渡遺跡出土鉄製品観察表

回収番号	番号	遺構名	層位	種別	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	沿著度	メタル度	調査		備考	整理番号
									外面	内面		
回収33	126	SI-02	堆積土下層	鉄製品	32×4×4	2.9	5	△				S-1
回収33	127	SI-11	堆積土	刀子	39×4×3	3.5	3	△				S-2
回収33	128	SK-17	堆積土上層	鉄片	23×22×14	5.7	1	△				S-3
回収33	129	SC-02	堆積土上層	刀子	33×4×3.5	2.9	4	△				S-4
回収33	130	トレーナー6	堆積土上層	鉄製品	11×5.5×3.5	1.3	4	△				S-5
回収33	131	トレーナー6	堆積土	刀	39×3×3	2.6	4	○				S-6
回収33	132	トレーナー18	包含層	鉄製品	30×4×4	1.3	4	△				S-7
回収33	133		表層	鉄製品	40×5×4	4.7	6	○				S-8



図版 1 SI-01-1

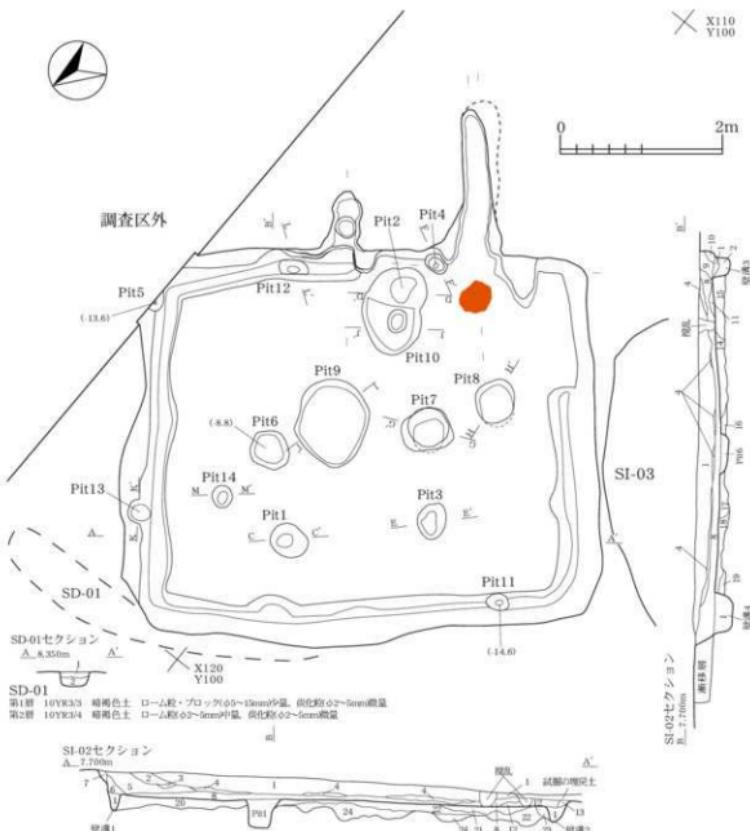
SI-01 カマド



SI-01 カマド

- 第1層 10YK3/2 黒褐色土 ローム粒微量
- 第2層 10YK3/3 黒褐色土 ローム粒少量
- 第3層 10YK3/4 黒褐色土 ローム粒・砂粒(φ20mm)・粘土粒微量
- 第4層 10YR6/6 黒褐色土 砂化粘土質、カマド根微量
- 第5層 10YR2/2 黒褐色土 ローム・プロック(φ10mm)少量、炭化粘土・施土粒微量(建物堆積土4層)
- 第6層 10YK5/5 黒褐色土 施土少量混入、カマド根微量
- 第7層 10YR4/6 黑褐色土 ローム・プロック(φ10~25mm)多量
- 第8層 10YR2/1 黑褐色土 粘土・砂粒・砂・砂化粘土質(?)・施土・プロック(φ20mm)微量
- 第9層 10YR3/3 黑褐色土 砂化粘土質(?)・施土・プロック(φ20mm)微量
- 第10層 5YR5/6 黑褐色土 ローム粒・ローム粒少量、黒色土根による影響・微量混入(抽?)
- 第11層 5YR4/6 黑褐色土 施土粒・ローム粒少量
- 第12層 10YK7/6 明黒褐色土 施土・プロック多量混入(被熱受けた?)
- 第13層 10YR5/5 黑褐色土 ローム粒少量
- 第14層 10YR5/6 黑褐色土 ローム粒・施土粒微量
- 第15層 5YR4/6 黑褐色土 灰面層
- 第16層 5YR3/4 鮮赤褐色土 ローム・プロック(φ20mm)微量
- 第17層 5YR3/4 鮮赤褐色土 炭化粘・施土粒微量
- 第18層 5YR4/6 黑褐色土 炭化粘・施土粒微量
- 第19層 10YR3/4 鮮赤褐色土 ローム・プロック(φ10mm)極微量

図版 2 SI-01-2



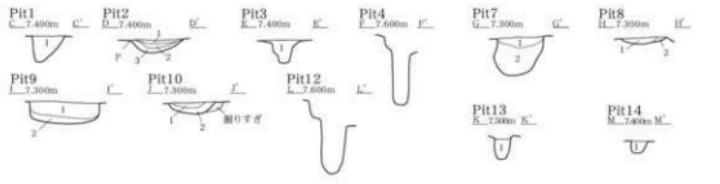
SI-02

- 第1剖 10YR2/3 暗褐色土 坡面斜坡<2~3mm/少量。壤土粒φ2~5mm/多量。
 第2剖 10YR4/4 暗褐色土 坡面斜坡<2~3mm/少量。壤土粒φ1~2mm/少量。
 第3剖 10YR4/4 暗褐色土 B-Ten灰山灰(中量)少量。
 第4剖 10YR2/3 暗褐色土 坡面斜坡<2~3mm/少量。
 第5剖 10YR2/3 暗褐色土 坡面斜坡<2~3mm/少量。
 第6剖 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒φ2~3mm/少量。风化粒φ2~5mm/少量。
 第7剖 10YR4/4 暗褐色土 ローム粒φ2~3mm/少量。风化粒φ2~5mm/少量。
 第8剖 10YR4/4 暗褐色土 ローム粒φ2~3mm/少量。风化粒φ2~5mm/少量。
 第9剖 10YR3/3 暗褐色土 风化粒φ2~3mm/少量。壤土粒φ2~3mm/少量。
 第10剖 10YR3/3 暗褐色土 风化粒φ2~3mm/少量。壤土粒φ2~3mm/少量。
 第11剖 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒φ2~3mm/少量。壤土粒φ2~3mm/少量。
 第12剖 10YR4/4 暗褐色土 ローム粒φ2~3mm/少量。壤土粒φ2~3mm/少量。
 第13剖 10YR4/4 暗褐色土 ローム粒φ2~3mm/少量。壤土粒φ2~3mm/少量。

根深

- 発達 10YR2/3 暗褐色土 ローム帶後に進入。壤土粒(断土粒)に根群に混入/中量
 発達2 10YR4/4 暗褐色土 ローム粒・ブロッキ(φ2~5mm)/少量。風化粒・後化物(φ5~15mm)/少量
 発達3 10YR3/3 暗褐色土 ローム粒・ブロッキ(φ5~10mm)/少量。風化粒(φ2~3mm)/少量
 発達4 10YR3/4 暗褐色土 風化粒(φ2~5mm)/少量。壤土粒(φ2~3mm)/少量

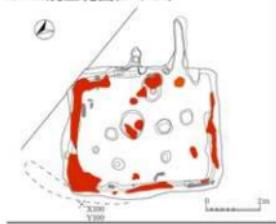
図版3 SI-02-1



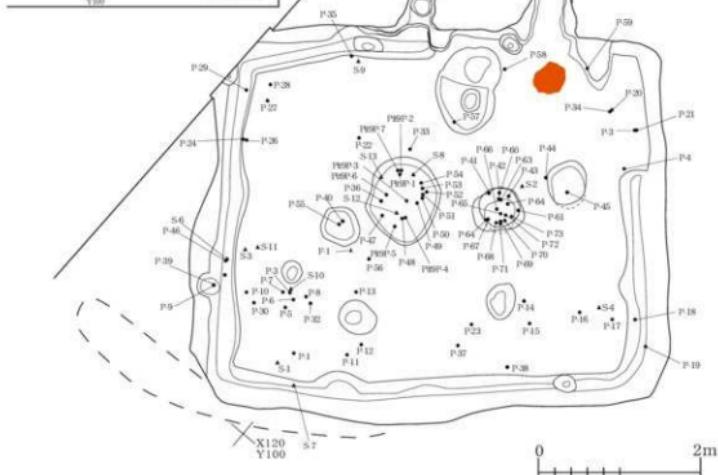
- Pit1
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(Φ5~15mm)・炭化物Φ5~9mm少量
燒土粒Φ5~9mm微量
- Pit2
第1層 10YR3/3 委褐色土 炭化物Φ5~9mm少量、燒土粒・ブロック(Φ5~30mm)中量
第2層 10YR3/4 委褐色土 炭化物Φ5~9mm微量、燒土粒・ブロック(Φ10~30mm)多量
第3層 10YR3/4 委褐色土 炭化物Φ5~9mm微量、ローム帶状に多量混入
- Pit3
第1層 10YR2/2 黑褐色土 ローム粒・ロームブロック(Φ5~15mm)・炭化物Φ5~9mm少量
- Pit4
第1層 10YR3/3 黑褐色土 炭化物Φ5~9mm少量、燒土粒・ブロック(Φ5~20mm)中量
第2層 10YR3/4 黑褐色土 炭化物Φ5~9mm少量、燒土粒・ブロック(Φ10~20mm)中量
- Pit7
第1層 10YR3/3 黑褐色土 烧土粒・ブロック(Φ5~30mm)多量、炭化物・腐化物
第2層 10YR3/5 黄褐色土 烧化物・腐化物Φ5~15mm少量、燒土粒・ブロック(Φ5~20mm)中量
第3層 10YR3/4 黄褐色土 烧化物・腐化物(Φ5~20mm)多量、燒土粒・ブロック(Φ5~20mm)中量
- Pit8
第1層 10YR3/3 黑褐色土 烧土粒・ブロック(Φ5~30mm)多量、炭化物・腐化物
第2層 10YR3/5 黄褐色土 烧化物・腐化物Φ5~15mm少量、燒土粒・ブロック(Φ5~20mm)中量
第3層 10YR3/4 黄褐色土 烧化物・腐化物(Φ5~20mm)多量、燒土粒・ブロック(Φ5~20mm)中量
- Pit9
第1層 10YR3/3 黑褐色土 ローム粒・ロームブロック(Φ5~15mm)・炭化物Φ5~9mm少量
燒土粒Φ5~9mm微量
- Pit10
第1層 10YR3/3 黑褐色土 ローム粒・ロームブロック(Φ5~15mm)・炭化物Φ5~9mm少量
燒土粒Φ5~9mm微量
- Pit12
第1層 10YR3/3 黑褐色土 ローム粒・ロームブロック(Φ5~15mm)・炭化物Φ5~9mm少量
燒土粒Φ5~9mm微量
- Pit13
第1層 10YR3/3 黑褐色土 ローム粒・ロームブロック(Φ5~15mm)・炭化物Φ5~9mm少量
燒土粒Φ5~9mm微量
- Pit14
第1層 10YR3/3 黑褐色土 ローム粒・ロームブロック(Φ5~15mm)・炭化物Φ5~9mm少量
燒土粒Φ5~9mm微量

0 2m

SI-02焼土範囲(S=1/180)

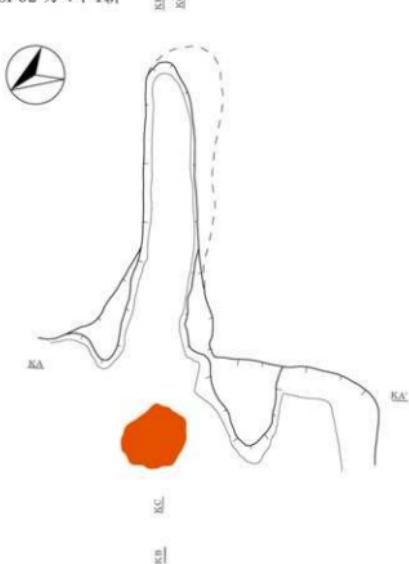


SI-02内遺物出土状況



図版4 SI-02-2

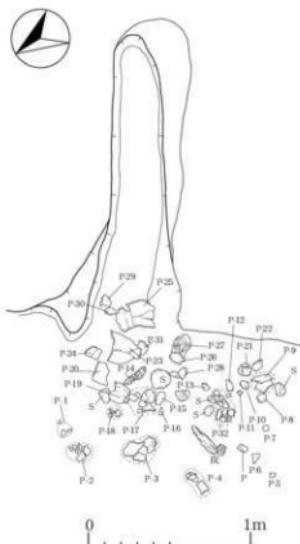
SI-02 カマド1新



SI-02 カマド1旧セクション
KA KA'



SI-02 カマド1 新遺物出土状況



SI-02 カマド1新

第1層	1.5YR5/6	明褐色土。炭化粒(φ3~9mm)多量。燒土ブロック多量。
第2層	10YR5/4	にじみ黄褐色土。炭化粒(φ3~9mm)少量。燒土粒(φ2~20mm)中量。
第3層	10YR4/6	褐色土。炭化粒(φ3~5mm)。燒土粒(φ2~5mm)微量。
第4層	10YR3/3	褐色土。ローム粒(φ2~3mm)微量。
第5層	7.5YR5/6	明褐色土。燒土粒(φ3~8mm)微量。
第6層	7.5YR5/6	粘土土。炭化粒(φ2~3mm)微量。燒土粒(φ3~8mm)微量。
第7層	10YR4/4	褐色土。ローム粒(φ2~3mm)微量。燒土粒(φ3~9mm)微量。
第8層	10YR3/6	褐色土。ローム粒(φ3~9mm)。炭化粒(φ2~3mm)。燒土粒(φ3~7mm)微量。
第9層	10YR4/4	褐色土。ローム粒(φ3~9mm)少量。炭化粒(φ2~3mm)微量。
第10層	10YR2/0	黒褐色土。ローム粒(φ3~9mm)少量。炭化粒(φ2~3mm)微量。

SI-02 カマド1旧煙道

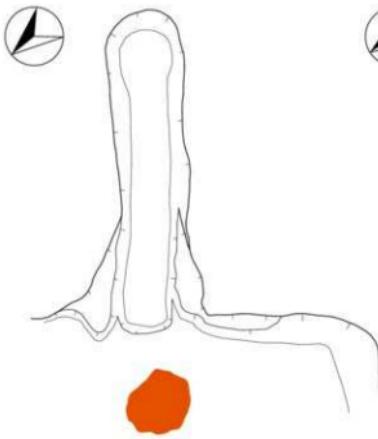
第1層	10YR3/4	ローム粒(φ3~9mm)。炭化粒(φ2~5mm)微量。
第2層	10YR3/3	褐色土。ローム粒(φ3~9mm)微量。炭化粒(φ2~3mm)微量。
第3層	10YR4/4	褐色土。ローム粒(φ3~9mm)微量。炭化粒(φ2~5mm)。燒土粒。ブロック(φ3~15mm)微量。

SI-02 カマド1旧火床面

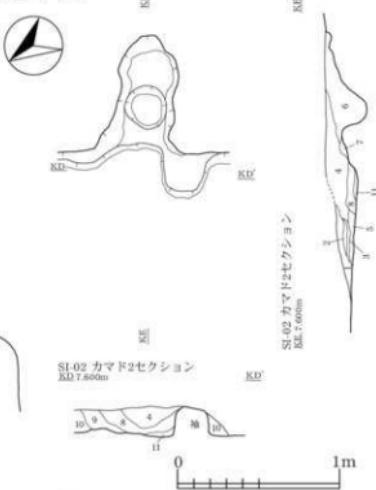
第A層	5YR5/8	明赤褐色土。燒土粒。ローム粒(φ2~5mm)微量。
第B層	10YR4/6	褐色土。ローム粒(φ2~9mm)多量。

図版5 SI-02-3

SI-02 カマド1旧



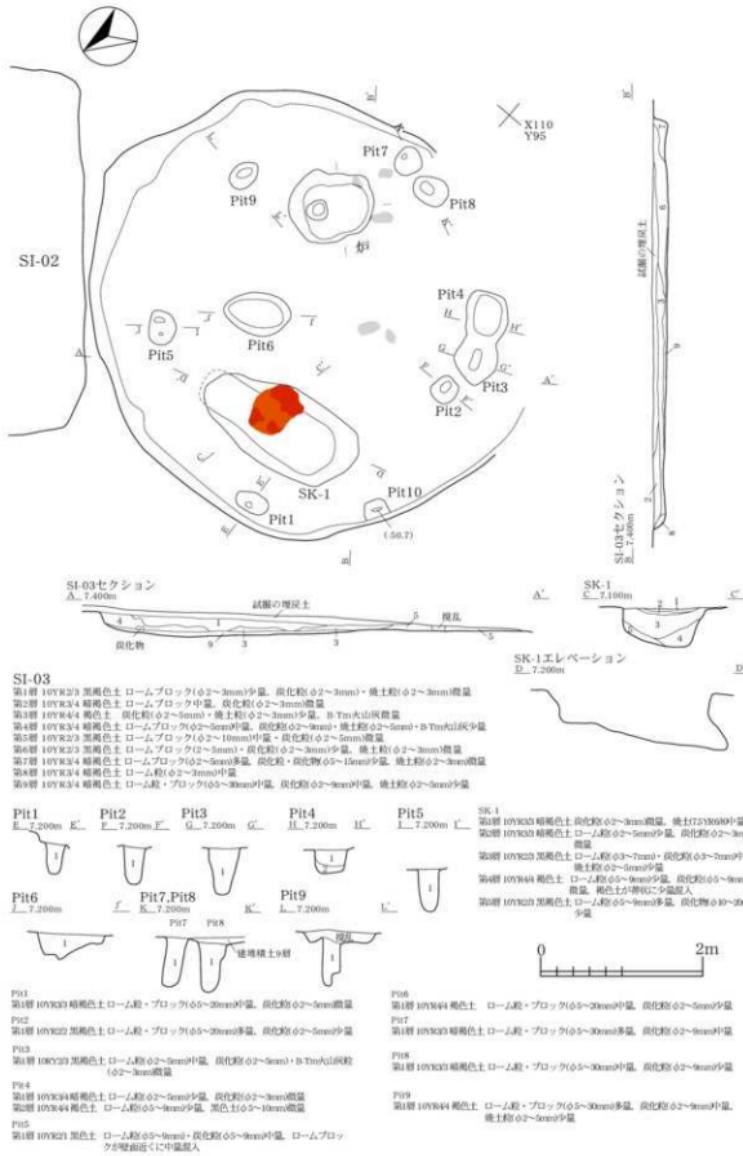
SI-02 カマド2



SI-02 カマド2

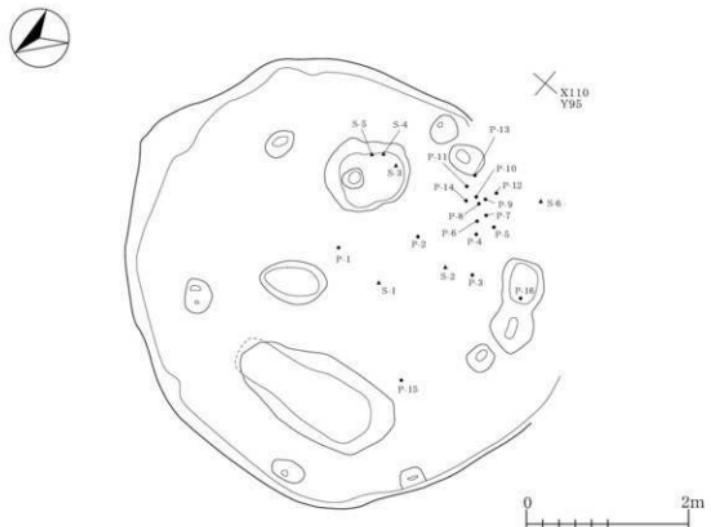
第1層 10YR4/4	褐色土	ローム粒(Φ2~5mm)・炭化粒(Φ5~9mm)・微土粒(Φ2~5mm)少量
第2層 10YR4/4	褐褐色土	ローム粒(Φ2~5mm)少量・微土粒多量
第3層 10YR4/4	褐色土	炭化物多量・微土粒(Φ2~5mm)少量
第4層 10YR3/4	暗褐色土	ローム粒(Φ2~4mm)少量・微化粒(Φ5~8mm)中量・微土粒・ブロック(Φ5~15mm)多量
第5層 10YR4/4	褐色土	ローム粒(Φ2~5mm)中量・微化粒(Φ5~8mm)少量
第6層 10YR4/4	褐色土	第1組剖面
第7層 10YR4/4	褐色土	ローム・ブロック多量に含む・炭化粒(Φ2~3mm)微量
第8層 10YR4/4	褐色土	微化粒(Φ2~3mm)微量
第9層 10YR4/4	褐色土	ローム・ブロック少量・炭化粒(Φ5~8mm)少量
第10層 10YR3/4	暗褐色土	ローム粒(Φ2~3mm)・炭化粒・炭化物(Φ5~15mm)少量
第11層 10YR3/4	暗褐色土	ローム粒(Φ2~5mm)少量・炭化粒(Φ2~3mm)微量・To-s火山灰・ブロック(Φ20mm)微量

図版 6 SI-02-4

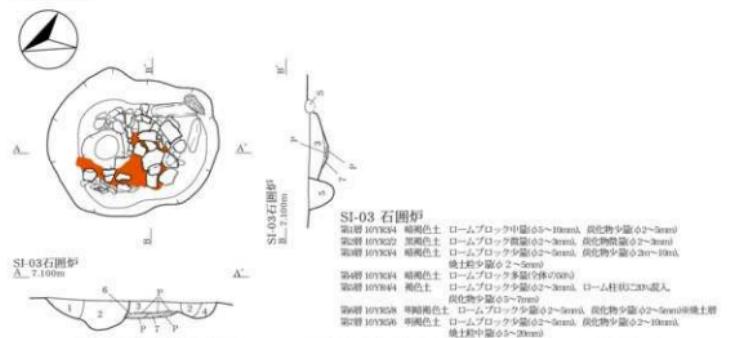


図版 7 SI-03-1

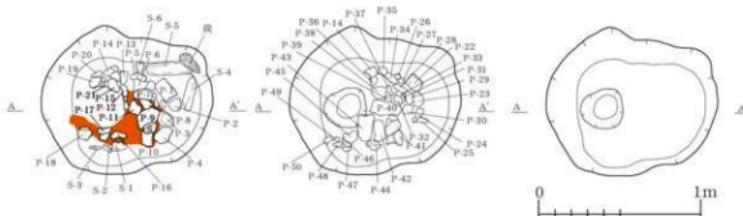
SI-03遺物出土状況



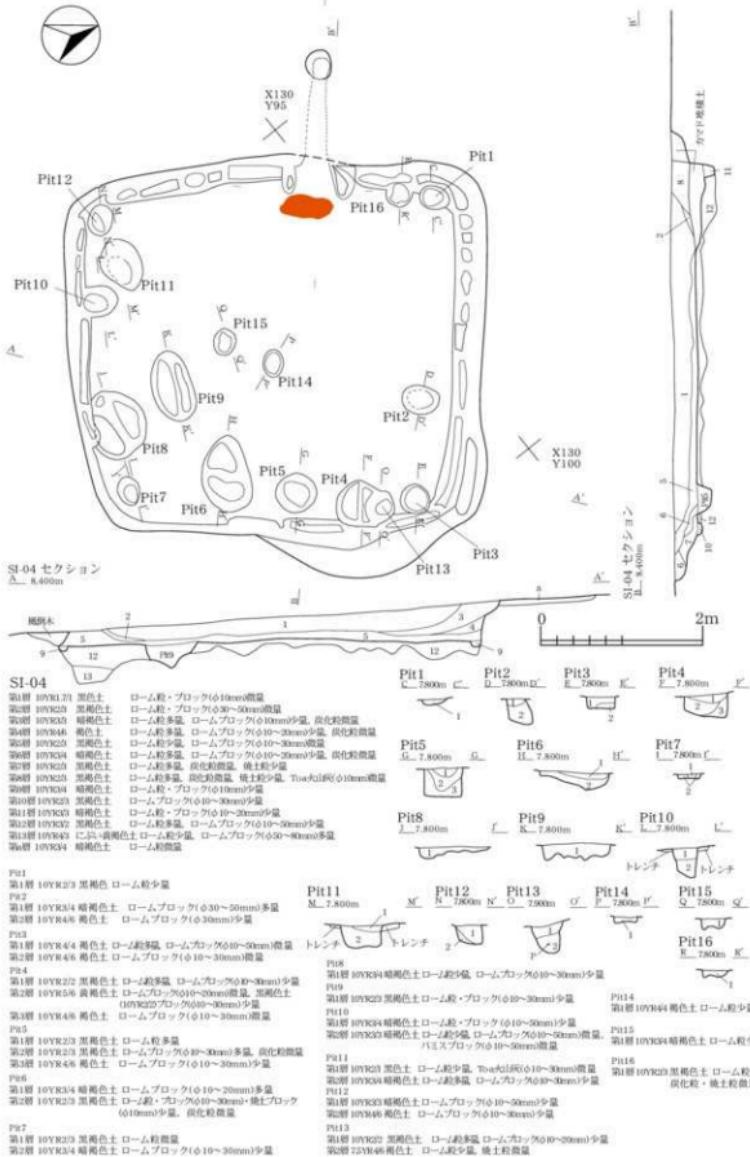
SI-03石窯炉



SI-03石窯炉 燃土直上遺物出土状況

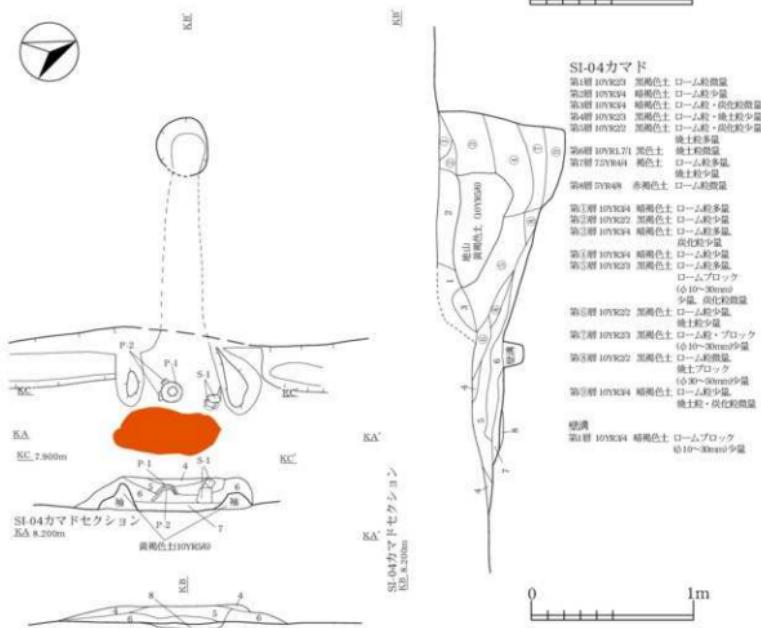


図版 8 SI-03-2

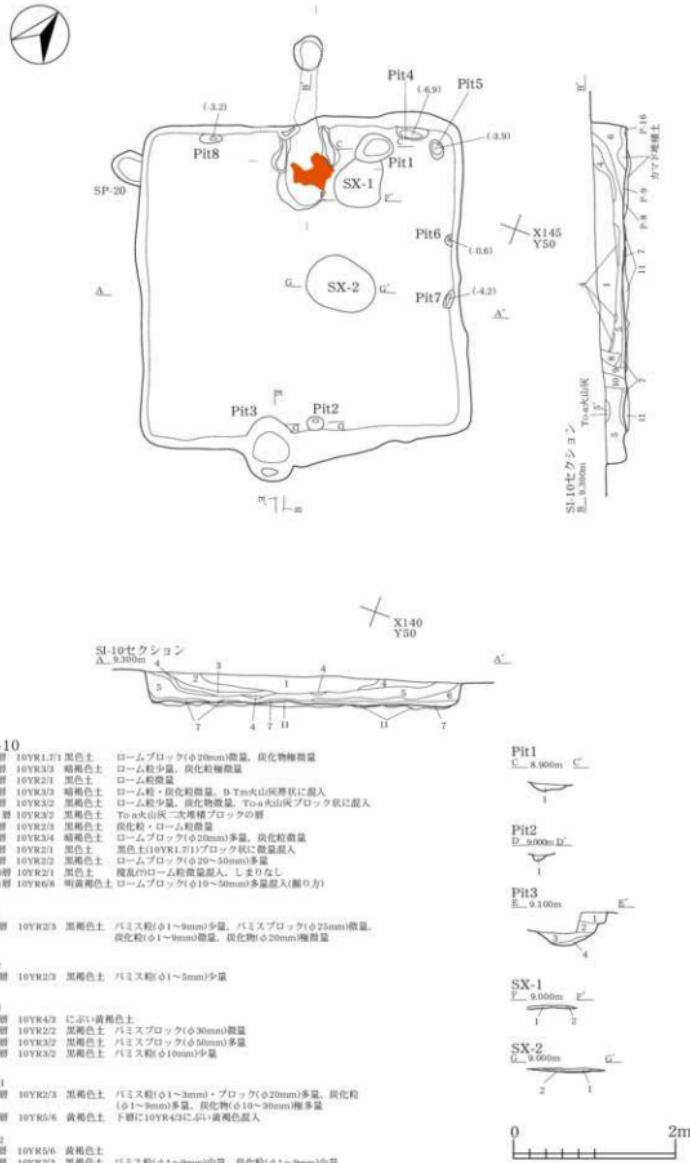


図版 9 SI-04-1

SI-04内遺物出土状況

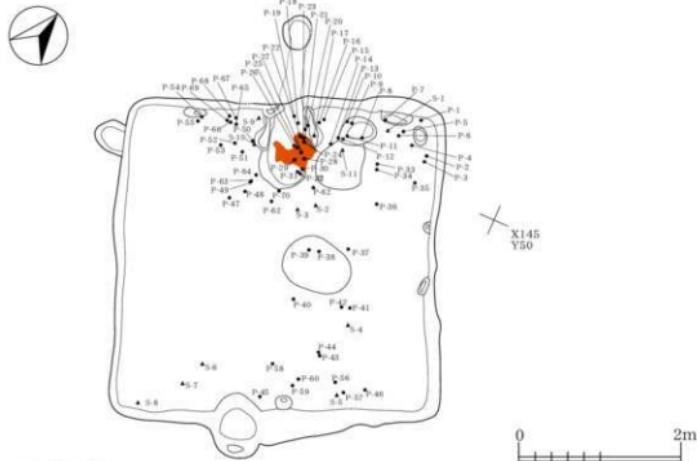


図版 10 SI-04-2

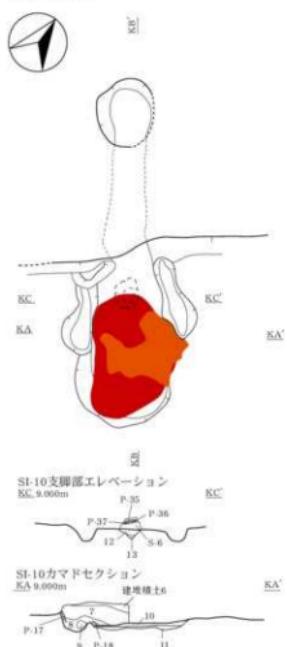


図版 11 SI-10-1

SI-10遺物出土状況



SI-10カマド



SI-10支脚部エレベーション
KC 9.000m

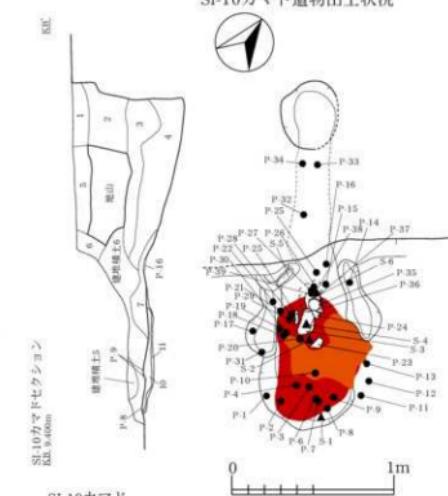
P-35 P-36

12 13 5-6

SI-10カマドセクション
KA 9.000m 建壇埴土

17 7 10 9 P-18 11

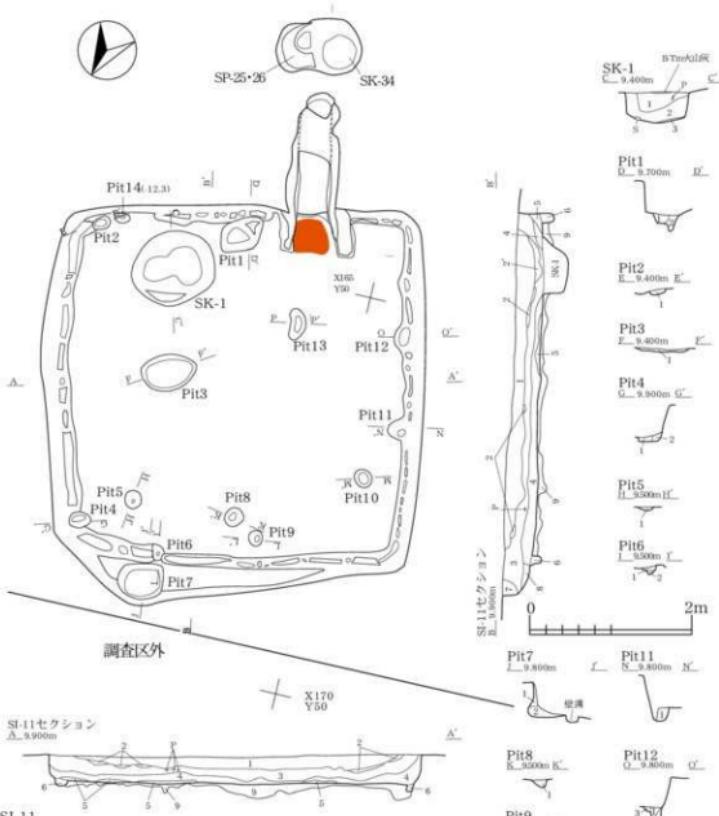
SI-10カマド遺物出土状況



SI-10カマド

- 第1壁 10YR3/4 緑褐色土 ローム粒少量
- 第2壁 10YR3/2 緑褐色土 ローム粒少量、炭化粒微量
- 第3壁 2.3 黒褐色土 ローム粒微量、他の割に比べてしまなし
- 第4壁 10YR2/2 黒褐色土 ロームブロック約50mm少量、焼土ブロック約70mm微量
- 第5壁 10YR3/4 黒褐色土 ローム粒微量、炭化粒微量
- 第6壁 10YR4/4 黒褐色土 ローム粒微量、炭化粒微量
- 第7壁 10YR4/4 ぶるい黄褐色土 ローム粒中量、炭化粒微量
- 第8壁 10YR4/3 ぶるい黄褐色土 ローム粒、炭化粒微量
- 第9壁 10YR4/3 ぶるい黄褐色土 ローム粒、炭化粒微量
- 第10壁 5YR5/2 ぶるい黄褐色土 焼土ブロック約50mm微量
- 第11壁 5YR5/2 ぶるい黄褐色土 焼土ブロック約50mm微量
- 第12壁 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒、炭化粒微量
- 第13壁 10YR4/4 黒褐色土 ローム粒、炭化粒微量

図版 12 SI-10-2



SI-11セクション
△ 9,900m
X 170 Y 50

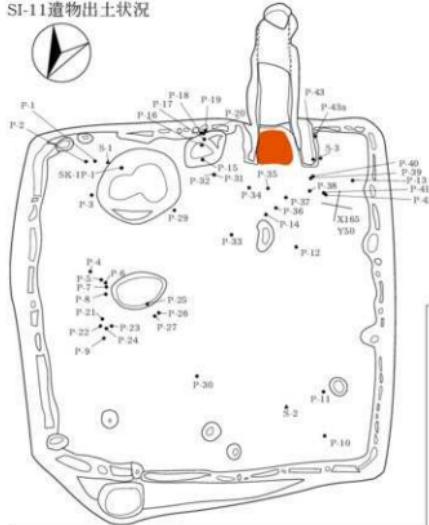
SI-11

360層 10YR21 黒褐色土 ローム粒少量、黒褐色土10YR21の上部に少量混入。
362層 10YR21 黒褐色土、粘土状崩壊土 BTmgl層/ブロック状・塊入
367層 10YR21 黑褐色土、BTmgl層・大塊状ブロック層
369層 10YR21 黑褐色土、ロームブロックの0~30mm程度、炭化物微量
374層 10YR21 黑褐色土、ロームブロックの0~30mm程度、炭化物微量
380層 10YR40 12-33(薄暗色土)ロームブロック(0~10~60mm)多量
388層 10YR40 黑褐色土 ローム粒少量
397層 10YR21 黑褐色土 ローム粒少量
400層 10YR21 黑褐色土、炭化物少量
398層 10YR21 黑褐色土と10YR21黑色土との混合土、ロームブロック(0~30mm)多量

SK-1
第1層 10YR22 黑褐色土、ローム粒(0~10mm)少量、上面BTmgl層/二次堆積
第2層 10YR22 黑褐色土、ロームブロック(0~30~60mm)多量
第3層 10YR22 黑褐色土
Pit1
第1層 10YR22 黑褐色土、ローム粒(0~10mm)少量、上面BTmgl層/二次堆積
第2層 10YR22 黑褐色土、ローム粒・ブロック(0~30cm)多量
Pit2
第1層 10YR21 黑褐色土、ローム粒・ブロック(0~1~20mm)微量
Pit3
第1層 10YR22 黑褐色土、ロームブロック(0~10~50mm)中量
Pit4
第1層 10YR21 黑褐色土、ローム粒(0~1~5mm)微量
Pit5
第1層 10YR22 黑褐色土、ローム粒(0~1~5mm)微量
第2層 10YR22 黑褐色土、ローム粒(0~1~5mm)微量
Pit6
第1層 10YR21 黑褐色土、ローム粒(0~1~5mm)微量

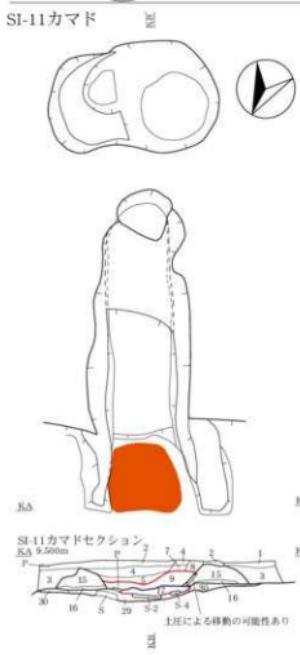
図版 13 SI-11-1

SI-11遺物出土状況

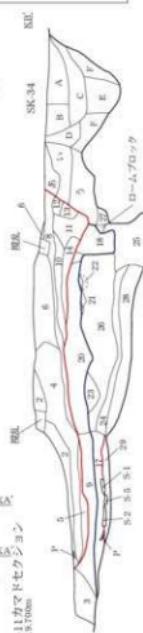
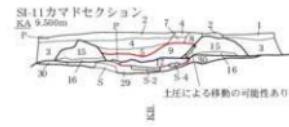


0
2m

SI-11カマド



土壌による移動の可能性あり



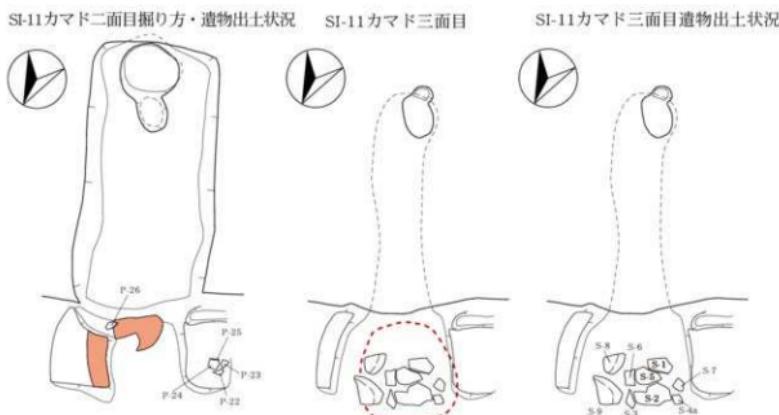
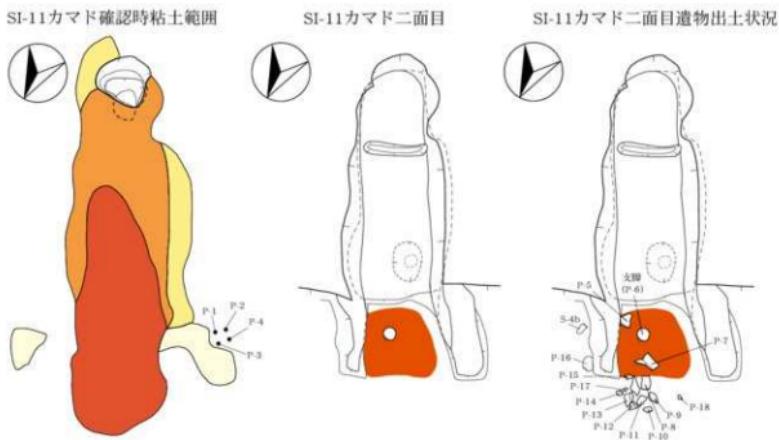
0
1m

SI-11カマド

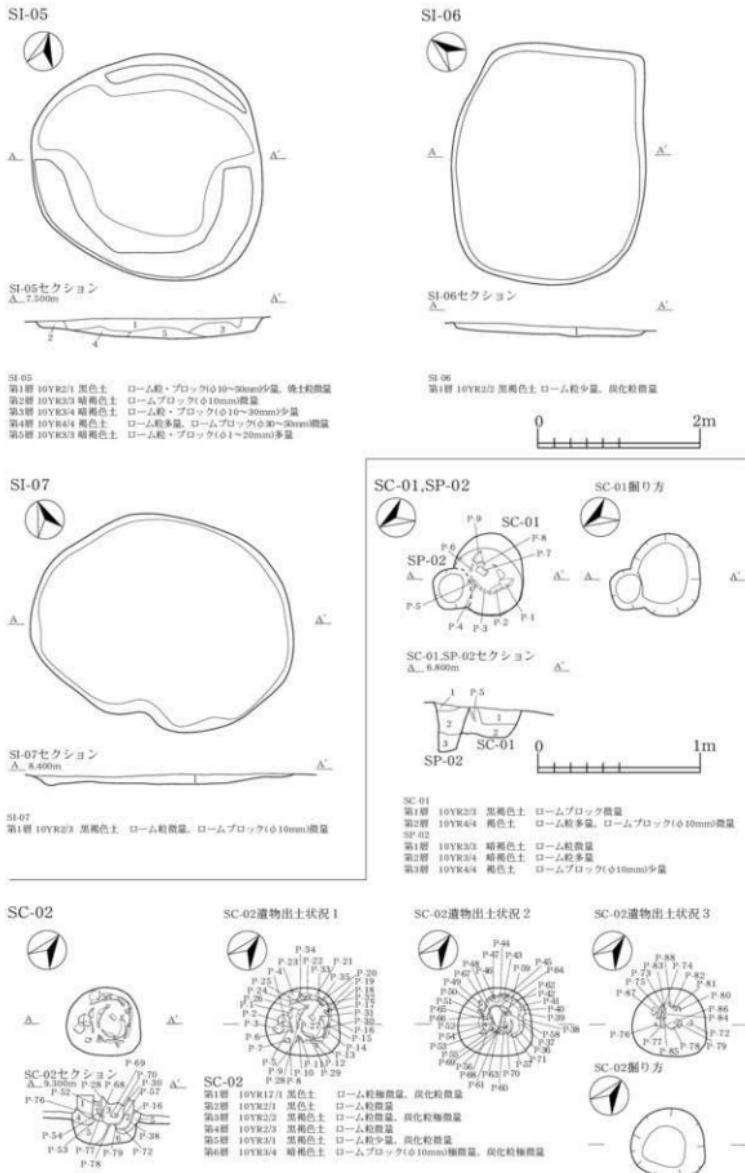
- 第1層 10YK46 赤褐色土 地上とロームブロック層0~30mmの混合土
ローム層0~1~90mm中にロームブロック
(約30~50mm)の多量。陶器破片0~5~10mm
中空の骨格や30mm位の砂土
第2層 10YK45 黄褐色土
ローム層0~1~90mm少量。地表付近0~30mm
第3層 10YK44 黒褐色土
地表付近にロームブロック層0~30mm
中空の骨格や10mm位の砂土
第4層 10YK46 黑褐色土 地上とロームブロック層
中空の骨格や10mm位の砂土
第5層 10YK44 黒褐色土 地上とロームブロック層0~30mm
第6層 10YK46 明赤褐色土
ローム層0~1~90mm少量
第7層 10YK45 黑褐色土
ローム層0~1~90mm少量。
地表付近にロームブロック層0~30mm
第8層 10YK43 暗褐色土
パニキル状0~1~90mmの中空、パニキル層
(約15~30mm)多量。白色ロームブロック
(約15mm)混入
第9層 10YK44 黑褐色土 基材層に赤褐色土質であるがパニキル層に覆
ローム層0~1~90mmが混入含まれる。
第10層 10YK43 にJIN-黄褐色土 地上とローム層0~30mm
中空の骨格や10mm位の砂土である。パニキル層が
0~10mm位の砂土で覆われる。
第11層 10YK23 黑褐色土
ローム層0~1~90mm少量
第12層 10YK43 JIN-黄褐色土
ローム層0~1~90mm少量
第13層 10YK23 黑褐色土
パニキル層0~1~90mm少量
第14層 10YK44 黄褐色土
パニキル層0~1~90mm少量
(瓦用陶器の一部と他の焼成物等の中の作業機の可能性)
第15層 10YK23 黑褐色土
パニキル層0~1~90mm少量
第16層 10YK62 灰褐色土
白陶器層0~1~90mm少量
第17層 10YK45 黑褐色土
ローム層0~1~90mm中空。後段部0~1~90mm
中空。地表・パニキル層0~1~90mm多量
第18層 10YK21 黑色土
ロームブロックの40mm位の埋量
第19層 10YK32 黑褐色土
ロームブロックの10~20mm多量
第20層 10YK21 黑色土
基材層に10mm位の白色土層。ロームブロック
(約30~50mm)少量
第21層 10YK23 黑褐色土
第22層 10YK45 にJIN-黄褐色土 ローム層0~1~90mm少量
第23層 10YK22 黑褐色土 ローム層0~1~90mm多量
第24層 10YK21 黑色土
ローム層0~1~90mm少量
第25層 10YK46 黄褐色土
天井落土層の埋量
第26層 10YK58 黄褐色土
黒褐色土と10YK23の中空
第27層 10YK50 黄褐色土
第28層 10YK26 黄褐色土
第29層 10YK44 黄褐色土
前北壁0~5~40mm位の中空。後土層0~1~90mm
多量。発達した発育する中空0~100mm位の中空。灰少量
第30層 10YK44 にJIN-黄褐色土
ローム層0~1~90mm少量
第31層 10YK22 黑褐色土
ローム層0~1~90mm少量
第32層 10YK21 黑褐色土
ローム層0~1~90mm多量
第33層 10YK23 黑褐色土
ローム層0~1~90mm少量
第34層 10YK22 黑褐色土
ローム層0~1~90mm少量
第35層 10YK20 黑褐色土
ローム層0~1~90mm少量

- SK-3A
第A層 10YK21 黑褐色土
ロームブロックの0~10~50mm少量。
地表付近0~1~90mm少量
B7m壁付近、パニキル層0~1~10mm多量
ローム層0~1~90mm少量
第C層 10YK21 黑褐色土
ローム層0~1~90mm少量
第D層 10YK22 黑褐色土
地表面付近の少量化
第E層 10YK32 黑褐色土
ローム層0~1~90mm少量
第F層 10YK20 黑褐色土
ローム層0~1~90mm少量

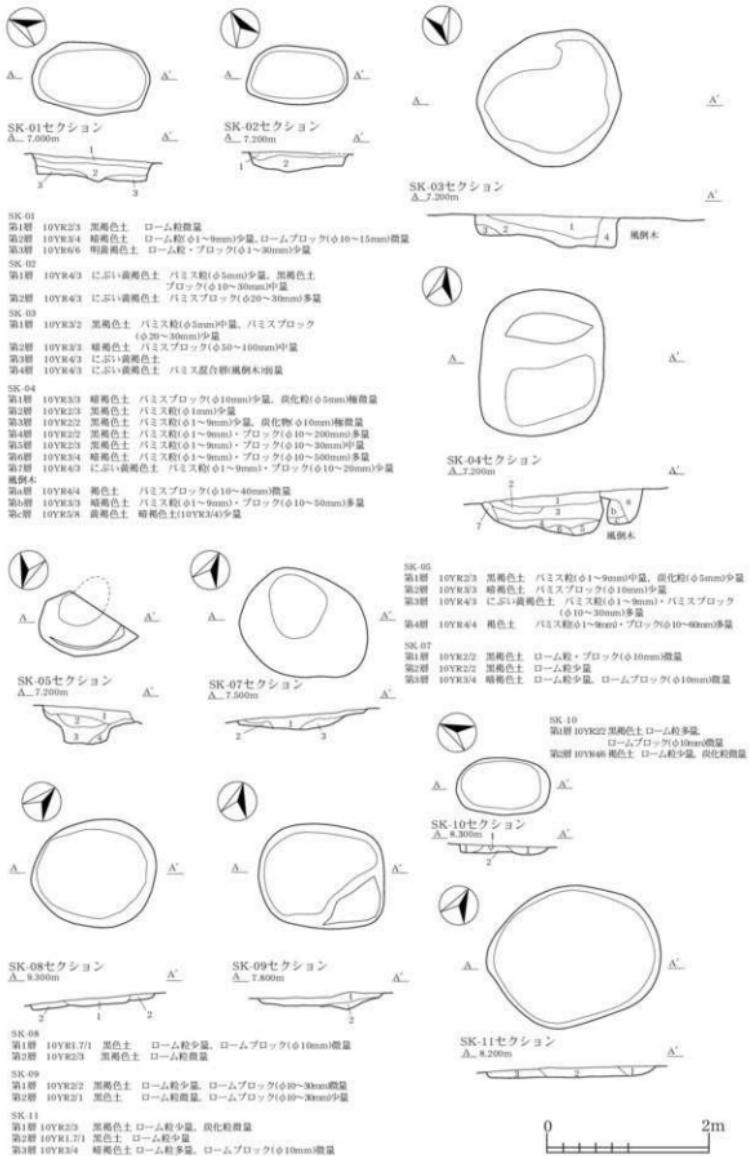
図版 14 SI-11-2



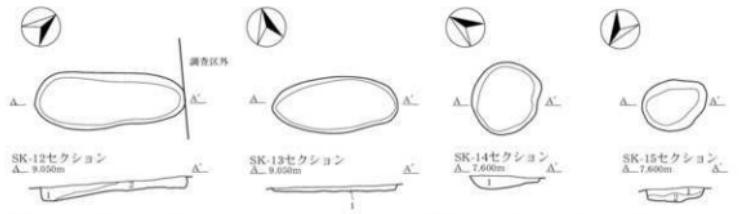
図版 15 SI-11-3



図版 16 SI-05 ~ 07, SC-01 ~ 02

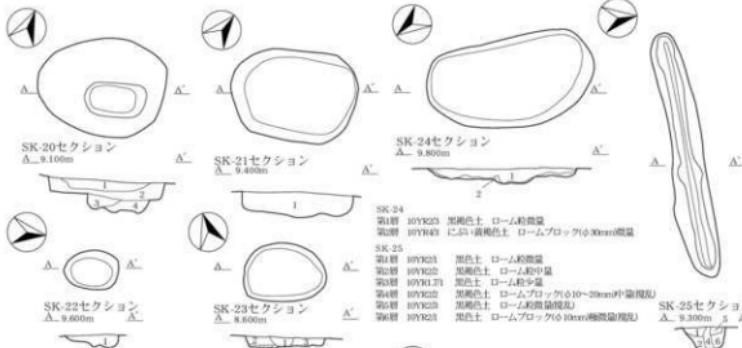
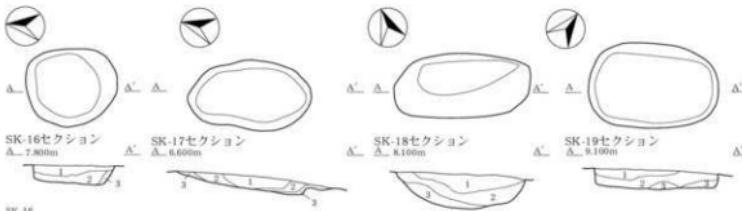


図版 17 SK ①



SK-12
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒微量
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック(Φ10mm)微量
SK-13
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒少量

SK-14
第1層 10YR2/3 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック(Φ10mm)微量
SK-15
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒微量、ロームブロック(Φ10~30mm)微量
第2層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・ブロック(Φ10~50mm)微量



SK-20
第1層 10YR1/3/1 黑色土 ローム粒少量、炭化物微量
第2層 10YR2/3 黑褐色土 ローム粒多量、ロームブロック(Φ10~20mm)微量
第3層 10YR4/4 暗褐色土 ローム粒少量
第4層 10YR2/2 黑褐色土 ローム粒多量、ロームブロック(Φ10~25mm)微量

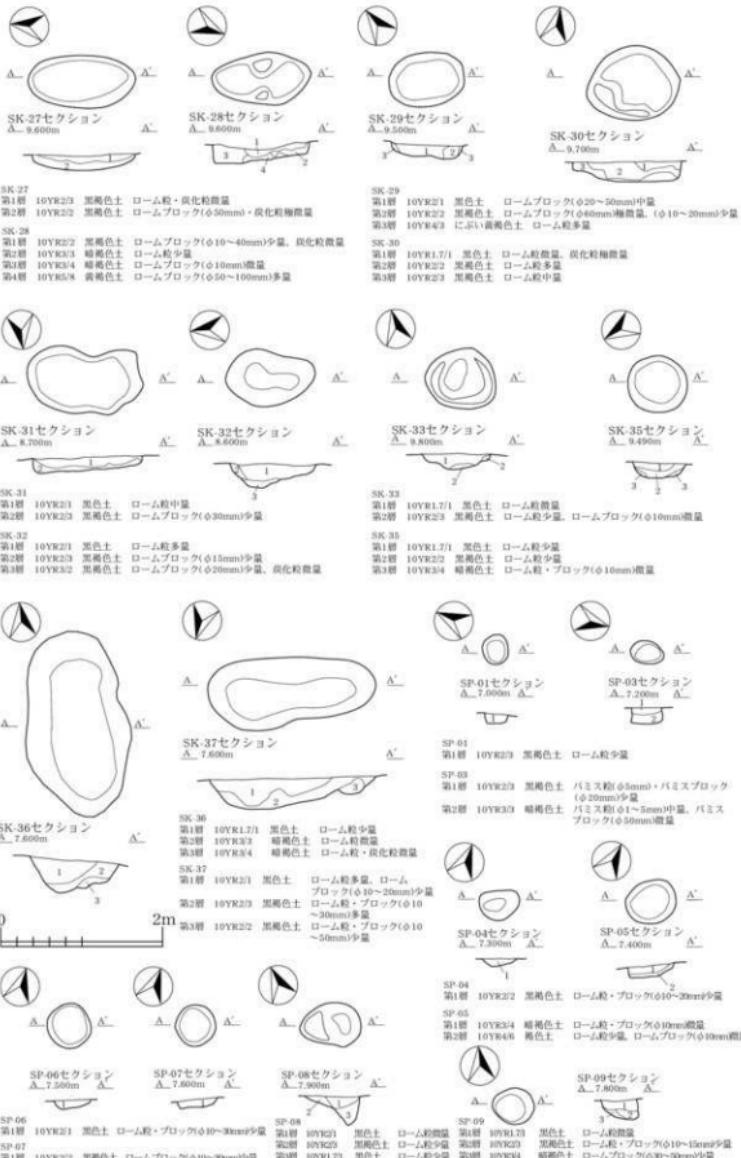
SK-21
第1層 10YR2/3 黑褐色土 ローム粒少量、ロームブロック(Φ10~30mm)、炭化物微量

SK-22
第1層 10YR3/4 暗褐色土 ローム粒・ブロック(Φ10mm)微量

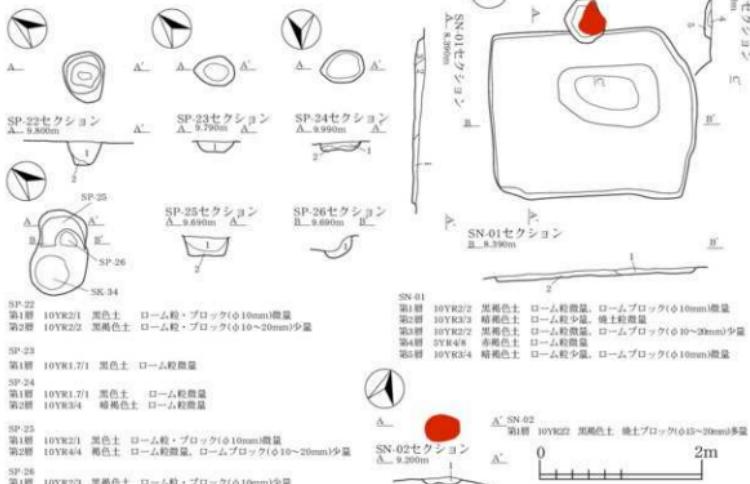
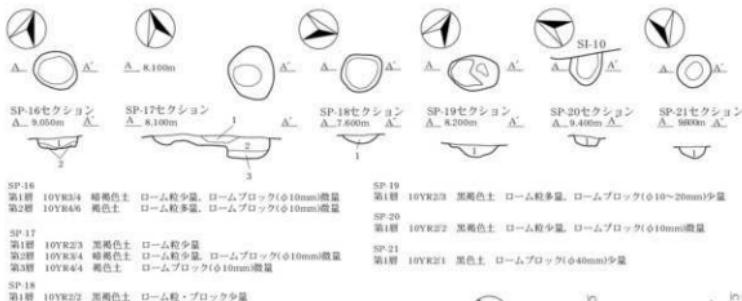
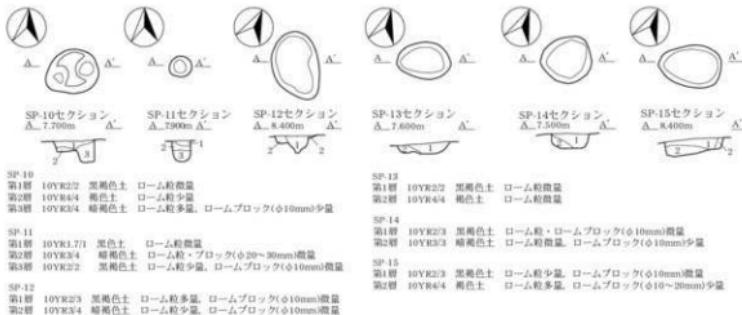
SK-23
第1層 10YR2/1 黑色土 ロームブロック(Φ30mm)微量
第2層 10YR2/3 黑褐色土 硫土粒微量、ローム粒少量
第3層 10YR3/3 暗褐色土 ロームブロック(Φ50mm)微量

図版 18 SK (②)

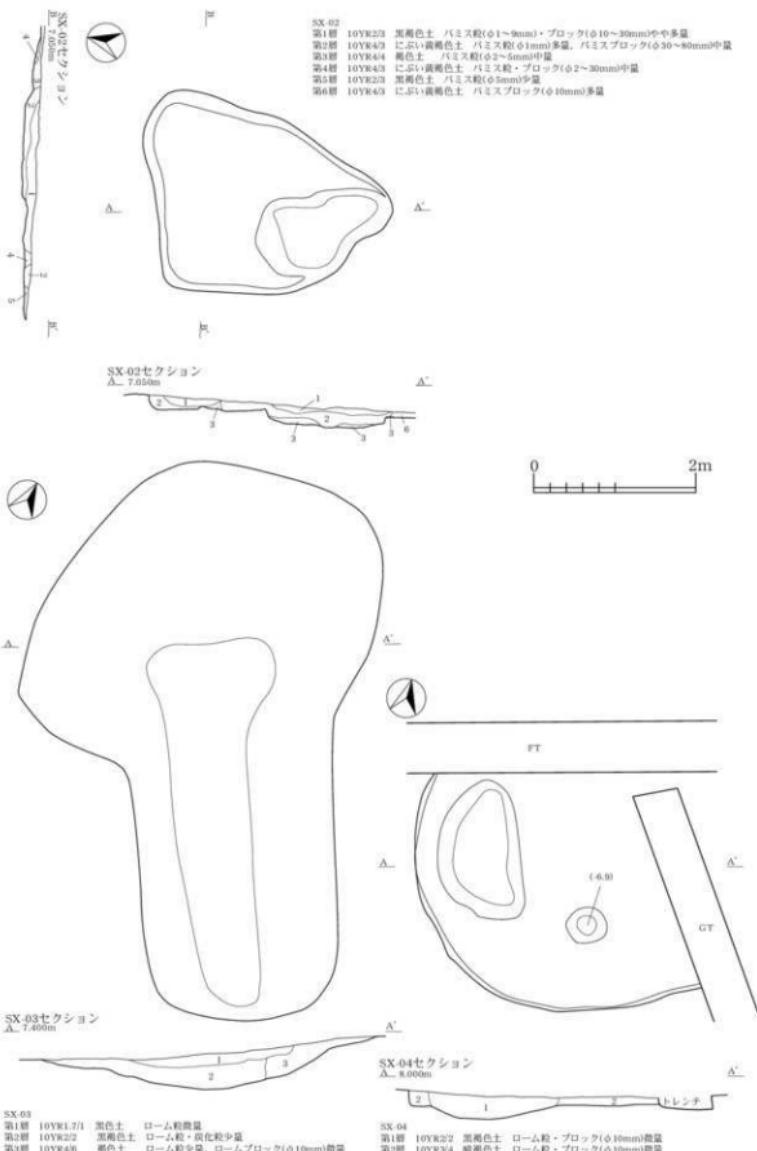
0 2m



図版 19 SK ③ ,SP ①



図版 20 SP ②, 焼土状遺構

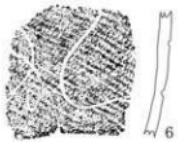
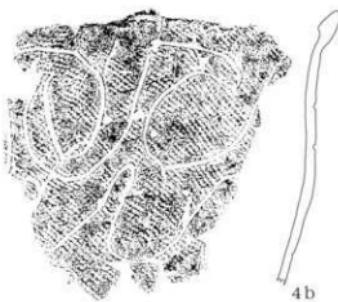
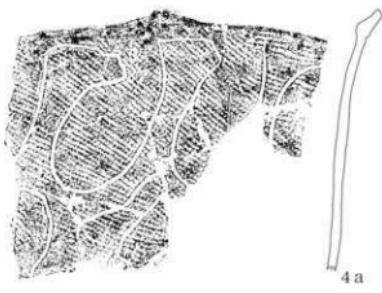
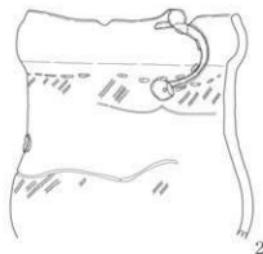


図版 21 その他の遺構

SI-01

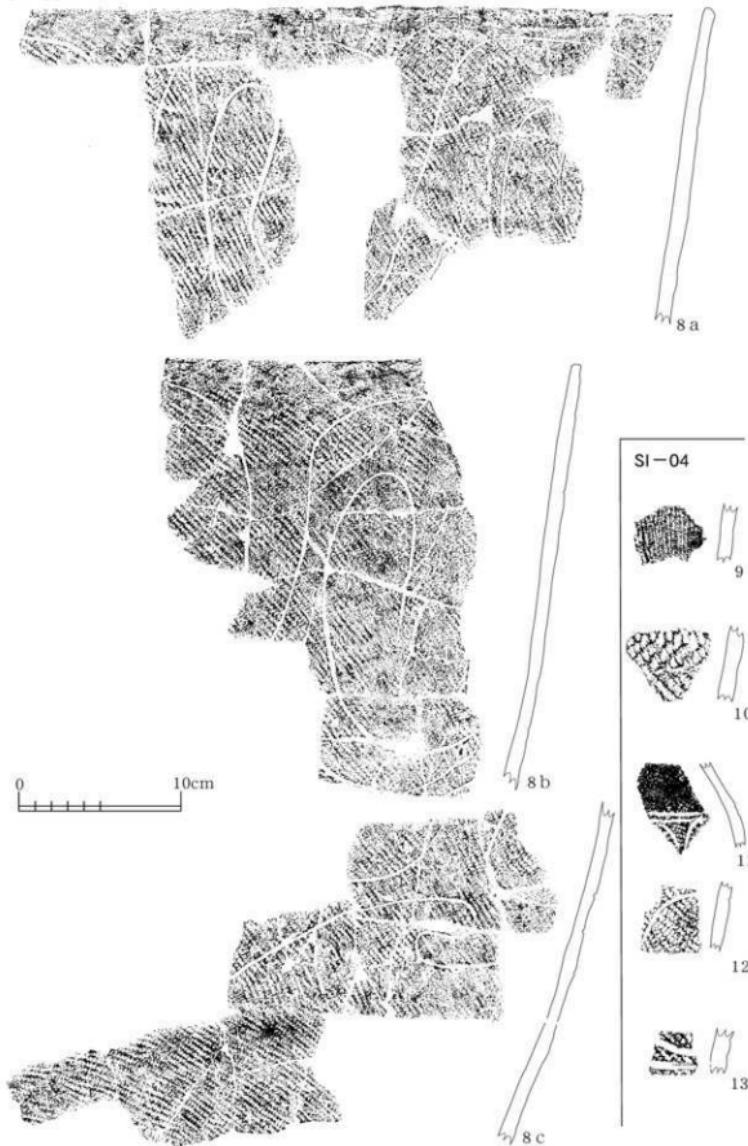


SI-03



図版 22 繩文土器①

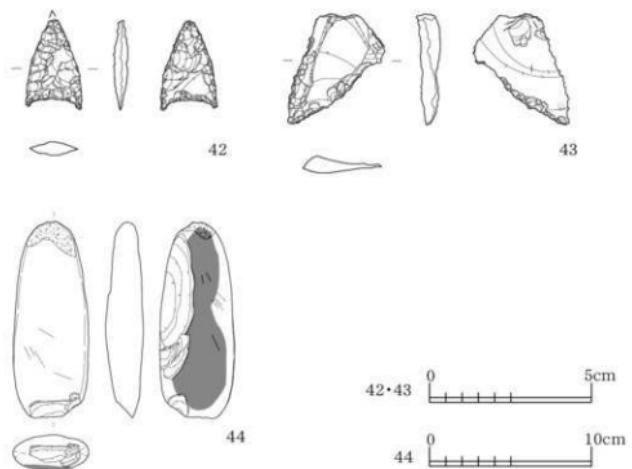
SI - 03



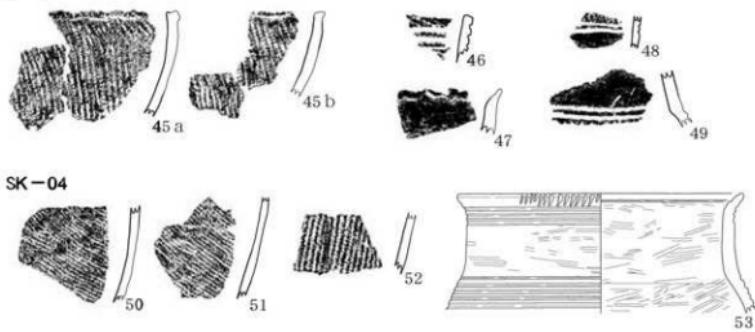
図版 23 繩文土器②



図版 24 繩文土器③

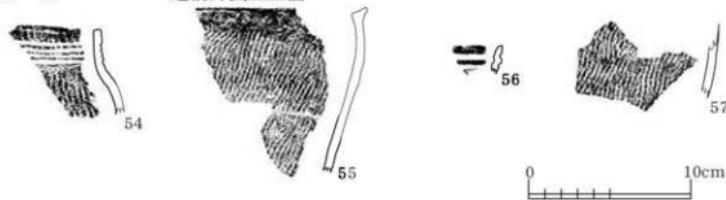


SI-01



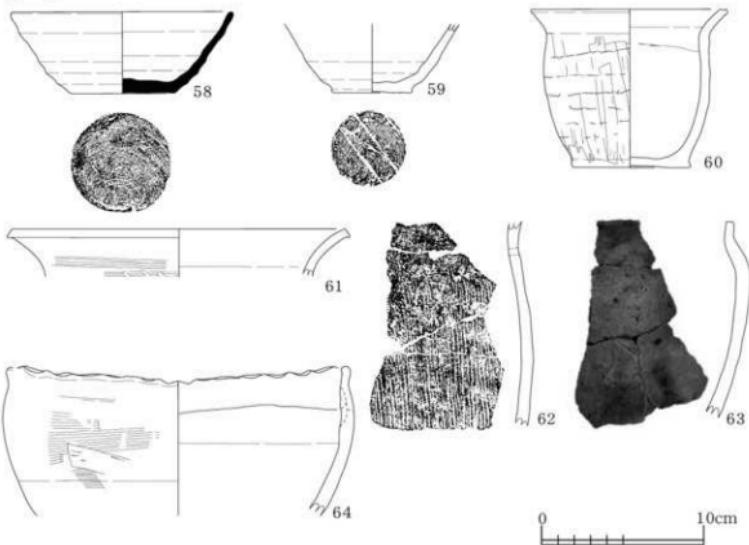
SK-04

SK-05 遺構外出土土器

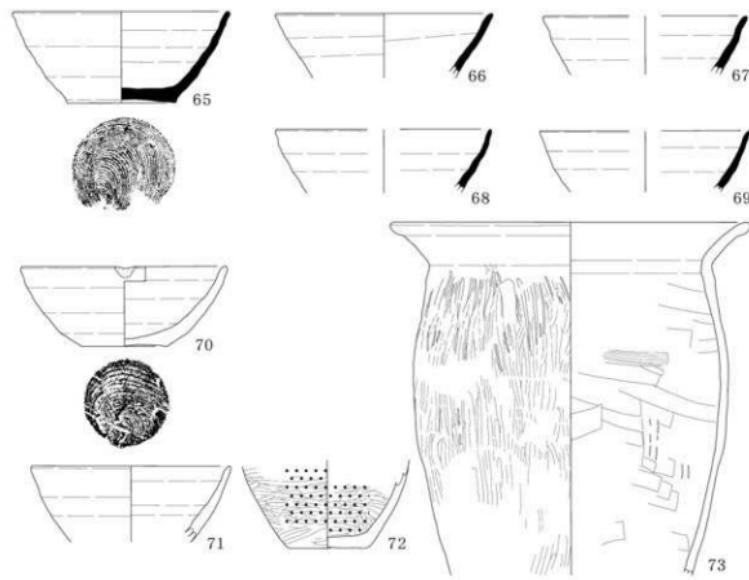


図版 25 石器・弥生土器

SI-01

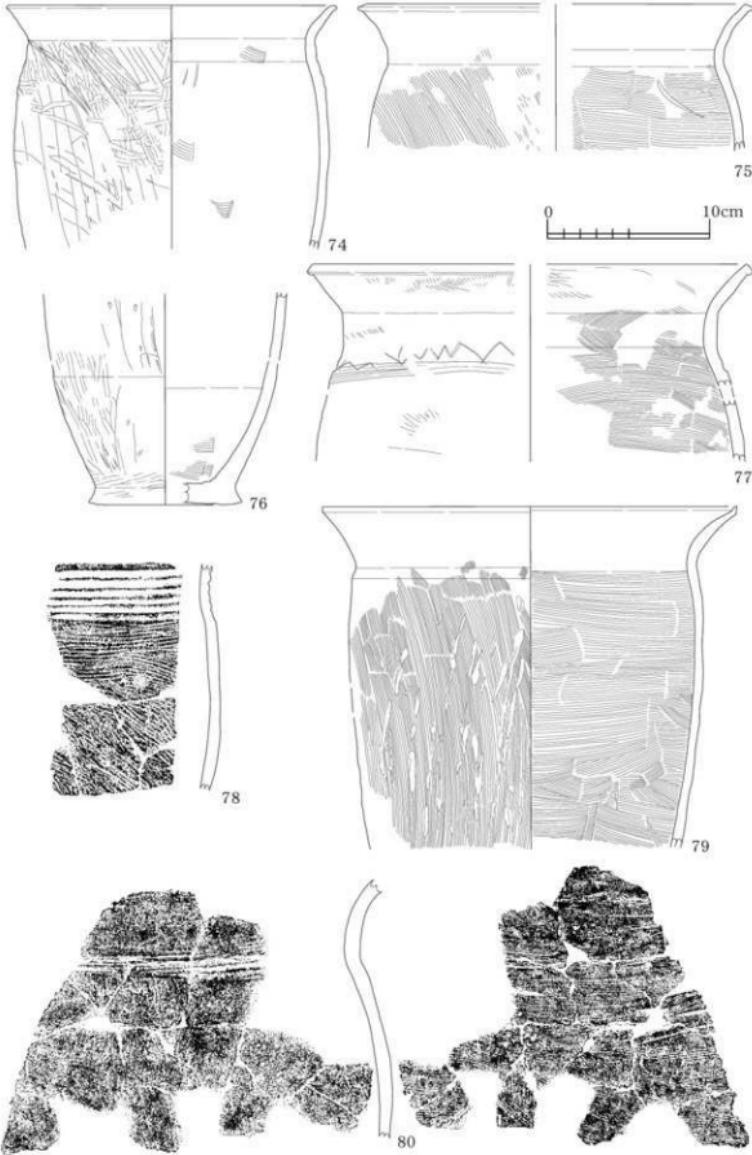


SI-02



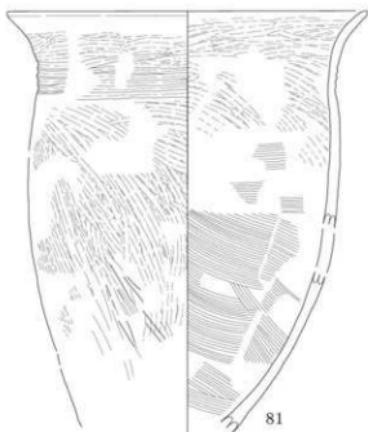
図版 26 SI-01, SI-02 ①

SI-02

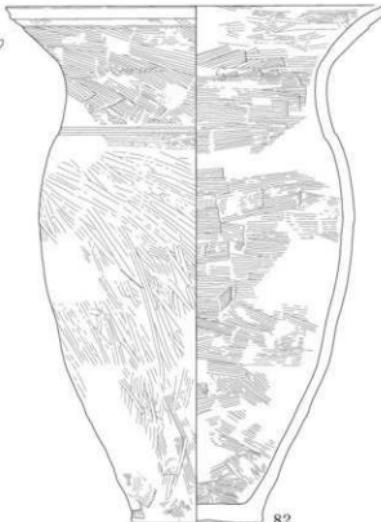


図版 27 SI-02 (2)

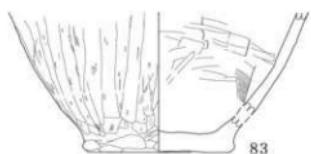
SI-02



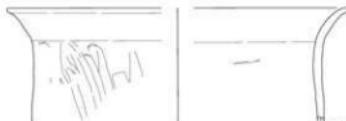
81



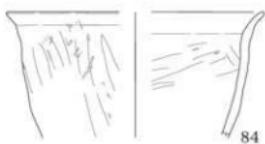
82



83



85



84

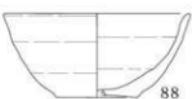


86

SI-04



87



88



89

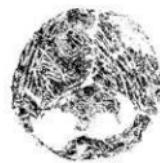
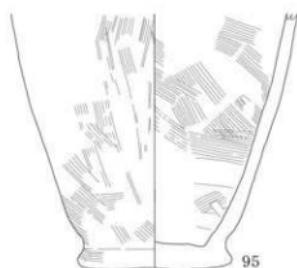
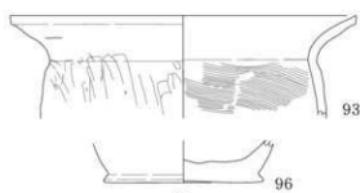
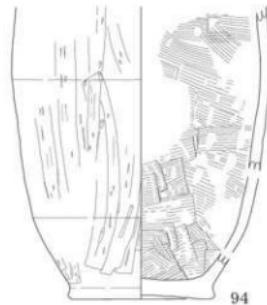
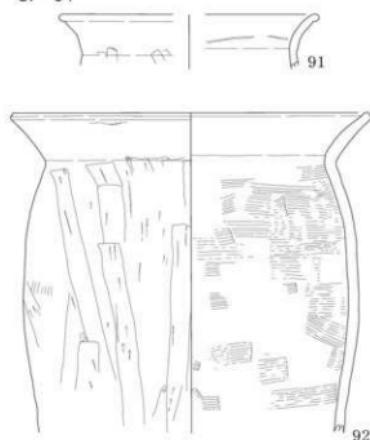


90

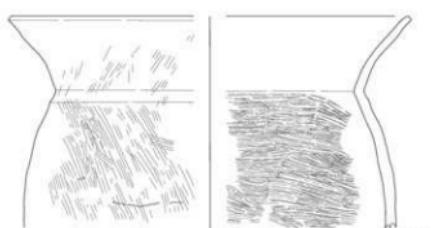
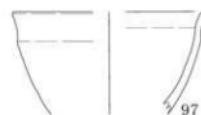
0 10cm

図版 28 SI-02 ③ ,SI-04 ①

SI-04

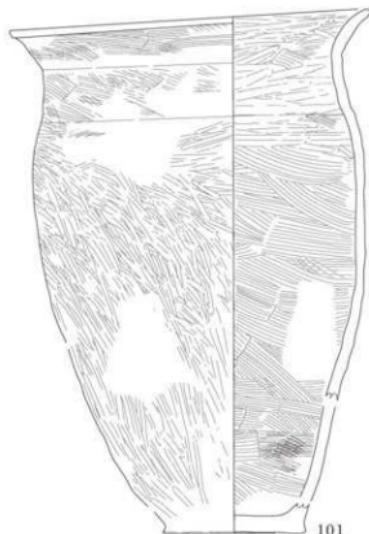


SI-10

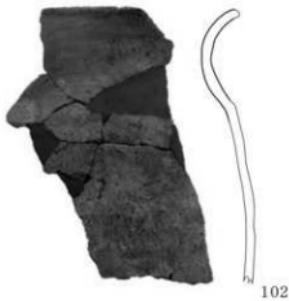


図版 29 SI-04 ② ,SI-10 ①

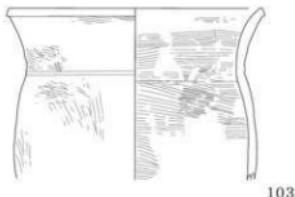
SI-10



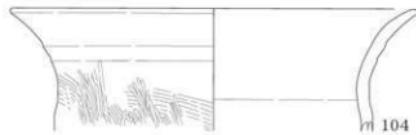
101



102



103

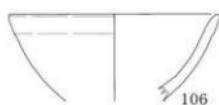


104

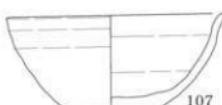


105

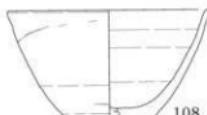
SI-11



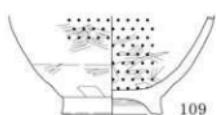
106



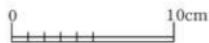
107



108

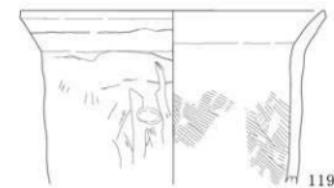
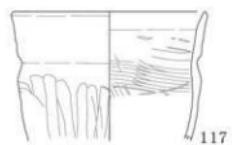
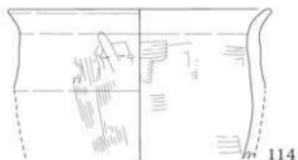
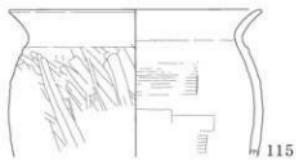
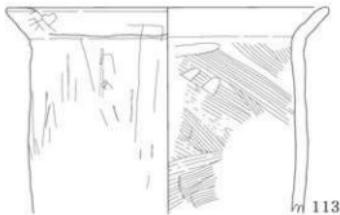
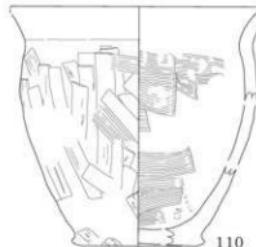


109



図版 30 SI-10 ② ,SI-11 ①

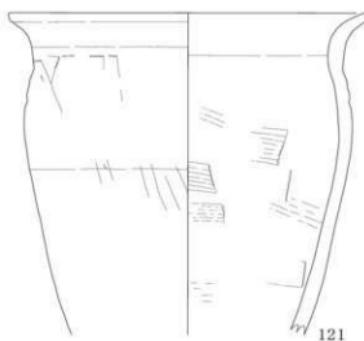
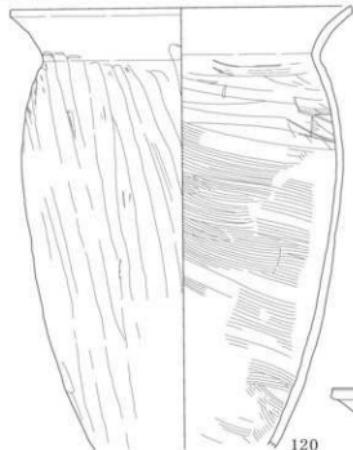
SI-11



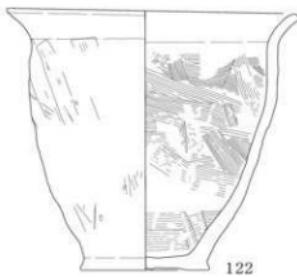
0 10cm

図版 31 SI-11 ②

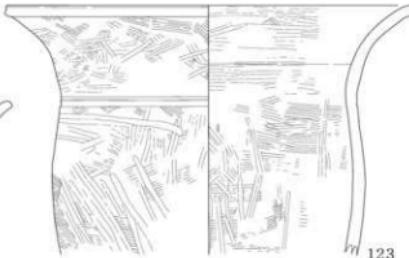
SI-11



120



122



123

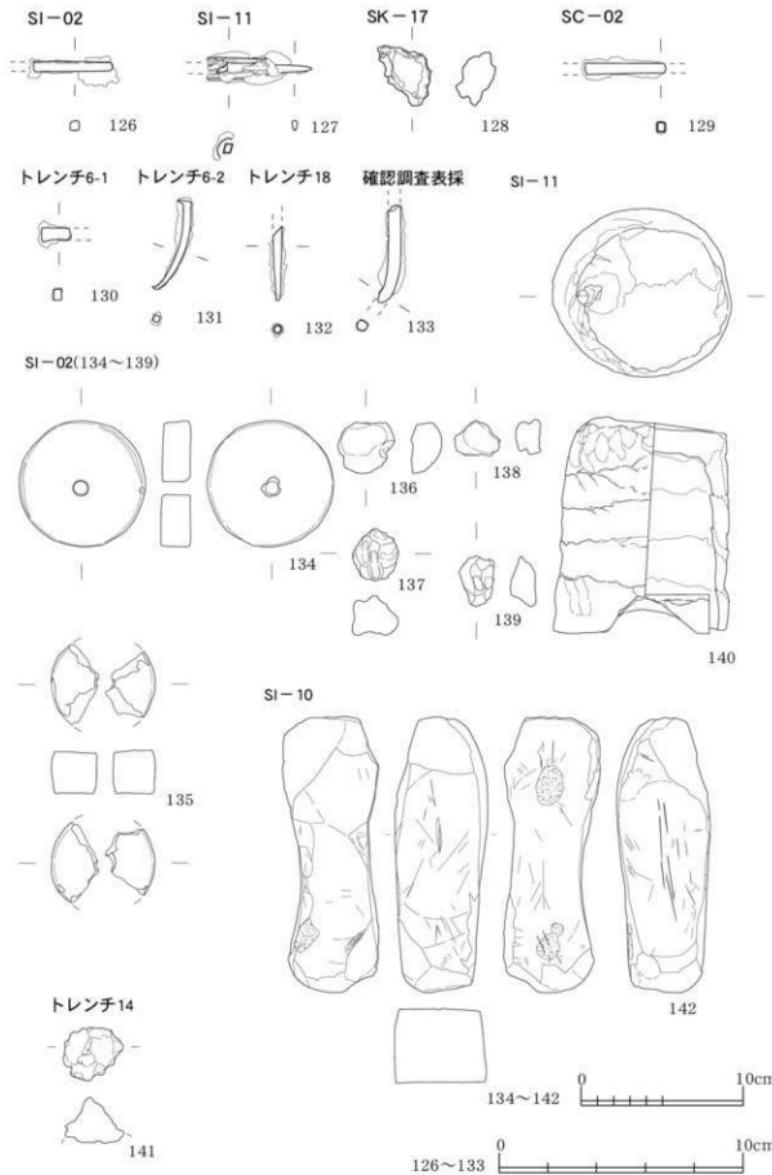
遺構外出土土器



124



図版 32 SI-11 ③, 遺構外出土土器



図版 33 土製品, 石製品, 鉄製品



SI-01セクション (E→)



SI-01完掘 (NW→)



SI-01カマドセクション (N→)



SI-01カマド完掘 (NW→)



SI-02セクション (W→)



SI-02完掘 (NW→)



SI-02掘り方完掘 (NW→)



SI-02カマド1セクション (SW→)



SI-02カマド1セクション2 (NW→)



SI-02カマド1煙道 (NW→)



SI-02カマド1完掘 (NW→)



SI-02カマド2セクション (SW→)



SI-02カマド2完掘 (NW→)



SI-03セクション (SW→)



SI-03完掘 (NW→)



SI-03炉セクション1 (N→)



SI-03炉セクション2 (E→)



SI-03炉土器出土状況 (N→)



SI-03炉完掘 (N→)



SI-04セクション (S→)



SI-04完掘 (SE→)



SI-04カマドセクション (SE→)



SI-04カマドセクション2 (S→)



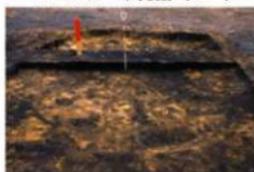
SI-04カマド完掘 (SE→)



SI-05セクション (N→)



SI-05完掘 (N→)



SI-06セクション (W→)



SI-06完掘 (S→)



SI-07セクション (SW→)



SI-07完掘 (N→)



SI-10セクション (E→)



SI-10セクション2 (N→)



SI-10完掘 (S→)



SI-10カマドセクション (E→)



SI-10カマド完掘 (S→)



SI-11セクション (S→)

写真図版2



SI-11完掘 (N→)



SI-11内SK-1セクション (W→)



SI-11カマドセクション (E→)



SI-11カマド検出状況 (N→)



SI-11カマド一面目 (N→)



SI-11カマド二面目 (N→)



SI-11二面目掘り方 (N→)



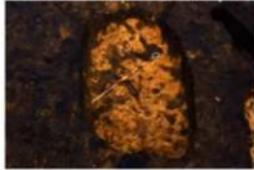
SK-01セクション (W→)



SK-01完掘 (W→)



SK-02セクション (S→)



SK-02完掘 (NW→)



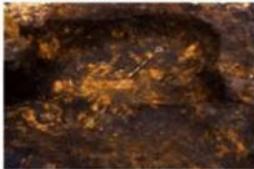
SK-03セクション (N→)



SK-03完掘 (NW→)



SK-04セクション (S→)



SK-04完掘 (N→)



SK-05セクション (N→)



SK-07セクション (S→)

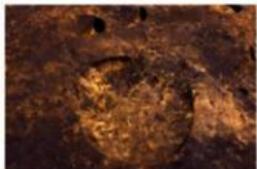


SK-07完掘 (S→)

写真図版3



SK-08セクション (S→)



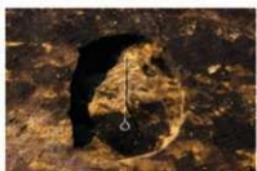
SK-08完掘 (W→)



SK-09セクション (S→)



SK-09完掘 (N→)



SK-10完掘 (S→)



SK-11セクション (S→)



SK-11完掘 (S→)



SK-12完掘 (NW→)



SK-13セクション (S→)



SK-13完掘 (S→)



SK-14セクション (W→)



SK-14完掘 (W→)



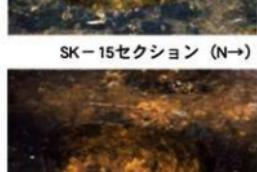
SK-15セクション (N→)



SK-15完掘 (N→)



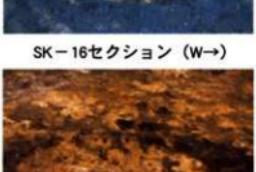
SK-16セクション (W→)



SK-16完掘 (W→)



SK-17セクション (W→)



SK-17完掘 (W→)



SK-18セクション (S→)



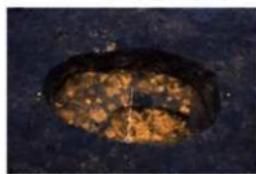
SK-19セクション (S→)



SK-19完掘 (S→)



SK-20セクション (S→)



SK-20完掘 (S→)



SK-21セクション (S→)



SK-21完掘 (S→)



SK-22セクション (E→)



SK-23セクション (S→)



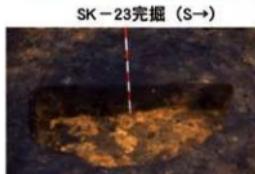
SK-23完掘 (S→)



SK-25セクション (E→)



SK-25完掘 (E→)



SK-26セクション (E→)



SK-26完掘 (E→)



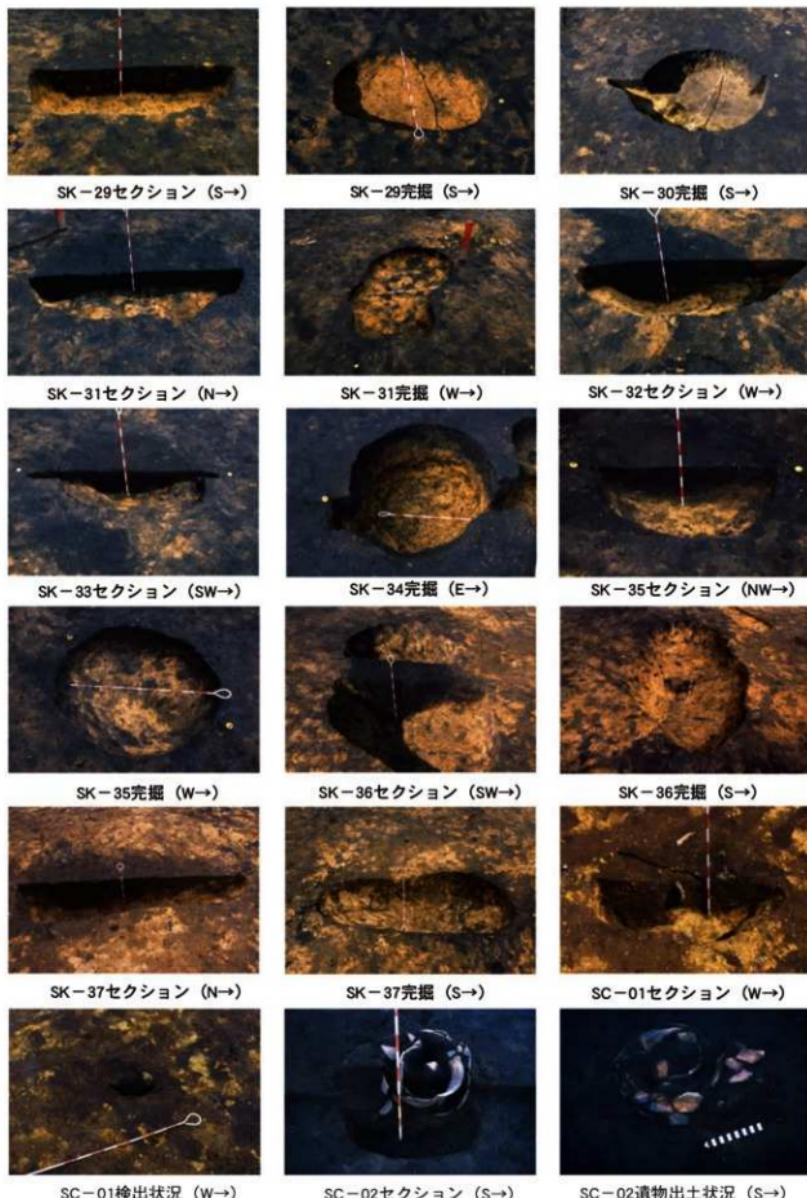
SK-27完掘 (E→)



SK-28セクション (E→)



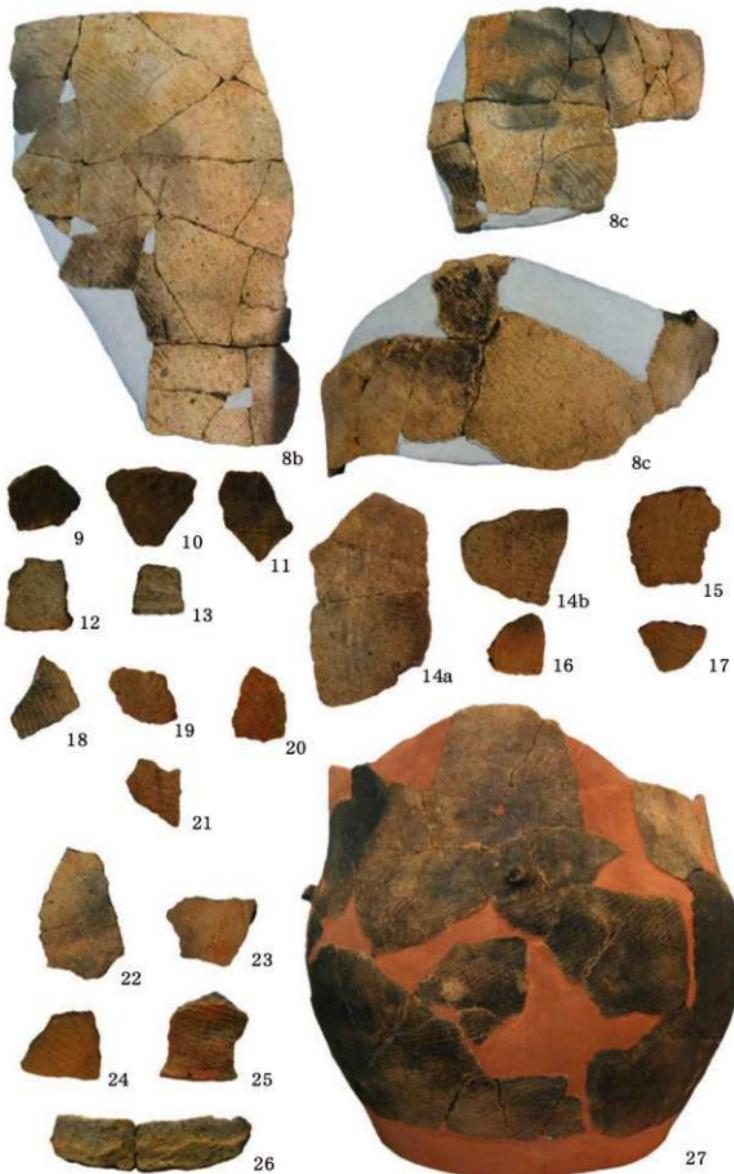
SK-28完掘 (W→)



写真図版6



写真図版 7



写真図版 8



写真図版 9



73



74



75



76



77



78



79



80

写真図版 10



81

82

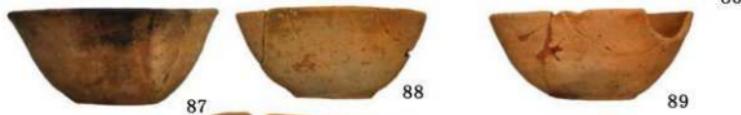


83

84

85

86



87

88

89



90

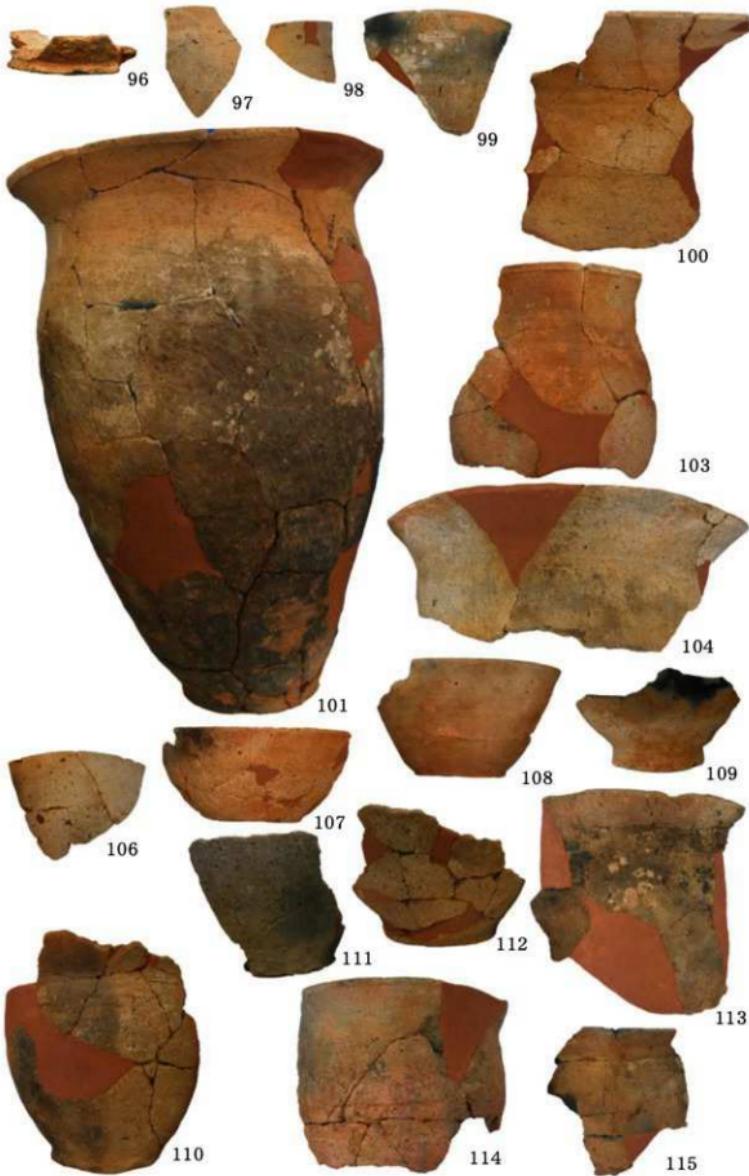
91

92

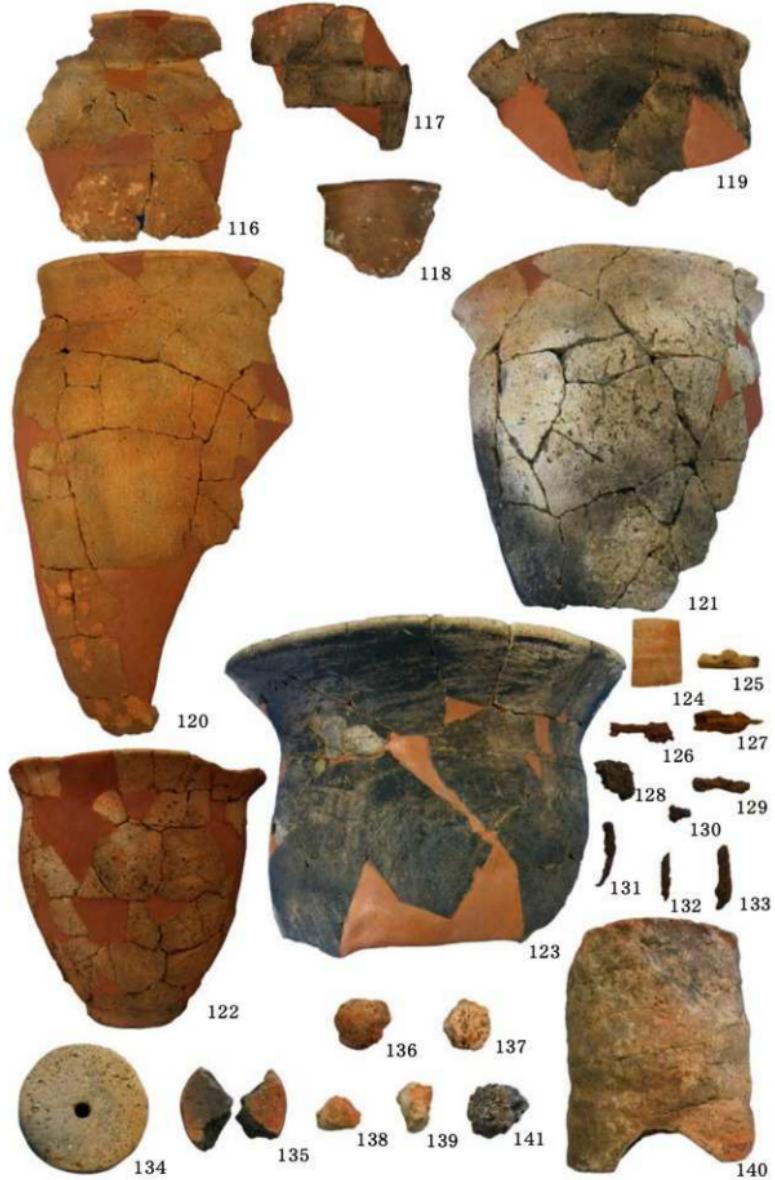
93

94

写真図版 11



写真図版 12



写真図版 13

第VI章 統括

第1節 遺構

本調査の結果、竪穴建物跡9軒、土坑37基、ピット26基、埋設土器遺構2基、焼土状遺構2基、溝跡1条、その他の遺構4基を検出した。明確に帰属時期の判別のつかない資料が多い状況であったが、帰属時期について判別のついたものを中心に時代毎の遺構の統括を行う。

1. 縄文時代

時期判別が可能であった遺構は竪穴建物跡1軒、埋設土器遺構2基、土坑2基、その他の遺構2基である。内訳は沢部分の左岸であるA区の標高6.5~7m付近から大木10式併行期の竪穴建物跡1軒、炉内に敷設された土器と同一個体の埋設土器遺構が1基、楕円形の土坑1基、その他の遺構とした不整形の落ち込み2基で、右岸のB区の標高9.2m付近から埋設土器遺構1基、溝状土坑1基である。その他、遺物の出土が認められず時期不明と扱った資料の中でSI-05については掘り込みの形状や床面の作り出し（白色粘土を一部貼付けている）等がSI-03と類似した傾向が認められ、該期の所産である可能性がある。

出土遺物の構成は、縄文時代前末期円筒下層d₁式、中期円筒上層c+d式・榎林式・最花式・大木10式併行、後期十腰内I式の資料が出土している。出土位置について一定のまとまりを持ち得ている（第8図参照）。

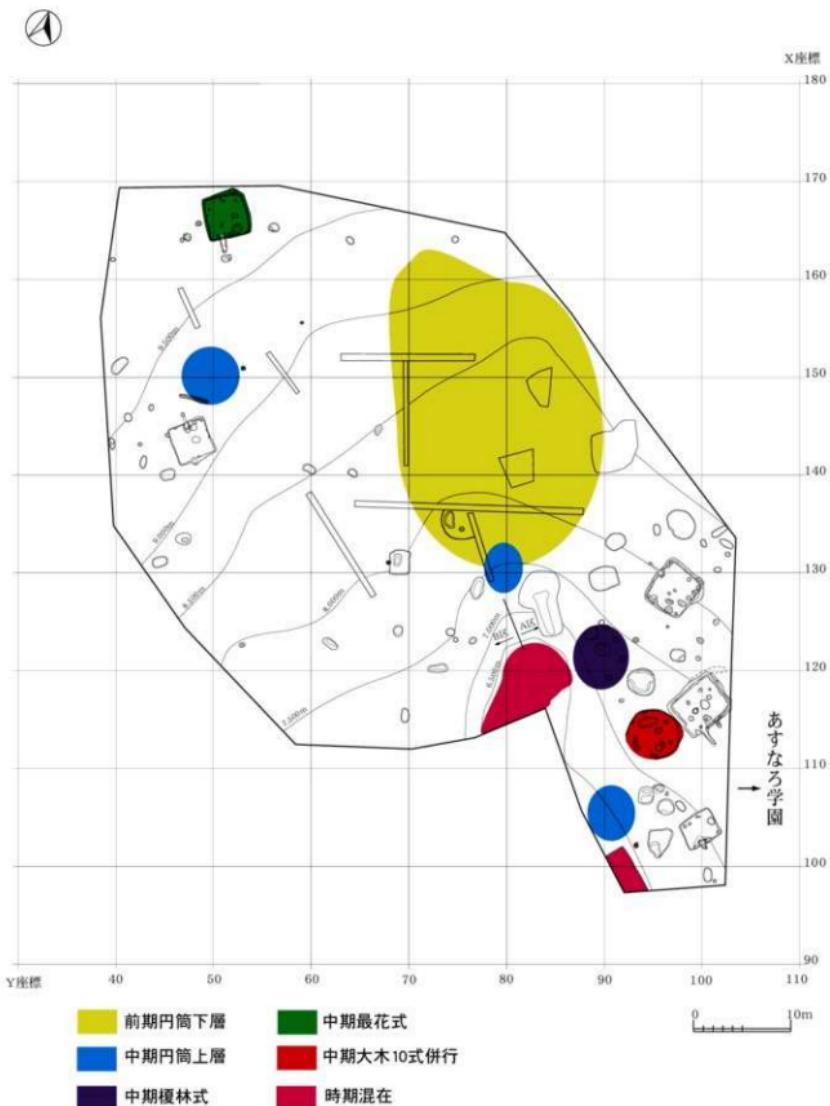
遺構の配置状況等をみてみるとA区についてはコンターラインに平行した形で遺構配置が認められ、隣接するあすなろ学園側の方に向かって遺構が延びていく状況を呈している。出土遺物の状況を照らし合わせてみると大木10式併行期を主体に榎林式の破片資料がごく少量伴うのみで、沢部分やSX-01・02など落ち込みでは複数の時期にまたがる破片が一部廃棄されている状況にあるが流入した資料が多く明確な遺物廃棄ブロックを形成するに至っていない。また、本調査区内からプラスコ状土坑は全く検出しておらず、集落における縁辺部的要素が強い状況にある。B区から検出した遺構は極めて散発的な状況で具体的な検討は難しい状況であるが、最花式が主体であることから時期毎に立地構成が異なっていた可能性が考慮される。

2. 弥生時代以降

出土遺物が該期に属する資料として土坑3基を検出したが明確に該期に帰属した遺構であるとは断言できない。しかしながら、調査区外を含めた本遺跡内では二枚橋式期に土地利用が行われていたものと判断でき、B区内からは出土が認められなかったことから大木10式併行期と同様にあすなろ学園側の方に生活域が存在した可能性が考慮される。

3. 古代

時期判別が可能であった遺構は竪穴建物跡5軒、土坑2基、ピット2基である。縄文時代の遺構と同様A区側がやや密な配置を呈しており、B区に関しては時期の異なる1軒ずつの構成である。第III章第4節



第8図 縄文土器出土分布図

中でも触れたが古代において沢地はほぼ平坦な状況で、緩やかな傾斜地形になっている。遺構観察表でも明白のとおり、本調査区で検出した竪穴建物跡は平面形が長方形もしくは隅丸方形を呈し、長・短軸の比率が長軸1.00に対し8.4～9.6という比率で、時期の古いものほど長軸と短軸に比率に差が生じている。また、柱穴配置については明確なものが少ない状況にあるが、唯一配置の明白であったSI-02を見てわかるようにカマド設置壁寄り側は壁面に近接した形での配置がなされており、さらに配置の変更時点では北東壁側の部分は壁溝上にピットが配置されている。この配置状況は斜面下方に位置するSI-01においても柱穴が3本のみであったが、同一の配置状況を持ち得ており、加えてカマドの主軸がほぼ同一(SI-02についてはカマド2の主軸がSI-01のカマドの主軸と同一)であることから類似性が認められる。壁溝の構築は、床面積が1.5m以上(宇部氏分類の中型※註)の3軒について認められ、ほぼ全周するタイプが1軒(SI-11)、壁面の一角(南西側付近)が断続しているタイプが2軒(SI-02・04)であった。SI-02と04については壁溝の欠落部分が同一であり、SI-04のカマド設置箇所についても最初壁溝が掘り込まれた後にカマドが構築されており、SI-02と04との間には掘削時点での類似性が認められる。溝の掘削痕については腰板・壁柱等の設置のため浅い段状の掘り込みが連続されるタイプが2軒(SI-04・11)、明瞭な段を持たないタイプが1軒(SI-02)であった。焼失していた建物跡が1軒(SI-02)あったが、主柱や腰板に相当する部材の炭化物は検出しており、偶発的な焼失ではなく、廃絶時の意図的な焼失であると判断される。

カマドは地下式・半地下式が認められ、同一建物内の場合地下式から半地下式に変遷しているが、建物間の関係では、半地下式のみのものがかなり新しく新しいという訳ではなく建物の規模などが反映されていた選択性の生じた段階の所産であったと判断される。主軸については南向き(南東方向)、北向き(西北方向)とほぼ対角線上の軸線となっており、季節風の風向(北西・南東)や集落における規範の関係で本市から検出している野木遺跡等の他遺跡での竪穴建物跡との対比においても矛盾しない。南向き北向きを問わず基本的にカマド設置壁面に対し中央より右側に設置されるケースがほとんどで、中央より左手側に設置されたのはSI-02のカマド2のみで改築に関わる可能性が高い資料である。

各建物間の変遷過程については出土遺物の検討を経た上で後述するが遺構の要素(柱穴配置・カマド主軸方位等)は概ね本市内で検出されている古代の竪穴建物跡の系列に即した状況である。

また、本調査区内では精錬鍛冶滓が廃棄された土坑が1基検出しており、集落内で精錬鍛冶については行われていると判断できるが、具体的な跡の検出は認められず、生産状況の検討はできない。

※註 宇部則保 2000「馬鹿川下流域における古代集落の様相」『考古学の方法』pp.25-30

氏は竪穴建物跡の規模を超大(6.0m以上)、特大(4.0～6.0m)、大(2.5～4.0m)、中(1.5～2.5m)、小(1.5m以下)の5区分に分けて記述している。

(木村)

第2節 遺物

1. 繩文時代

縄文時代の土器は、前期の円筒下層式から後期の十輪内式まで認められる。このうち中期に属するものが最も多く、円筒上層式、櫻林式、最花式、大木10式併行の四つの型式が確認された。これらの土器は、遺構内・外から出土しているが、遺構内出土土器については、中期後葉～末葉に属するSI-

03、SC-01・02以外に厳密に該期に帰属するといえる遺構から出土したものは無く、他時期の遺構の堆積土に混入する例も認められる。今回検出された遺構のうち、縄文時代に帰属する遺構はいずれも調査区の端に位置しており、また遺構外出土の土器も少量であり、今回の調査区は縄文時代の主体となる部分から外れていたものと考えられる。

本遺跡の周辺では、南西側の沖館川左岸に位置する三内沢部遺跡（調査時遺跡名三内澤部遺跡）において、縄文時代中期中葉～後葉にかけての集落が検出され、また南側の沖館川右岸に位置する三内丸山（5）遺跡においても、中期末葉を中心とする集落が検出されていることから、本遺跡においても、今回の調査区以外の部分に同様の集落が存在する可能性が考えられる。

以下、各時期の土器の様相を概観する。

(1) 縄文時代前期（図版23-9、図版24-29～34）

古代の建物跡（SI-04）の堆積土に混入する例と、沢部分、遺構外から出土する例が認められる。該期に帰属する遺構からの出土は認められなかった。深鉢形土器の口縁部、胴部の破片資料である。これらは、円筒下層d式に位置づけられるものと考えられる。

(2) 縄文時代中期

①円筒上層式（図版24-35～40）

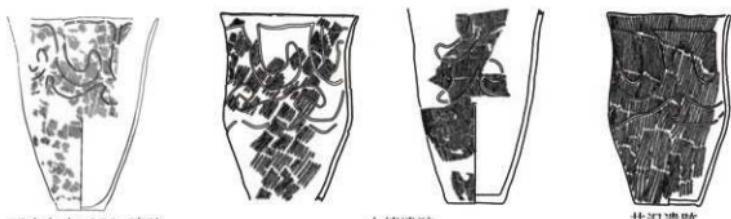
沢部分、北西・南東側の遺構外から出土しており、該期に帰属する遺構からの出土は認められなかった。深鉢形土器の口縁部、胴部の破片資料である。これらは、円筒上層c～d式の範疇に位置づけられるものと考えられる。

②大木系（図版22-2～4、6～7、図版23-8、11、図版24-14～15、27、28、41）

中期後葉～末葉の楓林式、最花式、大木10式併行が確認された。このうち楓林式土器は、遺構外から1点出土したものである。最花式、大木10式併行の土器は、SI-03とSC-01・02埋設土器遺構から出土したものが中心であるが、最花式土器には古代の建物跡（SI-04・11）の堆積土に混入する例も認められる。

最花式土器は、SC-02から出土したものが中心であり、壺形土器（27）の中に、深鉢形土器（28）を入子状に設置した状況で出土している。壺形土器は、頸部が無文の広口壺形を呈し、胴部下半を欠いているものである。またこの個体には頸部と胴部の境に瘤状の貼り付けが施されている。深鉢形土器は、口頸部が内傾し、胴上部に最張部を持つ器形を呈し、底部を欠いているものである。これらはともに正立状態で埋設されており、埋設後の要因で欠損したものではなく、打ち欠いた状態で埋設されたものと考えられる。

大木10式併行に位置づけられる土器は、SI-03とSC-01から出土している。いずれも深鉢形土器であり、この中にはSI-03と約10m南側の地点に位置するSC-01との間で接合するものもある（8b・c）。SI-03土器敷設石窯炉出土のものは、口縁部から胴部にかけての文様施文部分で、SC-01出土のものは、口縁部も含まれるが、大部分が文様施文以下の縄文地文の部分である。SI-03土器敷設石窯炉とSC-01埋設土器遺構は同じ時期に構築され、土器の部位により使い分けしたも

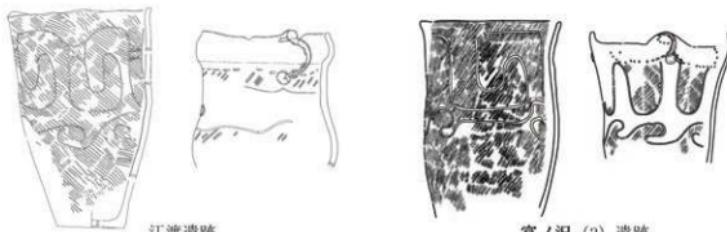


三内丸山（5）遺跡

山崎遺跡

井沢遺跡

J字状文と波濤状文



江渡遺跡

富ノ沢（2）遺跡

J字状文と粘土紐装飾の共伴事例



主なJ字状文土器出土遺跡

第9図 J字状文土器

のと考えられる。

出土した土器の多くは、3～4、8のように、深鉢形を呈するもので、平口縁や、頂部内面に粘土が貼り付けられるものも認められる。文様モチーフは、単節・無節の斜行縄文を地文とし、J字状文（反転させたものを含む）と波渦状文を組み合わせたものが基本的であり、これらのなかにはJ字状文の先が膨らんでいるもの、波渦状文の頂部が直線的に立ち上がるものなどが見られる。J字状文と波渦状文をモチーフとするものは、三内丸山（5）遺跡や山崎遺跡、富ノ沢（2）遺跡、井沢遺跡などでも認められる。

以上のような器形や文様モチーフを持つ土器群のほかに、これらとは異なる器形や文様を持つ個体も確認されている。2は、胴部に丸みを持つキャリバー状を呈するもので、口縁部に粘土紐貼付と刺突、胴部に波渦状文頂部へのボタン状貼付が見られるものである。

このような特徴を持つ土器は、富ノ沢（2）遺跡第58号遺構から出土している。本遺跡出土の2と比較してみると、口縁部の装飾（粘土紐の貼付、刺突）と波渦状文のモチーフが共通している。弥栄平（1）遺跡の報告書（青森県教育委員会 1986）では、中期末葉の土器を第I～III群に分類し、これらの土器群は第I群→第III群への変遷をたどるとしている。第I群はS字状・8の字状のモチーフを持つ土器群で、第II群はA・Bに細分され、第II A群はJ状文やその変形的なものが多く用されるもの、第II B群は方形区画文様を主体にし、一部J状文、波状文の伴う文様で構成されるものとしている。第III群には本遺跡出土の2や富ノ沢（2）遺跡第58号遺構出土土器と同じような波状口縁頂部から垂下させた粘土紐の貼付、粘土紐に沿う刺突が見られるものや、キャリバー状を呈するものを分類している。また、富ノ沢（2）遺跡の報告書（青森県教育委員会 1991）では、弥栄平（1）遺跡の住居の重複関係を分析し、第58号遺構床面上土器群を大木10式併行土器群の古段階として位置づけ、弥栄平（1）遺跡の第I群に併行するものとしている。このように、弥栄平（1）遺跡では、J字状モチーフを持つ土器と粘土紐装飾を持つ土器には時間差があるとしているが、富ノ沢（2）遺跡第58号遺構の出土例は、床面上で異なる属性を持つ土器（第I群・第II B群・第III群）が共存しており、三つの土器群が同時に存在していた可能性を示している。また、本遺跡SI-03では、J字状モチーフを持つ土器が竪穴建物跡の土器敷設石開かから出土し、粘土紐装飾を持つ、キャリバー形の土器が覆土中から出土しており、ある程度の時間差が認められる。

以上のように、J字状文と粘土紐装飾があるキャリバー状の土器については、同時に存在していた可能性も考えられるが、新・旧二つの段階の土器が存在していた可能性も否定できない。

本遺跡では、最花式、大木10式併行期の遺構は調査区の端に位置している。最花式土器が出土したSC-02は調査区北西側丘陵に、大木10式併行の土器が出土したSI-03、SC-01は、沢を挟む形で南東側の低地に位置しており、それぞれの時期で土地選定が異なっていたものと考えられる。これらの遺構は、集落の縁辺部である可能性があり、それぞれの時期の主体となる部分は、最花式期では北西側の丘陵上に、また大木10式併行期では東から南東側の調査区外に存在する可能性が考えられる。

③中期後葉～末葉（図版22-1、5、図版23-10、12、13、図版24-16～26）

前述の各型式に分類できなかったものを一括した。今回出土した縄文土器の大部分が中期に属し、その中でも中期後葉～末葉にかけてのものが主要であるので、ここに一括したものについても、その範疇に属する可能性がある。遺構内出土のものではあるが、古代の建物跡（SI-01・04）の堆積土に混入する例や、該期に帰属するとは言い難い遺構から出土したものも含まれる。いずれも胴部、底部片で、単節の斜行縄文を施文しているものが中心であるが、沈線が施されているものも見られる。また底部片には、

網代痕が見られるものもある。

(3) 縄文時代後期

図示していないが、SX-01・02間で接合する無文の深鉢形土器の胸部が出土している。器面には同程度の摩耗が見られ、ともに流れ込みにより混入した可能性が高いものである。本個体は十腰内I式に位置づけられるものと考えられる。

2. 弥生時代（図版25-45～57）

弥生時代の土器は、遺構内・外からの出土が認められる。遺構内出土土器には、古代の建物跡（SI-01）の堆積土に混入する例や、SK-03・04・05から出土する例が認められるが、この土坑は厳密に該期に帰属するとは断言できないものであり、出土土器に関しては、あくまで上限資料としての取り扱いである。またSK-03・04間で接合した53は、SK-04出土部分に比較して、SK-03出土部分の断面の磨耗の度合いが強いことから、SK-04に含まれていたものがSK-03に混入したものと考えられる。土器は、鉢形土器と壺形土器が出土しており、いずれも破片資料である。出土した弥生土器は、10点ほどであり、遺構に伴うものと断言できる出土状況ではないことから、該期の主体は今回の調査区以外に存在する可能性がある。

これらの土器は、二枚橋式に位置づけられるものと考えられ、青森市内においては、類例の少ない遺物のひとつである。

（相馬）

第3節 古代の遺物と竪穴建物の変遷について

第V章でも触れたが本調査では総出土破片数2,804点中約7割を超える1,974点の古代の土器が出土した。そのうち1,232片が接合し、174資料が接合個体資料となった。本来であるなら前節の遺物の中で詳述すべきところであるが、出土量が全体の7割を超え、第1節でも触れたとおり検討すべき点が多々あるため、節を分け詳述することとする。

第11表は本調査における出土資料について個体識別法および口縁部残存計測法を用いた測定結果である。黒色土器については、SI-02およびSI-11から非クロロの柾が出土しているが、口縁部が欠損していたため、純粹な組成比を反映していないが、全体的な量比についてはほぼ反映されている状況であると判断される。

この中で、特筆すべき点は「①黒色土器の組成が圧倒的に少ない。②須恵器の器種が壺に限定される。③土師器についても器種のバリエーションが壺・甕・小甕・鉢に集約されている。」という点である。黒色土器については県南の三八地方では供膳具としての非クロロ壺の段階から伝統的に用いられ、9世紀前半代のロクロ土師器導入以後も内黒を主体に10世紀中葉段階まで根強く定量残り続けている。津軽地方においても浅瀬石川流域の8世紀代から9世紀、さらには10世紀に継続する集落跡では三八地方と同様にロクロ導入後も定量黒色土器が存在し続けている。その一方、9世紀第4四半期以降五所川原窯の生産体系を担った集落については、黒色土器の組成比が極端に少なく、非黒色の土師器柾・皿が伴う集落が存在している。

本市においても市内南部では五所川原窯開窯（9世紀第4四半期）以前に集落が開始されている新町野

遺跡・野木遺跡では10世紀以降組成比が極端に減少（50%→14%）する例も認められ、在地での非黒色土師器の生産が行われており、全体的に組成の中で黒色土器が少ない状況にあるが、少ないながらも10%を超える組成比を占めている¹⁾。その一方、五所川原窯開窯以後に集落が開始した雲谷山吹（5）～（7）遺跡では、五所川原産の須恵器と共に非黒色土師器の供給を受けており、黒色土器の組成が0.08%と極めて少ない状況にある²⁾。

東部地区の宮田館遺跡では、三八地方と同様に黒色土器が定量存在し続けており、10世紀中葉を越えた時点でも存在している³⁾。本遺跡の所在している西部地区について概観してみると南部地区と同様に黒色土器が主たる組成を占めないが、少ないながらも定量存在する傾向にある。

本遺跡から出土した土器については、器種のバリエーションが少なく、須恵器については長頸瓶や甕が伴わず、回転糸切による切離しが行われている壺のみで、土師器の壺についても底部のヘラケズリによる再調整が行われず、底径幅が狭い楕形の器形が多数を占める。その一方、煮沸具の甕は、浅い段状の頸部を持ち、調整はハケメを基本とし、外面体部についてはヘラミガキが施されるなど、8世紀代からの伝統的手法が多用される土器が主体を占めている。単独の土器に見られる構成要素（器形・調整手法等）としては比較的古手の様相であっても、それが全体を表象する訳ではない。本遺跡における時期的位置づけについては全体的なセット関係や造構間の関係、調整手法の要素等を検討した上で、提示することとする。

1. 種別毎の傾向

A. 黒色土器

供膳具的な壺形を呈する資料はS I - 0 4出土の破片資料1点（第10図）のみで、それ以外は楕形の非ロクロ黒色土器2点で、本遺跡内では主たる組成を占めていない。図版追加資料として第10図に掲載したS I - 0 4床面出土の壺は口径14.0cmを測る。全体的に摩耗しており特に外面側の摩滅が著しい。粘りに欠ける胎で、ザラザラした質感を有する。石英や輝石等が微量含まれるのみで目立った混入物がない。口縁部直下にはルーズな横走沈線が一条施されているが、段状を意識している訳ではなく形骸化している状況である。内面は黒色処理され横方向のヘラミガキが施されており、外面も黒色化しているが明瞭なヘラミガキ痕は存在しない。

口縁部が欠損している2資料のうちS I - 0 2の堆積土から出土した資料（図版26-72）は、外面の底部下半まで精緻に磨かれており、S I - 1 1出土の資料（図版30-109）は非ロクロでありながらロクロ橈を意識した作り出しで、高台部の作りが回転ナデによるものである。外面の黒色化は口縁部付近が中心で、ヘラミガキ調整についても黒色化している箇所を中心に行っている状況で、本市におけるロクロ黒色土器と同様の調整が行われている。

量的に極端に少ない状況にあり、非黒色土器においてロクロ使用が認められるのに対し、黒色土器については非ロクロのみであり、アンバランスな状況である。竪穴建物跡の廃絶時点で、意図的な焼失に伴う時点で廃棄が行われている状況等もあり、①集落内で次段階へ移るにあたって廃棄せず持ち出したまま、次の段階でも使用が継続されているか、あるいは②黒色土器を明確に断絶するような状況であったのか、③それとも、もともと黒色土器を受容しない集落であった可能性等も考慮されるが、本調査区内の部分から黒色土器の廃棄ブロックは検出しておらず、本調査区内から検出した竪穴建物跡内からは前段階の造構から持ち出されたと仮定される黒色土器がほとんど出土しない状況であることを踏まえると、黒色土器の絶対量が少ない可能性がある。しかし、集落そのものはあすなろ学園側に延びる傾向が

全体

種別	個体数	%
須恵器	1,9333	7.99
土師器	22,1753	91.73
黒色土器	0.0666	0.28
合計	24,1752	100

須恵器

種別	個体数	%
环	1,9333	100
甕	0	0
壺	0	0
小甕	0	0
計	1,9333	100

土師器

種別	個体数	%
环	6,9832	31.49
甕	12,5338	56.52
小甕	2,3582	10.63
鉢	0.3	1.35
計	22,1752	99.99

黒色土器

種別	個体数	%
环	0.0666	100
甕	-	-
計	0.0666	100

SI-01

種別	個体数	%
須恵器	0.6416	31.48
环	0.6416	100
甕	-	-
土師器	1,3967	68.52
环	0	0
甕	0.3667	15.89
小甕	1	43.32
鉢	0.3	13
黒色土器	0	0
計	2,3083	100

SI-02

種別	個体数	%
須恵器	1,2917	13.89
环	1,2917	100
土師器	8,0079	86.11
环	1,7166	21.44
甕	5,6081	70.03
小甕	0.6832	8.53
黒色土器	0	0
計	9,2996	100

SI-04

種別	個体数	%
須恵器	0	0
土師器	3,8334	98.29
环	3,225	84.13
甕	0.4667	12.17
小甕	0.1417	3.69
黒色土器	0.0666	1.707
环	0.0666	100
計	3.9	99.99

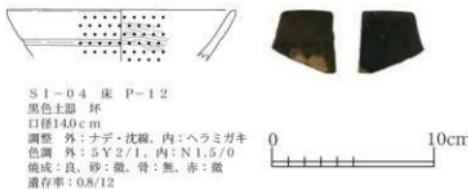
SI-10

種別	個体数	%
須恵器	0	0
土師器	2,6591	100
环	0.525	19.74
甕	1,6341	61.45
小甕	0.5	18.8
黒色土器	0	0
計	2,6591	99.99

SI-11

種別	個体数	%
須恵器	0	0
土師器	5,5166	100
环	1.35	24.47
甕	4,1333	74.92
小甕	0.0333	0.6
黒色土器	0	0
計	5,5166	99.99

第11表 土器組成表



SI-04 床 P-1 2

黑色土器 环

口径14.0cm

調整 外：ナデ・沈線、内：ヘラミガキ

色調 外：5Y 2/1、内：N 1.5/0

焼成：良、砂：微、骨：無、赤：微

遺存率：0.8/12

第10図 図版追加資料

あるため、本調査区内での様相が集落全体で裏付けられるかは検証不可能である。

B. 須恵器

回転糸切の坏のみの出土であった。A区のS I - 0 1と0 2の2軒のみの出土でS I - 0 2の資料については破片化した状態での廃棄資料も含まれる。出土位置に偏りがある傾向にある。この点は器種のバリエーションの少なさや黒色土器の量比の少なさとの関連性が考慮される。

いずれも胎土の特徴や調整手法から明らかに非五所川原産と認定できる資料で、黒色土器や土師器等の状況を踏まえても、本調査区内から出土した遺物は五所川原窯開窯以前の所産であると判断される。

指数が算出できた資料については2点のみで底径指数が4 6. 7と4 9. 6と底径幅が広く、器高指数は3 6. 4と4 2. 1と本市を含めた津軽地方で出土する資料としてはやや浅身のタイプと普遍的な範疇に入るるものであり、土師器坏と同様の状況である。体部に明瞭な稜段を有し、内面についても段を意識した作りで、口縁部がやや軽くつまみ返すように外反している状況にある。9世紀第3四半期～第4四半期に操業した海老沢窯⁴⁾との関連が考慮されるが、有台皿が既に出現している段階であるため、皿の出現以前である9世紀第3四半期併行が相当であると考えられる。

C. 土師器

既にロクロ土師器の導入以降の段階の資料が含まれるが、煮沸具については外面体部にヘラミガキによる調整が施されるものも含まれる。本調査出土の古代の土器の約9割を占める関係上器種毎に細別して記述する。

a. 壺

全ての竪穴建物跡から出土したが、破片資料や欠損品のみの建物跡もあり、全体的な比較はできない。供膳具的な形態を呈しておらず楕形で、器高指数4 0を越える深身のものが多い。B区のS I - 1 0出土資料およびS I - 1 1出土資料の一部は直立気味に立ち上がる形状である。底部から体部下半にかけてやや膨らみを持ち立ち上がる形状で、口縁部はつまみ返すように外反させているものが多い、底径指数は浅身の図版2 8 - 8 9を除いた資料は4 0を越える。底部側縁はヘラケズリによる再調整は行われていない。

非ロクロの資料についてはS I - 1 0からやや大型の口縁部資料が1点のみ出土している。内外面ともヘラミガキによる調整であり、外面体部下半は縦方向のヘラケズリを基調としている。また、ロクロ土師器においても底部円柱で、体部が巻上げ成形⁵⁾の資料が1点（図版3 0 - 1 0 8）出土しており、ロクロ技術の過渡期の資料であるといえる。

b. 豆

長胴豆が主体で、頭部に浅い段を有するものや沈線が施されるものなど古手の要素を持ち得る資料も含まれる。その一方、9世紀後半の集落で一般的に出土する外面体部調整がヘラケズリのものも含まれている。

ロクロ使用は小豆のみで、この口縁部形態は秋田城下では9世紀第2四半期を主体に第3四半期まで存在する形態である⁶⁾。本遺跡出土の資料についても須恵器坏の年代観と矛盾しておらず、概ね該期に帰属しているものと考えられる。また、その時点ではロクロ豆の大型品は流通していない状況にあった可能性が考慮される。

非ロクロの甕についてはA区のS I - 0 2とB区のS I - 1 0出土資料は頭部幅が長い傾向にある。口唇部の形状は丸縁・平縁・先細りのもの等多種多様ではある。体部の調整についてはハケメ調整が主体になるもの、ミガキ調整が主体になるもの（前段のハケメ調整が残存して観察されるケースが多い）、ヘラケズリ調整が主体になるものがあり、各調整が混在するものも存在する。ヘラミガキとヘラケズリが混在した調整は、三八地方では根城跡で8世紀後葉に位置づけられるS I 2 2 1¹⁷から出土している長胴甕に既に出現しているが、本遺跡出土資料についてはヘラミガキがかなり粗雑な状態で、ヘラミガキのみの土器同様体部上半を斜め方向に磨く傾向が強い。

平行沈線については、頭部に二条のものの（図版27-80、28-82、32-123）、と五条以上のものの（図版27-78、28-81）が出土したが、一条のものは小甕に分類した1点（図版30-103）のみである。また、平行沈線文にかなり崩れた鋸歯文が施される事例もあり、9世紀以前の伝統的な手法が用いられているが、S I - 0 4から出土した黒色土器破片に見られるように、伝統的な手法である境界性が形骸化した状況にあると考えられ、平行沈線文についても宇部氏が9世紀後半に位置づけている根城跡S I 1 0 8¹⁸や田面木平遺跡第8次調査A地点S I 2 2¹⁹出土資料ではロクロ甕と共に共存していることや、鋸歯状の崩れたタイプは本市西部地区に所在する近野遺跡60号住居跡²⁰から出土していることから9世紀代にも残存していてもなんら矛盾はない。

ヘラケズリが主体に用いられるのはS I - 0 4およびS I - 1 1出土のものが量的に多く、小甕についてはヘラミガキ手法より多用される傾向にある。頭部の幅が短くなり、「く」字状（図版29-92、32-120など）や本市において9世紀末～10世紀代に盛行する器形につながるタイプ（図版32-121）など新段階の要素が強い。ただし、内面の調整はハケメ（木口が極目）がまだ残存しており、一部ヘラ（板）ナデ（板目）のものが存在し始める。降下火山灰にT o-aが欠落していたS I - 1 1に出土がまとまる傾向がある。S I - 1 1は同位置にカマドを3回作り直した縦続幅の長い竪穴建物跡であるため、T o-a火山灰降灰時にはまだ建物が機能していた可能性も否定できない。T o-a火山灰降灰時には五所川原窯は既に開窯しており、廃棄資料の中に五所川原窯の製品が流入してもおかしくはない状況であるが、従来的集団の調査区外への展開の際の持ち出しという要素も踏まえ、使用不可になった9世紀後葉主体の資料の廃棄群として現時点では解釈したい。

2. 竪穴建物の変遷

竪穴建物跡ごとの遺物の構成表は第11図のとおりである。前述の要素等を踏まえ、土師器甕については調整手法の代表的なものを主眼として細別している。遺構間接合資料については各区とも近接する遺構間で接合関係を持っている。提示に際し、図版と対応させ表示している。

表を見て明白であるが、前段で記述したとおり、A：須恵器はS I - 0 1・0 2に集約される。B：土師器ロクロ坏は各建物跡から出土している。C：土師器甕で古相の調整手法（ヘラミガキ・ハケメ）はS I - 0 2・1 0にまとまりを持ち、新相の調整手法（ヘラケズリ）は、S I - 0 4・1 1にまとまりを持つ。

遺構の状況として、a：S I - 0 1と0 2は類似した軸線・柱穴配置を呈する。S I - 0 2はカマドが位置を変えを含め3段階存在する。b：S I - 0 4はカマドが北向きの地下式ではあるが、構築時点の壁溝の構築方法がS I - 0 2と類似しており、カマドは壁溝の掘削後位置決めがなされている。c：S I - 1 0とS I - 1 1は廃絶後の堆積土中の火山灰の状況が異なり、S I - 1 0は明白にT o-a火山灰降灰前と断言できるが、近接しているS I - 1 1はB-Tm火山灰のみで、堆積位置についてもS I - 1 0の

方が、埋没が進行した状況で堆積している。d : S I - 1 1 はカマドが同位置に3回作り替えが行われており、継続幅がある。

以上の条件を考慮した上で、本調査で検出した遺構の変遷について考察する。

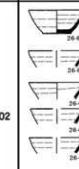
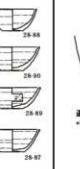
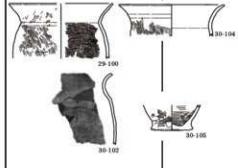
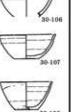
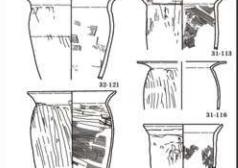
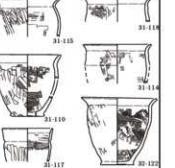
A区 (S I - 0 1 • 0 2 • 0 4)

S I - 0 1 と S I - 0 2 の構築開始の順番について詳細は構築時点の床下構造から帰属時期の明白な遺物が出土していないため、詳細は不明である。カマドの構造は S I - 0 1 が南向きの半地下式1基、S I - 0 2 が南向きの地下式1基、半地下式2基、S I - 0 4 が北向きの地下式1基という状況である。S I - 0 2 についてはカマドの改築等も踏まえて継続幅があったことが認定できる。

前述のaの要素、すなわち建物の構造として S I - 0 1 と S I - 0 2 についてはカマドの主軸の共通性と平面形の共通性および柱穴配置の類似性があり、S I - 0 2 と S I - 0 4との間には前述のbの特徴がある。S I - 0 1 と 0 2 については須恵器壺の出土が共通しており、また煮沸具においても S I - 0 1 カマド出土の図版2 6 - 6 1 と S I - 0 2 カマド等出土の図版2 6 - 7 3 が類似した口縁部の外反を呈していることから、2棟単位というセット関係を認定できる。また、S I - 0 2 Pit 8・9等出土資料と S I - 0 4 床直・堆積土資料と S I - 0 1 堆積土出土資料が遺構間接合した図版2 9 - 9 4 の土師器甕の体部～底部資料の関係と、S I - 0 4 のカマド支脚相当位置から出土した図版2 9 - 9 5 の土師器甕の体部～底部資料が S I - 0 2 の堆積土中出土資料との遺構間接合関係があつたことから S I - 0 1 の廃絶時期については、S I - 0 2 の床面付近に介在した遺物が破片化して廃棄・流動が起つた時点では既に埋没過程が進行中の状況であり、S I - 0 4 のカマド構築時点では S I - 0 2 の床面付近に遺物が埋まる状況が可能であったと判断できる。よって、S I - 0 1 は S I - 0 2 と併存し、S I - 0 1 は S I - 0 2 よりも先に廃絶し、S I - 0 2 は S I - 0 4 と廃絶の前後を含め併存した可能性がある。S I - 0 2 はヘラミガキやハケメによる古相を示す遺物が多量出土しているが、床面直上から出土した甕底部（図版2 8 - 8 3）はヘラケズリ調整によるものであり、意図的な焼失直後に廃棄された須恵器壺（図版2 6 - 6 5 ~ 6 9）や土師器壺（図版2 6 - 7 0）、さらに堆積土中から出土したロクロ小甕（図版2 8 - 8 6）から少なくとも9世紀第3四半期には廃絶が完了している。S I - 0 4 は古相を示す黒色土器壺が破片で出土しているが、本遺構の帰属時期を決定するものではなく、むしろ S I - 0 2 出土の甕と併せ、遺跡全体の上限時期の判断材料となる。S I - 0 2 のカマドの作り替えの要素も踏まると9世紀前半代には本遺跡で集落が形成されたと判断できる。S I - 0 4 はピットの堆積土中に T o - a 火山灰が介在していることや、床直出土の図版2 9 - 9 2 と S I - 1 1 堆積土出土の図版3 2 - 1 2 0との間に器形と調整手法の共通性が認められることから9世紀第3～4四半期に営まれた建物跡であると考えられる。S I - 0 1 • 0 2 廃絶時点では須恵器壺を断絶しているが、S I - 0 4 では土師器壺を断絶した状況にあり、欠落した遺物については、次段階への持ち出しの可能性¹¹⁾は考えられるが、現時点では検証不可能である。

B区 (S I - 1 0 • 1 1)

構築の順番については不明である。カマドの構造は S I - 1 0 が北向きの地下式1基、S I - 1 1 は南向きの半地下式が3回改築されており、S I - 1 1 の方が継続幅があり、前述のc・dの要素から遺構から廃絶の順番として S I - 1 0 の方が S I - 1 1 より早く廃絶されているという関係が導きだせ

	黑色圓環	黑色土器环	黑色土器柄	直口环	直口环	直口环(内面ハケテ)	直口环(外面ミガキ仕上)	直口环(外面ミガキ仕上-北面)	直口环(外面ハケテ)	直口小窓(外面ハケテ)	直口小窓(外面ハケテ)	直口小窓
SI-01	 26-58			 26-59	 26-62 直縫間接合 +SI-02	 26-43	 26-64 (ミハケテハラズリ)	 26-63				 26-60
SI-02	 26-45 26-46 26-47 26-48 26-49	 26-72		 26-70 26-71 26-72 26-73 26-74 26-75 26-76 26-77 26-78 26-79 26-80 26-81 26-82 26-83 26-84 直縫間接合 +SI-01	 27-75 (ハケメミガキ-北面) 27-76 27-77 27-78 27-79 27-80 27-81 27-82 27-83 27-84 27-85 27-86 27-87 27-88 27-89 27-90 27-91 27-92 27-93 27-94 直縫間接合 +SI-01-02	 26-85	 26-86					 26-88
SI-04		 28-87 附加資料		 28-88 28-89 28-90 28-91 28-92 直縫間接合 +SI-02					 29-92 直縫間接合 +SI-02	 29-93 直縫間接合 +SI-01-02	 29-94	
SI-10				 29-99 29-97 29-98	 29-100 29-101 29-102 29-103 29-104 29-105 29-106 29-107 29-108 直縫間接合 +SI-11	 30-101 直縫間接合 +SI-11					 30-102	
SI-11				 30-106 30-107 30-108	 31-111				 32-120 32-121 32-122 32-123	 31-113 31-114 31-115 31-116 31-117 31-118 31-119 31-120 31-121 31-122	 31-110 31-111 31-112 31-113 31-114 31-115 31-116 31-117 31-118 31-119 31-120 31-121 31-122 0 20cm	

第 11 図 積穴建物間遺物構成図

る。

S I - 1 0 の出土遺物の中で、床面・カマド煙道・堆積土から出土した図版 3 0 - 1 0 1 は、S I - 0 2 カマド新出土の図版 2 8 - 8 2 と類似した調整手法が施されており、頸部の幅が S I - 0 2 出土資料に比べ短く、口縁端部の作り出しも精緻ではなく、また、体部との境界部分に沈線が施されないなど、型式的に新相の様相を持つが、他の煮沸具についても口縁部が幅を持ち、平行沈線やハケメ・ミガキ調整が主に施されるなどの特徴を有し、S I - 0 2 に後続した時点では建物が機能していると判断できる。廃絶時期についてはカマド 1 基のみの状況であることから継続幅が短い可能性も否定できず、ヘラケズリ手法の遺物が伴わない S I - 0 2 よりも古い段階で廃絶した可能性が高い。S I - 1 1 はカマド堆積土や建物跡堆積土中にハケメ調整やミガキ調整の土師器甕の混入が認められるが、主たる段階は外面ヘラケズリ主体の段階に建物跡が機能している。出土遺物についても概ね 9 世紀第 3 ~ 4 四半期併行のものが多く、S I - 0 4 と併行した竪穴建物跡であると判断できる。ただし、廃絶時期については S I - 0 4 より新相の土師器甕（図版 3 1 - 1 1 9 等）も含まれることと、遺構の堆積土中に T o - a 火山灰が検出されなかったことから 1 0 世紀初頭まで機能した可能性も否定はできない。

廃絶時点での持ち出しの可能性については A 区と同様であり、本調査の成果としては検証不可能である。

	9 C 1	9 C 2	9 C 3	9 C 4	10 C 1	
S I - 0 1		----				
S I - 0 2	-----				
S I - 0 4			-----		
S I - 1 0	---	-----				
S I - 1 1			-----	-----		

To-a

B-Tm

第 12 表 竪穴建物跡消長表

註

- 青森市教育委員会 2001『野木遺跡発掘調査報告書 II』p.571
- 青森市教育委員会 2003『雲谷山吹（4）～（7）遺跡』pp.249-252
- 青森市教育委員会 2003『市内遺跡発掘調査報告書 11』pp.27-68、2004『市内遺跡発掘調査報告書 12』pp.30-97
なお、宮田館遺跡の青森市教育委員会調査区の統括については次年度報告予定である。
- 秋田県教育委員会 1950『城下手遺跡緊急発掘調査報告書・海老沢窓跡緊急発掘調査報告書』
- 福田健司 1990『古代末期に頭角を現す土器について』『シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」資料集』pp.173-176
- 秋田市教育委員会伊藤武士氏のご教示による。
- 宇部則保 2001『青森県東部の土器変遷』（検討会資料）
- 前掲註 7)、八戸市教育委員会 1983『史跡根城跡発掘調査報告書 V』
- 前掲註 7)、八戸市教育委員会 1997『八戸市内遺跡発掘調査報告書 9』
- 青森県教育委員会 1975『近野遺跡発掘調査報告書 II』
- 前掲註 1) 野木遺跡で検出した竪穴建物（住居）跡のうち、重複関係のある S I - 9 1 ~ 9 3 の建物跡の中で、五所川原産須恵器が一括して廃棄されていたのはもともと新しい S I - 9 1 のみで、遺構の廃棄時期と合致しない遺物構成であった。須恵器そのものは様々な転用が行われ使用年代に幅があるケースが多くある。

(木村)

引用参考文献

- 青森県教育委員会 1975『近野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第22集
青森県教育委員会 1975『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第25集
青森県教育委員会 1976『黒石市牡丹平南遺跡・浅瀬石遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第26集
青森県教育委員会 1978『青森市三内遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第37集
青森県教育委員会 1978『三内澤部遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集
青森県教育委員会 1982『山崎遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第68集
青森県教育委員会 1984『和野前山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第82集
青森県教育委員会 1984『蘿窟遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第84集
青森県教育委員会 1986『弥栄平(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第98集
青森県教育委員会 1988『李平下原安原遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第111集
青森県教育委員会 1991『富ノ沢(1)・(2)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第133集
青森県教育委員会 1991『富ノ沢(2)遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第137集
青森県教育委員会 1994『三内丸山(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第157集
青森県教育委員会 1998『岡町(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第232集
青森県教育委員会 1998『隠川(4)遺跡・隠川(12)遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第244集
青森県教育委員会 1999『三内丸山(6)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第257集
青森県教育委員会 1999『三内丸山(5)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第269集
青森県教育委員会 2001『安田(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第303集
青森市教育委員会 1962『三内塙跡遺跡調査概報』青森市の文化財1
青森市教育委員会 2001『野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』青森市埋蔵文化財調査報告書第54集
青森市教育委員会 2002『市内遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第64集
青森市教育委員会 2003『雲谷山吹(4)～(7)遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第65集
青森市教育委員会 2003『市内遺跡発掘調査報告書11』青森市埋蔵文化財調査報告書第69集
青森市教育委員会 2004『市内遺跡発掘調査報告書12』青森市埋蔵文化財調査報告書第74集
秋田県教育委員会 1950『城土手遺跡緊急発掘調査報告書・海老沢窯跡緊急発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第32集
五所川原市教育委員会 2003『五所川原須恵器窯跡群』
平賀町教育委員会 1976『井沢遺跡』平賀町埋蔵文化財調査報告書5
若美町教育委員会 1987『西海老沢遺跡発掘調査報告書』
日本考古学協会 1997年度秋田大会実行委員会 1997『蝦夷・律令国家・日本海』
岩見誠夫・船木義勝 1985「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」『秋大史学』pp.1-27
宇部則保 2000「馬淵川流域における古代集落の様相」『考古学の方法』pp.25-30
宇部則保 2002「東北北部型土器にみる地域性」『海と考古学とロマン』pp.247-265
小笠原雅行 2002「最花式土器」『難敵』『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第7号 pp.55-60
齋藤淳 2001「津軽海峡領域における古代土器の変遷について」『青森大学考古学研究所研究紀要』第4号 pp.1-29
坂本真弓 2002「沢部型複式炉の現在」『海と考古学とロマン』pp.83-99
塙本浩司 2002「擦文土器の編年と地域差について」『紀要』第17号 pp.145-184 東京大学大学院人文社会系研究科・
文学部考古学研究室
成田滋彦 1985「東北地方北部の大木10式土器の周辺—青森県の事例を中心に—」『奥南』第3号 pp.19-32
成田滋彦 2003「最花式 一在地式土器群の様相—」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第8号 pp.1-20

まとめ

江渡遺跡は、青森市大字石江字江渡に所在する遺跡で、標高6～10m上に立地する。

遺跡は、市西部地区の比較的早い時期に住宅地となったエリアに位置し、周辺には笹森沼等の沼地がある。緩やかな丘陵が幾重にも広がっていることから、元々は小河川に開拓された丘陵地であったことがわかる。

発掘調査は、民間の分譲宅地造成に伴い急速平成15年8月1日～9月5日までの1ヶ月強の期間で3,116m²を実施した。本調査範囲については平成15年度に青森市教育委員会が実施した市内遺跡発掘調査事業内で範囲確認調査を実施しており、調査必要範囲を設定している。

調査の結果、竪穴建物跡9軒、土坑37基、ピット26基、埋設土器遺構2基、焼土状遺構2基、溝跡1条、その他の遺構4基を検出した。出土遺物は、縄文時代前期末から後期、弥生時代、古代の土器や石器・土製品・石製品・鉄滓が出土している。

縄文時代は標高6.5～7m付近から中期末葉の大木10式併行期の竪穴建物跡1軒、埋設土器遺構1基が検出し、集落の縁辺部の様相を呈することが判明した。建物跡の炉は土器片敷の石窯炉で、本遺跡から直線距離で約1km離れた三内沢部遺跡では大木9式期の石窯炉を持つ集落が存在しており、付近には同様の集落が展開している可能性がある。また、標高9.2m付近からは前段の最花式期の埋設土器遺構1基を検出しており、縄文時代中期末葉時点では集落が分散して展開していた状況が本遺跡内でも反映されている。

古代は9世紀前半～後半にかけての集落跡の一部を検出した。これまで東部地区の海岸に近いエリアでは、本市における比較的古い資料が出土していたが、市街地が宅地化されて以降、遺跡範囲の確認や発掘調査の事例がなく、もっぱら住宅のない山間部での発掘調査事例が蓄積してきた状況にあった。

山間部中心の発掘調査は、9世紀後半以降津軽地域全体の集落数の増加に影響された集落跡中心の調査となり、その前段階は津軽地域では浅瀬石川流域に求めるような状況が長らく続いてきた。

今回の調査結果はその前段について散発的ではあるが、再検討するきっかけとなり得る資料を得ることができた。今後、類似した調査が増加する際の一助となれば幸いである。

おりしも、東北新幹線八戸新青森間の工事が市内各地で進行中で、埋蔵文化財包蔵地の発掘調査も平成16年度から本格的に大規模に実施され、本遺跡と隣接した石江遺跡周辺の発掘調査が青森県埋蔵文化財調査センターによって実施される予定である。類似した事例等が今後蓄積されることが期待される。

最後に、開発協議の時点から本調査実施にあたりご協力をいただいた（株）大進建設には埋蔵文化財保護の理念を十分ご理解いただいた次第で、深くお礼申しあげます。

（木村）

報告書抄録

ふりがな	えどいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	江渡遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第75集							
編著者名	木村淳一、相馬俊也、松橋智佳子							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22-5 Tel 017-734-1111							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (JGD2000)	東経 (JGD2000)	調査期間	調査面積 (m ²)	調査因
え 江 渡	あおもりしおねあざ 青森市大字 いしまあざえど 石江字江渡 104-2ほか	市町村 02201	遺跡番号 163	40° 49' 16"	140° 41' 64"	20030801 ～ 20030905	3,116	分譲宅地 造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
江 渡	集落跡	縄文 平安	竪穴建物跡 土坑 ピット 埋設土器遺構 焼土状遺構 溝跡 その他の遺構	9軒 37基 26基 2基 2基 1条 4基	縄文土器 石器 土師器 須恵器 鉄製品 鉄滓 土製品 石製品			

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962年『三内丸山遺跡調査報告』		第38集 1998年『野木遺跡発掘調査報告書』
"	2	1965年『四ツ石遺跡調査報告』		第39集 1998年『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	3	1967年『下清水遺跡発掘調査報告』		第40集 1998年『牧野遺跡発掘調査報告書』
"	4	1970年『三内丸山遺跡調査報告』		第41集 1998年『野木遺跡発掘調査報告書』
"	5	1971年『野木と鶴岡遺跡報告書』		第42集 1998年『熊沢遺跡発掘調査報告書』
"	6	1971年『下清水遺跡発掘調査報告書』		第43集 1999年『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	7	1971年『大庭遺跡発掘調査報告書』		第44集 1999年『忍野(2)遺跡発掘調査報告書』
"	8	1973年『森内遺跡発掘調査報告書』		第45集 1999年『大庭野遺跡発掘調査報告書』
		1979年『弘次遺跡』		第46集 1999年『新町野・野木遺跡発掘調査報告書』
		1983年『伊戸山遺跡調査報告書』		第47集 1999年『仙台遺跡発掘調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983年『山野跡』		第48集 2000年『熊沢遺跡発掘調査報告書』
"		1985年『長森遺跡発掘調査報告書』		第49集 2000年『鶴山遺跡発掘調査報告書』
"		1986年『田代水野遺跡発掘調査報告書』		第50集 2000年『大牧野遺跡発掘調査報告書』
"		1987年『奥内藤跡発掘調査報告書』		第51集 2000年『塙峠(1)・雪谷(4)・吹(3)遺跡発掘調査報告書』
"		1988年『三内丸山遺跡発掘調査報告書』		第52集 2000年『大沢・野田(1)遺跡調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書				第53集 2000年『市内遺跡発掘調査報告書』
"	第16集	1991年「吹(1)遺跡発掘調査報告書」		第54集 2001年『新町野遺跡発掘調査報告書』
"	第17集	1992年『埋蔵文化財出土物調査報告書』		第55集 2001年『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	第18集	1993年『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』		第56集 2001年『鶴山遺跡発掘調査報告書』
"	第19集	1993年『市内遺跡発掘調査報告書』		第57集 2001年『鶴山遺跡発掘調査報告書』
"	第20集	1993年『牧野遺跡発掘調査報告書』		第58集 2001年『大沢・吹田(1)遺跡発掘調査報告書』
"	第21集	1994年『市内遺跡詳細分布調査報告書』		第59集 2001年『市内遺跡発掘調査報告書』
"	第22集	1994年『小・三内丸山遺跡発掘調査報告書』		第60集 2002年『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	第23集	1994年『三内丸山(2)・小・三内丸山遺跡発掘調査報告書』		第61集 2002年『大沢・野田(1)遺跡発掘調査報告書』
"	第24集	1995年『奥内藤跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』		第62集 2002年『鶴山遺跡発掘調査報告書』
"	第25集	1995年『市内遺跡詳細分布調査報告書』		第63集 2002年『鶴山遺跡発掘調査報告書』
"	第26集	1995年『塙峠(2)遺跡発掘調査報告書』		第64集 2002年『市内遺跡発掘調査報告書』
"	第27集	1996年『雪谷(1)遺跡発掘調査報告書』		第65集 2003年『雪谷(1)・吹(4)・吹(7)遺跡発掘調査報告書』
"	第28集	1996年『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』		第66集 2003年『鶴山遺跡発掘調査報告書』
"	第29集	1996年『市内遺跡詳細分布調査報告書』		第67集 2003年『深沢(3)遺跡発掘調査報告書』
"	第30集	1996年『牧野遺跡発掘調査報告書』		第68集 2003年『近野遺跡発掘調査報告書』
"	第31集	1997年『市内遺跡詳細分布調査報告書』		第69集 2003年『市内遺跡発掘調査報告書』
"	第32集	1997年『塙峠(1)遺跡発掘調査報告書』		第70集 2003年『小牧野遺跡発掘調査報告書』
"	第33集	1997年『野町野遺跡発掘調査報告書』		第71集 2004年『鶴山遺跡発掘調査報告書』
"	第34集	1997年『忍野(2)遺跡発掘調査報告書』		第72集 2004年『仙台遺跡発掘調査報告書』
"	第35集	1997年『牧野遺跡発掘調査報告書』		第73集 2004年『新町野遺跡発掘調査報告書』
"	第36集	1998年『塙峠(1)遺跡発掘調査報告書』		第74集 2004年『市内遺跡発掘調査報告書』
"	第37集	1998年『新町野遺跡発掘調査報告書』		第75集 2004年『江渡遺跡発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書第75集

江渡遺跡発掘調査報告書

発行年月日 平成16年3月31日

発 行 青森市教育委員会

〒030-8555 青森市中央一丁目22-5

TEL 017-734-1111

印 刷 第一印刷株式会社

〒038-0003 青森市石江字江渡3-1

TEL 017-782-2333